

靈界物語 第八卷 靈主體從 未の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第八卷』愛善世界社

1994(平成06)年04月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説 そうせつ

第一篇 智利の都 てる みやこ

第一章 朝日丸 あさひまる〔三五〕

第二章 五十韻〔三五二〕

第三章 身魂相應〔三五三〕

第四章 烏の妻〔三五四〕

第五章 三人世の元〔三五五〕

第六章 火の玉〔三五六〕

第二篇 四十八文字

第七章 蛸入道〔三五七〕

第八章 改心祈願〔三五八〕

第九章 鏡の池〔三五九〕

第一〇章 假名手本〔三六〇〕

第三篇 祕露より巴留へ

第一章 海の龍宮〔三六一〕

第二章 身代り〔三六二〕

第三章 修羅場〔三六三〕

第四章 祕露の邂逅〔三六四〕

第五章 ブラジル峠〔三六五〕

第六章 靈縛〔三六六〕

第七章 敵味方〔三六七〕

第八章 巴留の關守〔三六八〕

第四篇 巴留の國

第十九章 刹那心〔三六九〕

第二十章 張子の虎〔三七〇〕

第二十一章 瀧の村〔三七一〕

第二二章 五月姫さつきひめ〔三七二〕

第二三章 黒頭巾くろづきん〔三七三〕

第二四章 盲目審神めくらさには〔三七四〕

第二五章 火の車ひくるま〔三七五〕

第二六章 讚嘆ウロウロ〔三七六〕

第二七章 沙漠さばく〔三七七〕

第二八章 玉詩異たましい〔三七八〕

第二九章 原山祇はらやまし〔三七九〕

第五篇 宇都の國うづのくに

第三〇章 珍山峠つじやまたつげ〔三八〇〕

第三一章 谷間の温泉たにまをんせん〔三八一〕

第三二章 朝の紅顔あしたこうがん〔三八二〕

第三三章 天上眉毛 (三八三)

第三四章 烏天狗 (三八四)

第三五章 一二三世 (三八五)

第三六章 大蛇の背 (三八六)

第三七章 珍山彦 (三八七)

第三八章 華燭の典 (三八八)

第六篇 黄泉比良坂

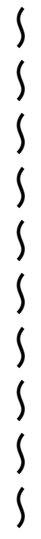
第三九章 言靈解一 (三八九)

第四〇章 言靈解二 (三九〇)

第四一章 言靈解三 (三九一)

第四二章 言靈解四 (三九二)

第四三章 言靈解五 (三九三)



序文 じよぶん

總じてこの靈界物語は、口述の最初に當り五百六十七節にて完成する考へを以て、一冊を五十節に刻み全十二冊の豫定のところ、到底是にてはその一部分をも講了すべからざるを覺り、本巻よりは一冊五十章組の規定を破り、口の車の行き突きばつたりに歩を進むる事と致しました。

抑もこの物語は、現、神、幽三界に涉つた神人の活動の一部を、神示の儘に述べたもので、今日の人々の耳には入り難く、また受取れない點も澤山あらうと思ひます。また各國の神話や、歴史等に現はれたる事實は、成る可くこの物語には載せない心算です。

要するに神話に漏れたる分のみを、茲に發表する事と致しました。信ずると否とは讀者の自由ですから、夢物語と思つて見て貰つても結構です。併し乍ら讀め

ば讀む程面白く精神上に一つの【光明を認め得る】事と信じます。

大正十一年二月十一日 紀元節に

龜岡 瑞祥閣に於て 王仁識

凡例

一、第七卷までは各巻五十章宛として編輯したものでありましたが、本巻以後は別にその制限を設けず隨意編輯することにしました。なほ参考資料として瑞月大先生がかつて五六七殿において講演されました古事記の言靈解を添附して置きました。

二、本巻は南亞米利加（高砂島）における宣傳隊の活動状況を口述されたものでありまして、蚊々虎（後に珍山彦）といふ木花姫命の化身が面白可笑しく、誠の道を説き諭す實況が巧みに描き出されてあります。

三、要するに栗原古城氏が「青い鳥のをしへ」の序文に、

「神のやうな靈智と、慈愛との極致に達した眞の哲人が、吾々俗衆に向つて説法する時には、直接吾々に「斯くせよ」「斯くするな」と命令するものはありませぬ。彼の爲すところは、月の照るが如く、花の笑ふが如く、ともすれば雷霆の轟くが如く、狂颯の叫ぶが如くであります。彼の言ふところは、取留も無き一場の夢物語の如く、或は少年の喜ぶお伽噺の如く、それを受ける人の心によつては、全く何の意味も成さぬ架空談としか見えませぬが、敬虔の心を持して深く考慮する人の心には、眞にこの上も無き靈性の糧であり、靈感の源泉なのであります。彼らは好んで高遠な思想を卑近な象徴に托し、迂路を辿つて吾々の心の眼を開かせやうとします。或は又、彼らの思ひ邪無き心から無意識に湧出した言葉が、斯る深甚微妙の意味を備へて現はれます。孰れにせよ、吾らは彼らの「考へよ」と言つた形式に従つて考へねばなりません。斯うすれば吾らの心の眼が漸次開けて往つて、彼らと自ら靈犀相通じて、共に手を握つて樂むところまで行けないとも限りませぬ」

とあります通り、「靈界物語」も全くこのやうなもので、實に言語に絶した無限

の意味があるものと信じます。すなはち吾々の工夫と修省とによつては、凶を變じて吉となし、禍を轉じて福とし、地獄の焦燥苦惱より花笑ひ鳥歌ふ天國樂土へ無事到着することができるのであります。

大正十一年二月十一日 紀元節の夕

龜岡 瑞祥閣に於て 編者識

總説

最も戦慄すべく、最も寒心すべき猛鷲の、暗雲の中より飛來して、聖處を荒し
暴威を振はむとする三日前の夜半、松雲閣に瑞月が心淋しく横臥せる枕頭に、忽
然として現はれたまへる教祖の神影、指示桿を以て、三四回疊を打ち賜ふ様、恰
も馬に鞭打つが如きその御模様、瑞月は直ちに起き直り、頓首合掌しながら、
『いよいよ明日より神界の御命の如く靈界物語の口述に着手致しますから、御安
心下さいませ』と申上げるや、直ちに打ちうなづき莞爾として貴き麗しき神姿を

隠させ賜ひました。それよりいよいよその翌日なる昨年十月十八日より着手することになりましたが、教祖の御加護日に月に加はり御蔭を以て病氣中にもかかはらず、漸く第八篇を口述し了る事を得ました。

神代に於ける神々様の世界宣傳の御模様は、本篇よりいよいよ明瞭になつて來ます。讀者の中には靈界物語は教祖の御意志に反したる著述の如く、誤解されて居る方々もある様に聞きますから、その誤りを解くために總説に代へ、一言茲に本書出版の教祖の神の御神慮に出でたる理由を簡単に説明して置きます。

大正十一年二月十一日 紀元節に

王仁

第一篇 智利の都

第一章 朝日丸（三五）

ひがしや西や北南のどかな春の海面を

出船入船眞帆片帆のり行く男子女子の

かげも静かに揺られつつみづさへ清き浪の上

日の出神の宣傳使乗せ行く船は朝日丸

御稜威も高き高砂の智利の都に進むなり

折から吹きくる東風に、船脚早く海面に漂ふ大小無数の島影を右に避け、左に
曲り、舟人の楫取り巧に天下の絶景を進みゆく。

東海の波を蹴つて踊り出でたる太陽も、漸く西天にその姿を没し、海面は烏羽玉の暗と化した。大小無数の漁火は、海面に明滅し漁夫の叫ぶ聲は、猛り狂ふ浪の音かと疑はるる許りなり。漁火の光は長く海中に垂れ、浪に揺られて蛟龍の海底より水面に昇るが如く、その壯觀譬ふるに物なく、海底の龍宮も忽ち靈光の燈火を點ずるかとはばかり疑はるるに至りけり。

數多の船客は、この光景を眺めて雑談に耽る。

甲「おい、猿世彦、スペリオル湖を渡つた時と此の海を渡る時と、何れ丈心持が違ふか」

猿世彦「ソナナことを誰に聞いたか、そりや他人の事だよ。貴様は高白山で如何だつたい」

駒山彦「高白山は高白山だ。浪の上を渡る時に山の話をする奴があるかい。木乃伊の化物の話なつと聽かして貰はうかい」

丙「互にソナナ昔の碌でもない失敗談を繰返すよりも、もつと氣の利いた話をしたら何うだい」

駒山彦「ウン、貴様はなんでも三五教とかの信者になつたと云ふことだが、三五教の教理を偉さうに宣傳使氣取りで、そこから中で喋つて居ると云ふことだが、一邊俺にも聴かして呉れないか」

丙「貴様のやうなウラル彦や、美山彦の崇敬者に説教は禁物だ。又海の上でソナ話を始めると、木乃伊になると困るから止めて置かうかい。俺を「貴様は今信者だ」と言うたが、乞食の子でも三年すれば三つになると云ふことを知らないのか。初めは信者でも今は立派な押も押されもせぬ三五教の宣傳使様だ。「おい、聴かせる」なんてソナ失禮なことを、生神の宣傳使に向つて云ふ奴があるかい。吾々は恐れ多くも、天教山の木の花姫命の宣傳使じゃぞ」

猿世彦「さうだらう、氣違ひの癡狂山だらう」

丙「木乃伊の知つたことかい。木乃伊が海へ嵌りよつて、化けて鰻になると云ふことがある。彼の日の光に照して見よ。海の底に澤山貴様の友達が泳いで居るわい、木乃伊が鰻になつて、鰻の頭に蝨が生て世界の事は、何一つ鰻の盲目神が三五教の教理を聴いたところで分るものでない。言はぬは言ふに彌勝るだよ」

猿世彦は面膨らして、丙の顔を睨みつける。其の膨れ面は、漁火に照されて面白く明瞭と見えたり。

「よう、猿世、大分に膨れて居るな」

と云はれて、猿世彦はますます膨れる。暗の中から二三人の女の聲として、

「やあ、貴方は承はれば三五教の宣傳使とか聴きましたか、斯うして廣い海を無難に氣樂に渡らして頂くのも、皆神様の御神徳だと思ひます。斯う云ふ結構な機會はありません、何卒一つ三五教の教を聴かして下さいませぬか。吾々は熊襲の國の者であります」

と誠心から頼み入るにぞ、宣傳使は二人に構はず、

「何れの方が、何分暗夜の事とて御顔も分りませぬが、私は三五教の宣傳使の卵ですよ。最前から二人の男が、餘り豪さうに法螺を吹くものですから、俺は三五教の宣傳使だと威張つて見せたものの私も熊襲の者で、未だ宣傳使の卵で自稱候補者です。何でも日の出神とか云ふ立派な宣傳使が、高砂の島へ行かれたとか、行かれるとか云ふことを、風の便りに聞いたので高砂の智利の都に行つて、其の

御方に會つて見たいと思ふのです」

暗黒の中より女の聲、

「貴方は其所までの御熱心なら、三五教の教理は少しは御存じでせう。一步でも先に聞いた者は先輩ですから、貴方の御聴きになつた事だけなつと話して下さい」

猿世彦「世間には、物好きもあるものだなあ。何方か知らぬが、コンナ宣傳使に聞いたつて何が分るものか。この男はな、偉さうな面付して宣傳使の卵だと言つて、傲然と構へて居るが、此奴の素性を洗つて見れば、元は龍宮城に居つて、其處を追ひ出され、鬼城山の食客をしてゐて、鬼城山でまた失敗をやつて縮尻つて、改心したとか云つて常世の國を遁げ出し、筑紫の國で馬鹿の限り、惡の限りを盡して再び元の古巢へ歸る所なのです。此奴は清彦ナンテ名は立派だが、實は濁彦の、泥彦の、穴彦といふ男だ。彼岸過ぎの蛇の様に、穴ばかり狙つて居るのだ。貴方は女の方と見えますが、コンナ奴に相手になりなざるな。穴恐ろしい奴ですよ。此奴は「うまうま」ハマる穴が無いので穴無い教の宣傳使ナンテ吐かすのだ。アハ、ハ、ハ、」

と大口を開けて力一杯嘲りける。

清彦「コラ猿、何を吐かすか。貴様も鬼城山で國照姫の御主人面をして偉さうに構へて居つたが、何時の間にやら棒振彦にその位地を奪られよつて、馬鹿の美山彦の家來となり、どどのつまりは大勢のものに愛想を盡かされて、いよいよ鬼城山を泣く泣く猿世彦の馬鹿者、他の穴をほぜくると自分の穴が出て来るぞ。俺は縦から見ても横から見ても立派な智仁勇兼備の穴の無い男だ。それで三五教の宣傳使様だ。

穴を出て穴に入るまで穴の世話 穴おもしろき穴の世の中

人の穴は、探らむがよからうぞ。ナンボ猿世彦でも、猿の人真似ばかりしよつて恥を搔くよりも、これから改心して庚申さまの眷屬のやうに見猿、聞か猿、言は猿を守るが、貴様の利益だ。愚圖々々言うと又木乃伊にしてやらうか」
斯くの如く雑談に耽つて居る。春の夜は短く明けて再び東天に陽の影が映し、一同の顔にも夜が明けたやうに元氣輝きにけり。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 外山豊二録)

第二章 五十韻〔三五二〕

日の出神は雑談を床しげに、世道人心の傾向を探る羅針盤として耳を澄まして船の小隅に屈み、素知らぬ振りに聞き流しめたり。清彦の自稱宣傳使は諄々として三五教の宣傳歌を歌ひ始めたり。

駒山彦、猿世彦はウラル彦の宣傳歌を歌うて混ぜ返しに全力を注ぐ。されど船中の人々は何故か三五教の清彦に同情し、清彦の説教を頻りに求めて止まざりける。

清彦は得意満面に溢れて矛盾脱線だらけの講釋を始め且つ鼻高々と、
「世の中の事は一切萬事この方の心の鏡に照り渡つてゐる。大は宇宙の根本より小は蝨の腹の中までよく透き通つてゐる。三五教の宣傳使清彦とは吾事である。何を問はれても知らぬといふ事はない。三五教の一つも缺點のない、いはゆる穴の無い宣傳使だ」
と大法螺を吹き立てける。

甲 貴郎は小野の小町の再來か、穴が無いと仰有つたが大小便はどうなさりますか

清彦 夫れは穴ではない、筒と洞とだ。筒と洞とはあつても穴は無い

猿世彦 筒ツ洞を吹くない。貴様の耳、鼻、口はそりや何だい。夫れでも穴が無いのか。さうだらう、麝香と屁の臭とを一緒にしたり、酒と泥水の味を一緒にしたり、鬼の叫び聲と天人の音楽とを「ごつちや」混ぜにする宣傳使だから穴が塞がつて、三五教だらうよ。イヒ、ヒ、ヒ、ヒ

清彦 黙つて此方の宣傳を聴け、酒喰ひ教奴が。ウラル彦の唱へだした大中教の奴は、何時も酒に酔つたやうな、支離滅裂な説教を吹き立てよつて人を困らす駒山彦、人真似の上手な猿の尻笑ひの猿世彦だよ

猿、駒二人は烈火の如く怒つて清彦に飛びつくを、清彦は、

何を小癩なツ

と云ひながら拳骨を固めて二人の頭を「ばかり」とブンなぐる。二人は左右の手を確と握り、

「コラ、清彦、三五教は直日に見直せ聞き直せ、といふ教ださうな。俺が貴様を
【ブン】擲つても、眞に三五教の信者なら見直すのぢやぞよ」

と云ひながら、

「この腰拔野郎」

と又もや拳骨を固めて「ポカツ」と打つ。

猿世彦「コラ清彦、三五教は聞き直すのだぞ。馬鹿野郎と云はれても聞き直せ。

腰拔野郎、穴探し野郎」

駒山彦「三五教は宣り直すのだ。今まで俺等の缺點を大勢の中で吹き立てよつて、

これも今此處で宣り直さぬか。自分の悪いことは棚から降して【すつかり】ここ

で白状するのだ。さうして俺等の悪口を云つたことを残らず嘘言でございました

と船客一同に嘘言吐きのお詫をするのだ。貴様が今ここで大恥をかくのも三五教

の教理からいへば惟神だ、御經綸だ」

清彦「エヘン、オホン、アハン、ウフン、イヒン」

駒山彦「ソナ事を云つて分るかい」

清彦「カンカン」

猿世彦「カンカンぢやない、堪忍して呉れと云へ」

清彦「キンキンだ」

猿世彦「謹慎すると云ふのか」

清彦「謹聴せい、この方の天來の大福音を。ケン、ケン、喧譁なら何處迄も行くぞ、コンコンさまに抓まれよつて、クンクンと苦しんで吠面かわいてサツサツと

鬼城山を逃げ出し、シ、死物狂ひになつて、ス、凄目にあつて煤煙のやうな黒い顔をして、セ、雪隠蟲奴が糞垂れ腰になつて、ソ、其處らあたりを、

夕、立ちん坊の乞食姿となり……」

猿世彦「貴様何を吐かす。大勢の前で人に恥を搔かせよつてちつとは前後を考へ

ぬか」

清彦「ち、ちつとは貴様も考へて見い。恥辱と思ふなら【もちつと】智慧を光

らして、人の缺點をなぜ包まぬか。人を呪へば穴二つだ。三五教には穴は無いぞ。ツ、聾の奴盲人の大中教とは、譯が違ふのだ。テ、天然棒の星當り、手癖の

悪い猿駒の、ト、徹底どんづまりは栃麵棒の頓珍漢の蜻蛉返りの……」

猿世彦「コラ清彦、口に關所が無いと思つてあまり馬鹿にすな。何を吐かしよるのだ」

清彦「ナ、何も彼も吐かしよるので情なからう。情なくとも何ほど難儀でも泣面かわいても、情容赦があつて堪まらうかい、スペリオル湖の木乃伊先生が。

二、憎まれ子世に覇張る。憎まれても睨まれても、二進も三進も口の開ぬやうにしてやるのだよ、ウフ、、、」

猿世彦「清彦、貴様あまりぢやないか」

とまた「ボカン」となぐる。

猿世彦「サー吐かすなら吐かして見、また拳骨のお見舞だぞ」

清彦「又、吐かさいでかい。糠に釘、豆腐に鋸、盗人猛々しいとは貴様の事だ。

人の家へ又いと這入よつて、人の物を何しよつて、スーと出て來よる手癖の悪い又スー人奴が、ネ、捻け曲つた奴根性、ノ、野太い野良猫奴が、ソコラぢ

うを「のさば」り歩きよつて、ハ、あまりをかしうて笑ひが止まらぬ。恥を知

れ、薄情者、禿頭、腹が立つたら【もつと】もつと擲れ、俺の頭は鐵で作つてある。終には貴様の手が痺れるだけだ。ヒ、非道い目に遇ふぞ。僻み根性の非常識の【ヒンダのかす】、蟻蛙の放尻腰のヒンガラ眼、フ、不思議な猿のやうな、面をふくらしよつて、不足さうに梟鳥の宵企み、晝目の見えぬ盲ども、へ、屁なと吸はしてやらうか、屁古垂れ奴。返答は【どう】だ、閉口したか。ホ、呆け野郎、【ほろ】年寄つて若い者の尻を追ひまはして肱鐵を喰ひよつて、マ、眞赤な恥を柿の【へた】、下手なことばかりして見つけられ大地に屁太張つて屁古垂腰で、閉口【さらし】た猿世彦、マ、間男好の駒山彦、困つた腰抜け困りもの、ミ、身の上知らずの蚯蚓蟲、腐つた土の中から這ひ出しよつて、大地を我物顔に【のたくり】廻り、酷い日光に照されて、體は干乾の【カンピントン】、駒山彦の【カンピントン】に猿世彦の木乃伊とはよく揃つたものだワイ』

猿、駒、一時に拳骨を固めて、

「エ、やかましいワイ、もつと拳骨をお見舞申さうかい』

と又もや打ちかかる。

清彦「ム、ム、【むかづく】か、無念なか、【むかつ】腹が立つか、俺のいふことを無理と見るか、蟲【けら】同様の駒猿奴、メ、メ、眼を剥きよつて其態は何だ。迷惑さうな面を曝しよつて面目玉を全潰しにされて、【めそめそ】と泣きだしさうな其態、面喰つたか盲ども、モ、もうこれで許してやらうと思つたが盲目同様の貴様たちは物が分らぬから、【もつと】揉んでやらう。揉んでやらうといつても按摩ぢやないぞ」

猿、駒「人を馬鹿にするない、黙つて聞いてをりや言靈の練習をしよつて、ヤヤ、喧しいワイ、イ、何時までもウ、迂闊者の狼狽者の嘘言吐きの言靈も【ウンザリ】してしまふワイ。エ、偉さうに三五教の宣傳使ぢやなんて、オ、オ、大きな法螺ばかり吹きよつてお尻が呆れるわ」

清彦「コラ貴様らは何時の間にか俺のお株を占領しよつて。ヤイ貴様は眞似した心組だが、ヤイウエオといふことが何處にある。俺の云ふことをもう一度聞け、ヤ、ヤ、やいやいや吐かすな八岐大蛇の乾兒奴。イ、融に最後屁をひっかけられたやうな面つきをしよつて、ユ、ユ、言ひ損なひばかりしよつて、エ、エ、えい加減に

恥を知つたがよからう。ヨ、ようソナ馬鹿氣たことが云へたものだ、ラ、
猿、駒「もうこれで耐へてやるから後は止めてくれ。云はしておけば終にはドン
ナことを吐しよるか分つたものぢやないワイ」
清彦「ラ、埒もない、リ、理屈を竝べよつて、ル、留守の家ばかり狙つて
歩きよつて、レ、連子窓を暗の夜に覗いて廻りよつて、女の臭い尻をつけ狙ふ、
口、碌でなし奴が、論にも杭にもかかつた代物ぢやないぞ。許すの許さぬのつ
てワ、笑はしやがる、己のことを棚に上げて威張り散らして、井戸の底
の蝶螈奴がウ、五月蠅いで、もう止めてやらうか、エ、遠慮しといてやらう
か、エー加減に甚う俺も疲れたからな、ヲ、終りだ」
猿、駒「もう貴様そこまで五十韻を竝べよつたら得心だらうかい、それだけ缺點
を探したらもう探がさうたつて有りはせまい。【さつぱり】穴無教だ、南無三五
教の宣傳使様、アハ、イヒ、ウフ、エヘ、オホ、」

(大正一一・二・六 舊一・一〇 加藤明子録)

第三章 身魂相應〔三五三〕

猿世彦、駒山彦雙方一度に、清彦に掴みかかりし手を放して、猿世彦は、

「清彦、貴様は矢張り宣傳使だ。脱線したことを上手にべらべらと饒舌りよる。

たとへ間違うてをつても、それだけ辨が廻れば穴があつても、塞がつて了ふワ。

法螺の通る名詮自稱の三五教の宣傳使様だよ。よう大きな法螺を吹いたものだ。

一つ退屈ざましに聞かして貰はうかい」

清彦「宣傳使にお訊ねするのに聞かして貰はうかいとは失敬な、懸河の辨舌、布

留那の雄辨者とは此方のことだよ。身魂も清き清彦の聖き教を耳を清めてトツク

りと聽け」

猿、駒「偉い權幕だなあ、宇宙萬有一切のことを説き諭すといふ宣傳使様だ。な

んでも御存じだらう」

清彦「勿論のことだ。三千世界のことなら、何でも問うてくれ。詳細なる解決を

與へて遣はすとは申さぬワイ」

猿世彦「三千世界で思ひだした。三五教には三千世界一度に開く梅の花、開いて散りて實を結ぶとか、時鳥聲は聞けども姿は見えぬ、とかいふ教があるねー。ありや一體何といふことだい……ドツコイ……何といふことですか、謹んで御教示を承はりませう」

駒山彦「ソナイに叮嚀に言うと言損がいくよ」

猿世彦「黙つてをれ、只で言はずのなもの」

駒山彦「貴様は猿世彦の他人真似を、また他處でしやうと思ふて訊くのだらう」

猿世彦「モシモシ清彦の宣傳使様、最前の三千世界の話を聞かして下さいナ」

清彦「エヘン、オホン、アハン」

猿世彦「また五十韻か」

清彦「俺の癖だ、マアしつかり聞け。三千世界一度に開く梅の花といふことはナ、今日の世の中は米喰ふ蟲が澤山殖えてきて、おまけに遊ぶ奴ばかりで、米が足らぬ。一方には一年中米の顔を見たことの無い、草や木を食つてをる人間もあるのだ。それで神様は誰も彼も苦樂を共にせよと仰有つて、世界中がお粥を食へと仰

有るのだよ。それも一ぺんに五膳も、八膳も食うてはいかぬ。一ぺんに三膳より餘計はいかぬ。そこで三膳にせー粥一度といふのだよ」

猿世彦「成程それも面白いが、開く梅の花といふのは如何だい」

清彦「大きな口を開いて、五郎八茶碗に粥を盛つて、お前たちのやうな鼻高が粥を啜ると鼻が粥に埋つてしまふのだ。それで開く埋めの鼻だ。開いて散りて實を結ぶといふことは天井裏に鼠の走る姿の映るやうな薄い粥でも吸うとると、「ちつと」は米粒の實をスウのだ。それで大きな口を開いて、ちつと實をもスウといふのだよ」

猿世彦「人を莫迦にしよる。清彦、眞面目に説教をせぬかい、また「ブン」なくるぞ」

清彦「貴様たちにコンナ高遠無量なる神界の經綸を話して聞かしたつて、耳の三五教だもの眞正の事が耳に這入る様になつてから聞かして遣らう。この三五教は身魂相應に取れる教だから、初めて三つ子に聖賢の教を説いたところで、石地藏に説教するやうなものだ。まして鰻や、蚯蚓の干乾に、眞正のことを言うて堪る

かい。神魂を早く研げ、研いたら神魂相應の説教をしてやるワイ」

駒山彦「莫迦にしよるない。しかし長い浪の上の旅だから、軽口を聞くと思えば、

辛抱ができる。モツト聞かしてくれ」

清彦「貴様らにわかる範囲内の講釋をしてやらうかい」

猿世彦「時鳥聲は聞けども姿は見えぬといふことは、一體どういふことですかい

ナ」

清彦「そりや貴様の身體に朝夕ついてゐるものだ。粥を食ふと糞が軟かくなつて、

雪隠にゆくとポトポトと音がするだらう。さうして後から芋粥の妄念がスーと出

る。それで糞がポトポト、屁がスーだ。糞は肥料になつて利くから、「こゑ」は

「きけ」どもだ。スーとでた屁の形は見えぬだらう。それで、スーとでた屁の姿

は見えぬと神様が仰有るのだよ」

猿世彦「馬鹿ッ」

と大喝する。船客一同はワツと一度に笑ひさざめく。

このとき船の一隅より容貌温順にして、寛仁大度の氣に充ち、思慮高遠にして

智徳ちとく勝すぐれ、文武ぶんぶりやう兩道だう兼備けんびせるごとき一大いちだい神人しんじんは起たつて宣傳せんでん歌かを歌うたひ始はじめけり。

波風なみかぜ荒あきアラビヤの

筑紫つくしの島しまを後あとに見みて

神かみの御み稜いづ威たかさも高砂たかさごの

智利てるの都みやこに進すすみゆく

惠めぐみも廣ひろき和田わだの原はら

御み稜いづ威ふかも深かいき海洋やうの

底そこひも知しれぬ皇神すめかみの

仕組しぐみの絲いとに操あやつられ

心こころも和なぎし波なみの上うへ

鬼城きじやうの山やまを後あとに見みて

慣なれにし里さとを猿世彦ざるよひこ

焦あせる心こころの駒山彦こまやまひこが

流ながれてここに清彦きよひこの

神かみの命みことの宣傳せんでん使し

右みぎと左ひだりに詰寄つめよつて

蝾螺さざえの拳こぶしを固かためつつ

痛いた々いたしくも打うちかかる

身魂みたまも清きよき清彦きよひこが

堪こらへて忍しのぶ眞心まごころは

皇大神すめおほかみの御心みこころに

叶かなひ奉まつらむ天津日あまつひの

堅磐かきは常磐ときはに智利てるの國くに

檻褸つづれの錦にしきは纏まとへども

心こころの空そらは照妙てるたへの

綾あやの錦にしきに包つつまれて

千尋ちひろの底そこの海うみよりも

深ふかき罪科つみとが贖あがなひて

今いまは貴たつとき宣傳せんでん使し

三あな五な教ひけつを開ひらきゆく

吾われは暗夜やみよを照てらすてふ

日ひの出神でのかみの宣傳せんでん使し

端はしなく此處ここに教のりの舟ふね

心こころを一つひとに托生たくしやうの

救すくひの舟ふねに帆ほをあげて

荒浪あらなみ猛たける海原うなばらや

黒雲くろくもつつむ常世とこよくに國

天あまの岩戸いはとをおしあけて

日ひの出神でのかみの神國かみにと

造り固つくめむ宣傳せんでん使し

造り固つくめむ宣傳せんでん使し」

と爽さわやかに歌うたひ出だしたる神人しんじんあり。清彦きよひこはこの聲こゑに驚おどろき合掌がつしやうしながら、日ひの出神でのかみの
英姿えいしを伏拜ふしをがみ、落涙らくるいに咽むせびける。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 高橋常祥録)

第四章 烏の妻（三五四）

波は高砂日は照り渡る

智利の都に月は澄む

と、船頭は節面白く海風に聲をさらしながら唄ひはじめたり。日の出神は船中のひとびとに對して、天地の神の高徳を諄々と説き始めたる折しも、俄に一天掻き曇り、颯風吹き荒み、波は山嶽のごとく立ちはじめ、今まで元氣張つてゐた猿世彦、駒山彦は、蒼白な顔になり、片隅にブルブルと慄へる。數多の船客は、何れも船底にかざりつき我が命は風前の燈火かと不安の念に驅られて、口々に何事かを祈り始めけり。

船中は俄に人聲ピタリと止り、ただ小さき祈願の聲のするのみなりき。波の音はますます高く、時々潮を船に浴せて猛り狂ふ。この時日の出神は、聲を張り上げて大音聲に呼ばはりたまふ。

高天原を知らし食す

天の御柱大神の

神勅畏み天の下

四方の國々隈もなく

神の教を宣べ傳ふ

闇夜を照らす宣傳使

日の出神の鹿島立ち

神の御ため國のため

世人を救ふそのために

潮の八百路の八鹽路の

潮を分けつつ進み行く

吾は尊き神の御子

瑞の教を謹みて

聽く諸人の眞心を

憫みたまへ天津神

救はせたまへ國津神

科戸の神や水分の

正しき神は何事ぞ

波路も高く龍神の

底の藻屑と鳴門灘

渦巻きわたる海原も

御國を思ふ眞心の

道に通ひし宣傳使

吾が言靈は天地に

充てる誠の神の聲

大海原を知ろし食す

海原彦や豊玉姫の

神の命は今いづく

神に祀れる玉依姫の
神の命はいま何處
雨風繁く波高く
この諸人を脅かす
大綿津見の枉神を
伊吹きに被へ吹き被へ
伊吹き被ふの力無く
吾が言靈の聞えずば
吾はこれより天地の
神に代りて三五の
言擧げなさむ綿津神
科戸の彦や科戸姫
疾く凧ぎ渡れ静まれよ
とく凧ぎ渡れ静まれよ

と、清き言靈を風に向つて述べ立てたまへば、さしも猛烈なりし暴風も、車軸を流す大雨も、忽然として静まり、天津御空は黒雲の上衣を脱ぎて、紺碧の肌を現はし、日は晃々として中天に輝き、海の諸鳥は悠々として翼をひろげ、頭上に高く喜ばしき聲を張り上げて、口々に叫びはじめけり。紺碧の海面は、あたかも鏡のごとく凧ぎ渡り、地獄を出でて天國の春に逢うたるとき心地せられ、船中の諸人は、ほとんど蘇生したる面色にて、日の出神の身邊に寄り集まり、その神徳

を感謝し、なほも進みて教理を拜聴することとなりぬ。船中の人々は日の出神の神徳に感じ、心の底より信仰の念を起し、なほも進みてその教理を聴聞したりける。

ここに清彦は、今までの凡ての罪惡を悔い改め、日の出神の弟子となり、高砂島に宣傳を試むる事となりぬ。猿世彦、駒山彦は、清彦の後を追ひて、何事か謀し合せ、高砂島に上陸したりけり。

またもや船中に雑談の花は咲き出でにけり。

甲「やれやれ恐ろしい事だつたのう。『すんで』の事で龍宮行きをする所だつたが、渡る浮世に鬼は無い、天道は人を殺さずとはよく言つたものだ。日の出神様がこの船に乗つて居られなかつたら、吾々は鱧の餌食になつて了つたかも知れない。若しもソナ事があつたら、俺は死ぬのは天命だと思つて諦めるが、國に残つた妻や子が、どうして月日を送るだらう。女房が「あゝ戀しい民さまは」と云つて泣くかも知れぬ」

乙「コナ處でのろけるない。貴様が死んだつて泣く者があるか。村中の惡者が

無くなつたと云つて、餅でも搗いて祝ふ者もあらうし、貴様の嬢は、鹿公と入魂だから、邪魔が拂はれた、目の上の瘤が取れたと云うて、餅でも搗いて祝ふかも知れぬよ。泣く者と云つたら烏か、柿の木に蝉がとまつて啼く位だ。アツハツハ、ハ、ハ、ハ

民 馬鹿にするない、死んで喜ぶ奴が広い世界に有つて堪るか。天にも地にも、一人の夫一人の女房だ。俺が國許を出立する時、女房が俺の袂に縋りついて、ドウゾ一日も早う歸つて来て頂戴ネ、あなたのお顔が見えねば夜も明けぬ、日も暮れぬ、毎日高砂の空を眺めて待つて居ます、エヘン、あの優しい顔で泣きよつたぞ。そこを貴様に見せてやりたかつたワイ

乙 馬鹿にするない。あの優しい嬢も有つたものかい、頭の禿げた神樂鼻の、鰐口の團栗目の、天下一品珍無類の御面相の別嬢を、烏だつて顧みるものは有りやしないよ

丙 左様も言はれぬぞ。何時やらも野良へ出て働いて居る時に、側の森に烏が來よつて、カカア、カカアと呼んで居たよ

民「ソナ話は止めにして神様を拜まぬかい。また波でも立つたら、今度はもう助かりつこは無いぞ」

丁「此間も、面那藝の宣使さまとかが船に乗つて、筑紫の島から天教山へ行かれる途中に海が荒れて船は暗礁にぶつかり、メキメキと壊れて了つた。そして客は残らず死んで了つたと云ふことだよ」

民「その面那藝の宣使はどう成つたのだ。ソナ時には此處に御座る日の出神様の様に、何故神徳をよう現さなかつたのだらう。面那藝の司とは噂に聞く宣傳使でないか」

乙「さう、宣傳使だ。併し神徳が無いから、危急存亡の場合に人を救ふ様な事は、薩張りよう「センデン使」だよ。それで自分も一緒にぶくぶくと脆くも沈んで了つて、あゝあゝ苦しい辛い難儀な事に成つたと泡を吹いた。そこで「つらなぎ」の司ぢや。誰も彼も皆辛い難儀な目に逢つて、「つらなぎ」のかみに成つて了つたのだ。最前のやうに、清彦さまの様な説教をする宣傳使もあるし、若しも日の出神が此の船に乗つて居られ無かつたら清彦の宣傳使が、また面那藝の司の様な

運命うんめいになつたかも知れぬ。さうすれば俺おいらも皆みな面那藝つらなぎのめに逢あうとるのだ。日ひの出神でのかみ様の御神徳ごしんとくを忘わすれてはならぬぞ、あゝ有難ありがたい、有難ありがたい□と口々くちぐちに私語ささやいてゐる。日ひの出神でのかみはこの雑談ざつだん中に、面那藝つらなぎの司つかさの乗のれる船ふねの沈没ちんぼつした事をこと聞いて胸むねを躍をどらせ、その顔かほには、颯さつと不安ふあんの色漂いろただよひにける。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 東尾吉雄録)

第五章 三人世さんにんよの元もと (三五五)

日ひの出神でのかみはこの雑談ざつだんを聴きき、默然もくねんとして、稍ややしばし思おもひに沈しづみけるが、忽たちまち清彦きよひこに向むかひ、言葉ことば嚴おこかに、

「清彦きよひこ、吾われはこれより智利てりの都みやこに出張しゅつちやうすることを見合みあはせ、面那藝つらなぎの司かみを救すくはむため一先ひとまづ龍宮りうぐうを探險たんけんせむと思おもふ。吾われは汝なんぢの身邊しんぺんを守護しゆごするから、心配しんぱいなく智利チリの都みやこに致いたつて三五教あななひけうを宣傳せんてんせよ。高砂たかさごの島しまには龍世たつよ姫神ひめのかみ、月照彦神つきてるひのかみ守護しゆごし給たまへば

勇むで行け。また猿世彦、駒山彦も、今迄の心を改め神の教に随へよ。船の諸人よ。吾れはこれよりお別れ申さむ」

と云ふより早く身を躍らして、海中へ飛び込み玉へば、清彦を始め諸人は、周章狼狽、

「あゝ身投げだ身投げだ」

と口々に叫ぶ。清彦は舷頭に立ち、聲を限りに、

「日の出神様 日の出神様」

と號泣したりしが、遙の海面に忽然として人影現はれたり。よくよく見れば日の

出神は、巨大なる龜の背に乗り、悠々として、彼方を指して進み行く。清彦は、

猿世彦、駒山彦に向ひ、

「あの方は日の出神だぞ。今のお詞を聞いたか。俺はこれから龍宮へ往つて来る

からお前たちは心配するな、清彦守つてやらうと仰しやつたであらうがナ。日の

出神の御魂の憑依つた清彦は今迄とは違ふぞ。これから俺を日の出神と崇めまつ

れよ。ドンナ御神徳でもお目にかけてやる」

猿世彦「フム、目から火の出の神の、臀から屁の出の神奴が、人を盲目にしよつて、尻が呆れるわい」

駒山彦「尻から屁の出の、何んにもよう宣傳使様、宣傳歌とやらを聴かして貰はうかい」

清彦「日の出神は、龜に乗つて龍宮へ往かれた。そこであの廣い高砂の都を、俺が拓くのだ。貴様もこれから高砂の島へ行くのなら、俺の許しがなくては上陸する事はまかりならぬぞ」

駒山彦「俄に、鉛の天神様見たいに、燥ぎよつて、ちつと海の水でもぶっかけて濕してやらうか」

猿世彦「コラコラ ソンナ暴言を吐くな、結構な宣傳使様だ。然し俺らも三五教の、一つ宣傳使に化けて、高砂の島を宣傳したらどうだらう」

駒山彦「面白からう、オイ日の出神さま、ドッコイドッコイ。モシモシ日の出宣傳使様、わたしを貴所の弟子にして下されいな」

清彦「改心いたせば許してやらう」

猿世彦さるよひこ「へん、偉えらさうに仰あふせられますワイ。改心かいしんが聞きいて呆あきれるワ」

清彦きよひこは得意とくいぜん然ぜんとして宣傳せんでん歌かを歌うたひ出だしたり。

「神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて別わける

この世よを造つくりし神直日かむなほひ 御魂みたまも廣ひろき大直日おほなほひ

ただ何事なにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほせ聞きき直なほせ

身みの過あやまちは宣のり直なほせ」

駒山彦こまやまひこ「結構けつこうな歌うただ喃のつ、一ひとつやつて見みやうかい、……龜かめが表おもてに現あらはれて、日ひの出で

神かみを乗のせて行ゆく……」

猿世彦さるよひこ「オイ違ちがふぞ……龜かめが表おもてに現あらはれて、日ひの出で神のかみを乗のせて行ゆく、……ソソンナ

馬鹿ばかな事ことがあるかい、神かみが表おもてに現あらはれてと言いふのだよ」

駒山彦こまやまひこ「嬢かかあが表おもてに現あらはれて、猿世さるよを棄すてて鹿しかに從つく。ただ何事なにごとも人ひとの世よは、嬢かかあの

すべたに身みを任まかせ、船ふねから龜かめに乘のり直なほせ」

猿世彦「馬鹿ツ、ソナ事で宣傳使になれるかい。貴様の耳は木耳か、節穴かい」
駒山彦「猿世の泣き聲「きくらげ」の、嬬左衛門鹿が奪る、嬬左衛門鹿が奪る、
鹿がお龜と乗りかへて……」

猿世彦「またソナ事を言う」と風だぞ、浪が立つぞ」

駒山彦「大丈夫だ。日の出神さまがいらつしやるもの」

猿世彦「コンナ日の出神が何になるかい、俄日の出神だ。まあまあ前のが日の出
神なら、こいつは、ドツコイこの御方は日暮神位なものだよ。そして貴様は夜半
の神だよ」

と無駄口を叩いてゐる。船は漸くにして智利の國の港に着きぬ。三人は一目散に
船を飛び出し、どんどんと奥深く進みゆく。

清彦「貴様ら二人は日の出神の御伴は叶はぬぞ。貴様みたやうな、瓢箪や、徳利
面した奴を美人の叢淵地たる高砂島を伴れて歩くと、俺までが馬鹿に見えて仕方
がないから、ここで三人は別れて、思ひ思ひに宣傳に行かうかい」

猿世彦「オイ清彦、そりやあんまりじやないか。今まで俺の居つた鬼城山に世話

になつて居つて、ちつたあ恩も知つとらう。なぜ伴れて行かぬか、幸ひ高砂の人
間は吾々の素性はちつとも知らないから、清彦は天下に聲望高き日の出神さまと
なり、この方さまは荒のカミとなり、駒山彦は雨のカミとなつて、一つ高砂島を
日和にしたり、大風にしたり雨にしたりして、神力を現はし、肝玉を潰さしてや
つたら、感心するかも知れぬよ。さうだ三人寄れば文殊の智慧、我々三人は三人
世の元だ。結構々々と言はれて、一つ無鳥郷の蝙蝠でも氣取つたら何うだらうナ
ア

清彦「蝙蝠は御免だ、あいつは日の暮ばかり出る奴だ。俺は日の暮のカミぢやな
い。日の出神じやからなあ、まあ山奥にでも這入つて、今晚はゆつくり相談でも
しようかい」
と言ひながら樹木鬱蒼たる森林を目がけて、清彦は足を速めける。二人はぶつぶ
つ小言を言ひながら、清彦の後を追ふ。日は西山に没し、鼻を抓まれても判らぬ
やうな闇の帳に鎖されたるに、清彦は闇に紛れて、二人を置去りにし、何處とも
なく姿を隠したりけり。

第六章 火の玉(三五六)

清彦は猿世彦、駒山彦の二人を、闇の谷間に置き去りにして、自分はコソコソと谷を降り、夜晝大道を闊歩しつづ、智利の都に肩臂怒らし脚を速めけるが、日も黄昏に近づき、疲勞れ果てて、路傍の芝生に腰打ち掛けて獨語。

「あゝあゝ、とうとう厄介者を撒いてやつた。この廣い高砂島だ。滅多に出會すこともあるまい。彼奴ら二人が踵いて居ると、氣がひけて仕方がない。日の出神になりすまして居る此方を、清彦と云ひよるものだから、せつかく信仰をした信者までが、愛想をつかす様な事があつては、百日の説法屁一つになつてしまふ。まあまあ、是で一と安心だ」

夜の帳は下されて、埒に歸る鳥の聲さへも、聞えなくなりて來たりぬ。このと

き闇を縫うて怪しき聲聞え來たる。清彦は耳を澄まして聞き入りぬ。

「偽の日の出神の宣傳使。俺ら二人を深山の奥へ、連れて行きよつて、闇に紛れて驅出したる、心の暗い、身魂の悪い、闇雲の宣傳使、もう是からは俺らは聲の續く限り、假令清彦が天を翔り、地を潛らうとも、一人と二人ぢや。二人が力を協して、清彦の缺點を剥いてやらう。オーイ智利の都の人たちよ、日の出神と云ふ奴が現はれて來ても相手にするなよ。彼奴は山師だ。偽物だ」
と呶鳴りながら、闇を破つて行き過ぎる。清彦は吐息を漏らし、

「あーあー、悪い蟲が「ひつ」着きよつたものだナア。鳥糞桶に足を突込んだとは、此事だな。今までの清彦なら、彼奴の聲を目標に、後から往つて、あの禿頭を目がけ、ポカンとやつてやるのだが、三五教の教理は何處までも、忍ばねばならぬ。腹を立てて神慮に背き、大事を過る様な事があつては、それこそ日の出神様に申譯はない。俺がいま日の出神と云つて、この島へ渡つたのも、決して私の爲ではない。日の出神様が、俺の靈魂が守護するから、俺の代りになつて往け、と仰有つたからだ。それだから自分が日の出神といった所が何が悪からう。清彦

といふ名は世界中に、悪い奴だと響いて居る。何んぼ神の道は、正直にしないで
はならなくつても、一つは方便を使はなくては、鬼の様に云はれた鬼城山の清彦
では、相手になつて呉れる者もありやしない。それでは人を改心さすことも、神
徳を擴むることも、絶対に不可能だ。俺の名を聞くと泣いた兒も、泣き止むとい
ふ位、世界に恐怖がられて居るのだから、何處までも日の出神で行かねばならぬ。
それにつけても二人の奴、吾々の行く先々を、今の様なこと云つて、歩かれては
耐つたものぢやない。ア、思へば昔の傷が今に報うて來たのか。エ、残念なこと
だ」

と思はず大聲に叫びゐる。猿世彦は小聲で、

「おい駒山彦、的様の聲だぜ。何處か此處らに、闇に紛れて潜伏しとるらしいぞ、
野郎だ。いぶ弱りよつたと見えるな。おいもう一つ大きな聲で吠鳴つてやるかい」

このとき前方より闇を照して唸を立てながら、此方に向つて飛び來る火の玉あ
り、清彦の前に墜落するよと見るまに、清彦は闇中に光を現はして、立派なる日
の出神と少しも違はぬ容貌と化したり。二人は「あつ」と云つて口を開けたまま

其場に倒れける。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 土井靖都録)

第二篇 四十八文字

第七章 蛸入道〔三五七〕

忽ち暗の中に光明赫灼たる神姿を現したる清彦は、絶対無限の神格備はり、仰ぎ見るに眼も眩むばかりに全身輝き渡りけり。

猿世彦、駒山彦は、此姿に惛伏して屢し息を凝らしみたるに、清彦の姿は、パツタリ消えうせ、暗の中より耳を裂く如き大なる聲聞え來たる。

「猿世彦、駒山彦、よく聞けよ。吾は汝の知る如く、今までは八頭八尾の大蛇の
靈魂に誑かされ、曲事のあらむ限りを盡くしたることは、汝らの熟知する通りな
り。然れど吾は三五教の大慈悲の神の教を聞きてより、今までの吾身の爲し來り
し事が恐ろしく且つ恥しくなり、日の出神の後を追ひ、眞人間に成つて今までの
惡に引かへ、善一筋の行ひをなさむ、惡も改心すれば此通りといふ模範を、天下
に示すべく日夜、神に祈りゐたるに、神の惠みは目の當り、不思議にも名さへ目
出度き朝日丸に乗り込み、日の出神様に廻り會ひ、結構な教訓を賜りてより、吾
靈魂は、神直日大直日に見直し聞き直され、今は清き清彦が靈魂になつて世界の
暗を照す日の出神の御名代、汝ら二人は吾改心を手本として、一時も早く片時も
速かに惡を悔い、善に立歸り、世界の鏡と謳はれて、黄泉比良坂の神業に参加せ
よ。汝の改心次第によつて、吾は再會することあらむ。汝らが心の雲に隔てられ、
遺憾ながら、吾姿を汝らの目に現はすことは出来なくなりしぞ。駒山彦、猿世彦、
さらば」

と云ふより早く、又もや四邊を照す大火光となりて中空に舞上り、智利の都を指

して中空をかすめ飛去りける。

猿世彦「オイ駒公、本當に清彦は日の出神となりよつたな。もうこれから清彦の悪口は止めにしようかい。吾々を山の奥へ連れて行きよつて、放とけ捨を喰はした腹立まぎれに心を鬼にして、何處までも邪魔をしてやらうと思つたが、たうてい悪は永續きはせないよ。お前と俺とが船の中で、あれだけ拳骨を喰はしてやつても、俺の體は鐵じやといひよつて、痛いのを辛抱して馬鹿口を叩いて笑ひに紛らして居たのは、一通りの忍耐力ではないよ。思へば馬鹿な事を吾々はしたものだナ。日の出神様はあの時に俺らの行ひを見て、何と端たない奴だ、譯の判らぬ馬鹿者だと心の中で思つて御座つたぢやらう。俺はソナ事を思ひだすと情無くなつて消えたい様になつて來るわ」

駒山彦「それならこれから何うすると云ふのだイ」

猿世彦「まあ、改心より仕方が無いな。清彦のやうにああ云ふ立派な日の出神になれなくても、せめて曲りなりにでも宣傳使になつて、今までの罪を贖ひ、身魂を研いて、黄泉比良坂の神業に参加したいものだ。どうで【トコトン】の改心は

出来はしないが、せめて悪口など云はないやうにして、世界を助けに廻らうじやないか。而して一つの功が立たら又清彦の日の出神が會うてくれるだらう。その時には立派な宣傳使だ、天の御柱の神の片腕に成つて働かうと儘だよ。是から各自に一人宛宣傳する事にしようかい」

駒山彦「よからうよからう」

と二人は茲に袂を別ち、何處とも無く足に任せて宣傳歌を覺束無げに歌ひながら、進み行く。夜は仄々と白み初めぬ。猿世彦は南へ、駒山彦は北へ北へと進み行く。猿世彦は光つた頭から湯氣を立てながら、力一ぱい癩聲を振搾つて海邊の村々を歌つて行く。ある漁夫町に着きけるに、四五人の漁夫は猿世彦の奇妙な姿を見て、

甲「オイ、此間からの風の鹽梅で漁が無い無いと云つて、お前たちは悔みてゐるが、天道は人を殺さずだ。あれ見よ、大きな章魚が一足歩いて来るわ。あれでも生捕つて料理をしたら何うだらうかナア」

乙「シートツ、高うは云はれぬ、聞いて居るぞ。聞えたら逃げるぞ逃げるぞ」

甲「章魚に聞えてたまるかい。なんぼ云ふても聞かぬ奴は、彼奴は耳が蛸になつたと云ふだろ、かまはぬかまはぬ大きな聲で話せ話せ。オイ、そこへ來る蛸入道、俺はな、此村の漁夫だが、此間から漁が無くて困つて居たのだ。貴様の蛸のやうな頭を俺に呉れないかい」

猿世彦「あゝあなた方は此處の漁夫さまですか。蛸は上げたいは山々ですが、一つよりかけがへの無いこの蛸頭、残念ながら御上げ申す譯には行きませぬ」

丙「なにをぐづぐづ云ふのだい。聞かな聞かぬで好い、與れな與れぬで好い。皆寄つてたかつて、蛸を釣つてやるぞ」

猿世彦「それは結構です。各自に御釣りなさい。蛸が釣れるやうに祈つて上げますから」

甲「お前さまが祈る。これ丈とれぬ蛸が釣れますかい」
猿世彦「釣れいでか、そこが神さまだ。釣るのが邪魔臭ければ、お前さまも、わ

しの云ふやうに、聲を合して宣傳歌を歌ひなさい。蛸は又ラ又ラと海から勝手に這上つて、お前さまの持つて居る箆の中に這入つて呉れる。そこを蓋を閉て家へ

持つて歸るのだ」

猿世彦は、口から出まかせに、コンナ事を云つてしまひける。

乙「おい、蛸の親方、本當にお前まへの云いふ通とほりにすれば、蛸たこは上あがつて來るかい」

甲「そら、きまつた事だよ。何なに分ぶん親おや分ぶんが云いはつしやるのだもの、乾こ兒ぶんが出て來ぬ

事ことがあるかい。夫それだから貴き様さま達たちもこの親おや分ぶんの云いふ事ことを聞きけと云いふのだ。俺おれが呼よ

んでも來たり來なかつたり、貴き様さまらは不ふ心得こころえな奴やつだぞ。もしもし蛸たこの親おや方かた、蛸たこを

呼よんで下くださいな」

猿世彦は海面かいめんに向むかひ、疝かん聲こゑを搾しぼりながら、宣せ傳ん歌かを歌うたひ始はじめた。漁り夫ようしはその後あと

について合がっ唱しやうした。海面かいめんには處ところ々ところに丸まるい渦うづをえがいて、蛸たこ入に道だうの頭あたまがポコポコと顯あら

はれて來た。猿世彦は、

「來きたれ 來きたれ」

と蛸たこに向むかつて磨さいた。蛸たこはその聲こゑの終をはると共ともに、策さの中なかに數かず限かぎりなく飛とび込こみ

けり。このこと漁り夫ようし仲なか間まの評ひやう判ばんと成なりて、猿世彦ざるよひこを日ひの出で神かみと尊そん敬けいする事こととなり

ぬ。それより此この漁ぎ村よそんは、蛸たこ取とり村むらと名な付づけられたり。

蛸取村より數十町西方に當つて、アリナの瀧と云ふ大瀑布あり。猿世彦は其處に小さき庵を結び、この地方の人々に三五教の教理を宣傳する事となりける。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 有田九臯録)

第八章 改心祈願〔三五八〕

漁夫は猿世彦の言靈に依つて、蛸の意外なる收獲を得、今迄輕侮の念を以て遇して居た猿世彦に對し、尊信畏敬の態度を以て望むことになり、「アリナ」の瀧に草庵を結び猿世彦の住家となし、尊敬の念を拂ひ三五教の教理に悦服したり。されど俄宣傳使の猿世彦は未だ三五教の教理には徹底しをらず、只神を祈ることのみは一生懸命なりき。夫故平然として彼が説く所の教理は矛盾脱線に満ち居たれども、誠の神は彼が熱心に感じて神徳を授けられたるなり。

この村は無智朴訥なる漁夫のみなれば、餘り高遠なる教理を説くの必要も無く、

また漁夫どもは神を祈りて豊かな漁を與へて貰ふ事のみを信仰の基礎として居たり。
然し掃溜にも金玉あり、雀原にも鶴の降りて遊ぶが如く、此村の酋長に照彦と云
ふ立派な男ありけり。彼は猿世彦の熱誠なる祈祷の效力に感じ、歌を作つて之を
讚美したりける。

朝日眩ゆき智利の國

御空の月も智利の國

猿世の頭も照の國

晝は日照の神となり

夜は月照彦となり

吾らを照らす宣傳使

かかる尊き救ひ宣使

又と「アリナ」の瀧の如

其名は四方に響くなり

其名は四方に響くなり。

と村人に歌はせたり。猿世彦は得意満面に溢れ、天晴れ宣傳使となりすまし、法
外れの教理を説きゐたり。然れど朴訥なる村人は誠の神の尊き教と堅く信じ、涙
を流して悦び、信仰を怠らざりける。

【アリナ】の瀧より數町奥に不思議なる巖窟あり。巖窟の中には直径一丈ばかりの圓き池あり、清鮮の水を湛へ、村人は之を鏡の池と命名け居たり。猿世彦は村人をあまた隨へ、この鏡の池に襖を成さむと進み行きぬ。まづ酋長の照彦に鏡の池の水を掬つて洗禮を施し、次々に之を手に掬ひ、老若男女に向ひ一々洗禮を施し、この巖窟の鏡の池に向つて祈願を籠めにける。

嗚呼天地を御造り遊ばした國治立の大神様、太陽の如く月の如く鏡の如く、圓く清らかなる此鏡の池の水晶の御水の如く、酋長を始めその他の老若男女の身魂を清く研かせ玉うて、此水の千代に萬代に洄ざる如く、清き信仰を何處までも繋がせ玉ひて、神様の御膝下に救はれます様に、又この尊き、清き御水を鏡として、吾々はじめ各自のものが何時までも心を濁しませぬやうに、御守り下さいませやう御願ひ致します。私は今日まで鬼城山に立籠り、木常姫と共々に大神様の御神業を力限り、根限り妨害致しました其罪は、天よりも高く、千尋の海よりもまだ深いもので御座います。然るに貴方様は大慈大悲の大御心を以て、吾々の如き大罪人に對し滿腔の涙を御注ぎ下さいまして、畏れ多くも天教山の猛火の中に御身

を投じ玉うたことを承はりました。其事を聞きましてから私は、昔の悪事を思ひだし、起つても坐ても居れぬやうな心持になりました。嗚呼一日も早く改心したいと思ひますと、私の腹の中から悪魔が「馬鹿々々、何をソナ弱い事を思ふか」と叱りますので、「ついでにウロウロと魂が迷ひ、心ならぬ月日を送つて居りました。偶私は常世の國を逃出して、筑紫の島を彼方此方と彷徨ふ内、日の出神と云ふ立派な宣傳使が、智利の都へ御出で遊ばしたと聞いて、朝日丸に乗つて此處へ渡ります其船の中に、有難くも日の出神様が乗つて居られ、いろいろ結構な御話を聞かして下さいました。之も全く貴方様の御引合せと有難く感謝を致します。此の清き鏡の池の水は、圓満なる大神様の大神様の御心であります。この滾々として湧き出づる清き水は、大神様の吾らを憐れみ玉ふ涙の集まりであります。此水の清きは、大神様の血潮であります。願はくば永遠に吾らの魂を、此鏡の池の圓満なるが如く、清麗なるが如く守らせ玉はむ事を、村人と共に御願ひ致します。惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世」

と眞心を籠めて祈願したり。數多の人々も異口同音に、惟神靈幸倍坐世を唱へて

神徳を讚美したりけり。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 森良仁録)

第九章 鏡の池〔三五九〕

猿世彦はアリナの瀧に身を清め、この巖窟の鏡の池に楔をなし洗禮を施しぬたり。猿世彦は名を狹依彦と改めける。狹依彦の名は遠近に轟きわたり、洗禮を受けに來るもの、教理を尋ねに來るもの續々殖え來たりぬ。元來三五教の教理は、船の中にて聞き齧りの俄宣傳使なりければ、深き事は分らず。されど苟くも宣傳使たるもの、知らぬとは云はれざれば夜晝鏡の池に祈願を籠め、曲りなりにも説教を始め居たりける。

このとき黒彦と云ふ色の淺黒き眼の「くるり」とした鼻の小高く口許の締りし中肉中背の男、大勢の信者の中より現はれて質問を始めたりける。

黒彦「もしもし宣傳使様、貴方は宇宙一切の事は何でも言靈で解決を與へると仰有つたさうですが、一つ聞かして頂きたいですが何をお尋ねしても構ひませぬか」
狭依彦「我は天下の宣傳使、ドンナ事でも知らない事は無い事は無い」
黒彦「曖昧な御言葉ですな、知つてるのですか、知らぬのですか」
狭依彦「ドンナ事でも、知る事は知る、知らぬ事は無い事は無い。何なつと聞かつしやれ」

黒彦「一寸お尋ねしますが、あの蕎麥は何で蕎麥と云ふのですか」
狭依彦「お前の内に作つてゐませぬか。雪隠の傍や、山の側や、畑の側や其邊中の側に生えてるだらう、それで蕎麥と云ふのだよ」

黒彦「貴方の仰有る事は「チツト」違ひはしませぬか、此間も大中教の宣傳使が遣つて来て、蕎麥と言ふものは、昔の昔の「ズツト」昔の其昔、天の御三體の大神様が柱の無い屋根ばかりの三角形の家を造つて、其處へお住居を遊ばした。其家の側に出來たので蕎麥と云ふのです。それで屋根の形に蕎麥は三角になつてるだらう、お前達の雪隠の側にも、家の側にも出來てるではないか。側に居りなが

ら貴様は餘つ程【餛飩】な奴だと云ひましたよ

狹依彦「あゝお前さまはウラル彦の教を奉ずる人だな」

黒彦「尤だ、何でも世界の事は皆知つてるとか、知らぬとか、蕎麥を掻いて喰ふ様な法螺を吹いて、側の人間を【あつと】云はさうと思つても、さうはいかぬぞ

え。お前達の様なものが宣傳使になつて居つては、薩張り宣傳使の相場が狂つて仕舞ふワ。馬鹿々々しい」

狹依彦「それならお前さま、大中教の宣傳をやつて下さい。貴方の仰有る事が理屈に合つてゐるなら私は大中教に従ひます。それなら、此方からお尋ねするが黍

と云ふのはどう云ふ處から名が附いたのですか」

黒彦「黍の穂は氣味が良いほど實がなるから黍だ。【ずる】黍は手に撫でて見ると【ズルズル】するから、【ずる】黍だ。大根は神さまの好物だから大根と云

ふのだ。蕪は餘り味が良いから、【オイ】一つお前も【かぶら】ぬかと云うて、つき出すから蕪と云ふのだ。米の炊いたのは美味いから、子供が食つても【ウマ

ウマ】と云ふから【ママ】と云ふのだ。さあさあ何でも聞いたたり聞いたたり」

狭依彦は一寸感心したやうな顔して首を傾け、

狭依彦「へえ、ソナなものですか、それは結構な事を聞きました。私もソナ話
は好物で氣味が宜しい」
と下らぬ理屈に感心をしてゐる。

鏡の池の水は俄に「ブクブク」と泡立ち初め、そして水の中から竹筒を吹く様
な聲がして、

「卑しい奴らだ。喰物ばかりの問答をしようつて氣味が良いから黍だの、好物だ
から大根だの、召し上れの、「うまうま」のと、何と言ふ喰ひ違ひの事を申すか。
やり直せ、宣り直せ、オーン、ポロボロボロ」

狭依彦「いや大變だ。池の中からものを云ひだしたぞ。何でも之は教へて呉れる
に違ひ無い。おい黒さま、お前に用は無。俺は此池を鑑として之から何でも聞
くのだ。もしもし鏡の池の神さま、之からソナ奴が來たら直に私に教へて下さ
れや」

池の中から竹筒を吹く様な聲で、

『黒彦に教へて貰へ』

狭依彦 『やあ、こいつは堪らぬ、偉い事を仰有る。矢張り黒彦が偉いかしら、モ

シモシ黒彦さまお尋ね致します。私の頭は如何したら毛が生えますか』

黒彦 『それあ、生えるとも、一篇芝を冠つて來たら生える』

狭依彦 『ソナ事は、きまつてる。此儘生えぬかと頼むのだ』

黒彦 『瓢箪に毛が生えたらお前さまの頭にも毛が生えるよ。枯木に花が咲くか、

煎豆に花が咲いたら其時はお前の頭に毛が生えるのだよ。三五教では煎豆に花が

咲くと云ふではないか』

狭依彦 『もう宜しい、何にもお尋ねしませぬ。口計り矢釜しい、雀の様に云うて

何にも知りませぬ癖に偉さうに言ふない』

黒彦 『俺を雀と云うたが、雀の因縁知ってるか』

狭依彦 『知つとらいでか、鈴の様に矢釜しく囀るから雀だよ。四十雀の様に、始

終「ガラガラ」吐かしよつてな』

黒彦 『ソナナラ鷹の因縁知ってるか』

狭依彦「高い處へ飛ぶから鷹だ。そこら中を飛び廻るから鳶と云ふのだ」

黒彦「ソナラ雲雀は如何だ」

狭依彦「高い處へ上り上つて告天子と云つて威張り散らすから雲雀と云ふのだ。」

雲雀何んぞ大鵬の志を知らむやと云ふのはお前達の事だよ。解く位の事なら何でも講釋してやる。朝も早うから「ガアガア」鳴きたてる、日の暮に又ガアガア聲を囁らして鳴く奴を聲を鳥と云ふのだ。三五教の教には一つも穴が無からうがな」としたり顔に云ふ。

「またもや鏡の池はブクブクと泡が立つて、前の様な拍子抜けのした聲で、お前達は【とり】どりの講釋を致すが、どえらい【とり】違ひだよ。もつと心を【とり】直したが良からう。ブーツブーツ」

と法螺貝の様な唸り聲が聞え來たる。

黒彦「此奴は堪らぬ、化物だ。何が飛び出るか分りやせぬ。皆の者逃げる逃げる」と尻引つ繋げて一目散に逃げ出した。唸り聲は刻々と高まり來たり、大地震の様ブルブルと大地一面が動き出したれば、轉けつ輾びつ、過半数の人間は四方

に逃げ散りぬ。膽玉の小さい腰を抜かした人間ばかり、依然として其場に残り居たるなり。狹依彦もまた腰を抜かし其場に依然として祈願を凝らしつつありき。唸り聲はますます烈しくなる一方なりけり。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 北村隆光録)

第一〇章 假名手本〔三六〇〕

鏡の池の唸り聲は漸く静まりぬ。此度は莊重なる重みのある聲にて、池の底より又もや大なる言葉、次ぎ次ぎに聞え來たる。

「猿の人眞似を致す俄宣傳使の猿世彦、神の光も最と清く、智利の國へと渡り來て性に合はぬ三五教の宣傳使とは、よくもよくも吐いたなあ、汝の祈りは、實に立派なものだぞ。これからは大法螺を吹くなよ、知らぬことを知つた顔を致すと、今のやうな苦しき目に遇ふて、恥を曝さねばならぬぞ、何も理屈は云ふ事は要ら

ぬ。ただ私は阿呆で御座います、神様にお祈りをする事より外には、「いろは」の【い】の字も存じませぬと謙遜つて宣傳を致すがよいぞよ。生兵法は大怪我の基だ。知らぬと云うても汝はあまり非道いぞ、「ちつと」は後學のために此方の申す事を聞いて置け。いろは四十八文字で開く神の道ぢや」

猿世彦「もしもし、池の底の神様、私は腰が立ちませぬ。腰を立たして下さいな」

池の底から、

「い、祈らぬか、祈らぬか、祈りは命の基ぢや。萬劫末代生通しの命が欲しくば、いつもかも祈れ祈れ。」

ろ、碌でもない間抜けた理屈を捏ねるより、身の行を慎みて人の鏡となれ。

は、早い改心ほど結構は無いぞよ。裸で生れた人間は、生れ赤子の心になれよ。

に、俄の信心は間に合ぬ。信心は常から致せよと教へてやれ。

ほ、佛作つて眼の入らぬ汝の宣傳、發根から改心致して、本當の神心になれよ。

へ、下手な長談義は大禁物だ。屁理屈を云ふな、途中で屁太張るな、屁古垂れ

な。

と、トコトン」までも誠を貫き通せ。神の守りは遠い近いの隔てはないぞ、徳をもつて人を治めよ。

ち、智慧、學を頼りに致すな。力となるは神と信仰の力ばかりだ。近欲に迷ふな、畜生の肉を喰ふな。

り、理屈に走るな、利欲に迷ふな。吾身の立身出世ばかりに魂を抜かれて、誠の道を踏み外すな。

ぬ、盗むな、ぬかるな、拔身の中に立つて居るやうな精神で神の道を歩めよ、拔驅けの功名を思ふな。

る、留守の家にも神は居るぞ。留守と申うて悪い心を出すな。を、恐ろしいものは汝の心だ。心の持ちやう一つで鬼も大蛇も狼も出て来るぞ。

臆病になるな、お互に氣をつけて此世を渡れ。わ、吾身を後にして人のことを先にせよ。悪い事は塵程もしてはならぬぞ。吾

儘を止めよ、私をすな、悪い事をして笑はれるな
猿世彦「わ、分りました。分りました。貴神のお言葉を聞くと何ともなしに、

か、悲しうなりました。堪忍して下さいませ、叶はぬ叶はぬ。

よ、よく分りました。もう「よし」にして下さい、欲な事は致しませぬ。世の中の事ならドンナ事でも致します。

た、助けて下さい、頼みます。誰人だつてコンナに恐い目に遇つたら、起つても居ても坐た忪つたものぢやありませぬ。

れ、連続して水の中から屁を「こい」たやうな六ヶ敷い説教を聞かされても、そ、それは汲みとれませぬ。そつと小さい聲で耳の傍で聞かして下さいな、ソナ破鐘のやうな聲を出したり、竹筒を吹いたやうな聲を出して貰つては、一寸も合點が行きませぬ。

つ、つまらぬ、つまらぬ、月照彦の神様か何か知らぬが、もうそれだけ仰言つたら、仰有る事は「つきてる」筈だのに。

ね、根つから、葉つから合點が行かぬ。お姿を現はして下さいな

池の底から、

「な、何を云ふか、泣き事言ふな、汝の如き弱き宣傳使は、もちつと苦勞を致

さねば、

ら、樂にお道は開けぬぞ。

む、無理と思ふか、無理な事は神は申さぬぞ。

う、迂闊々々聞くな、美はしき神の心になつて、神の教を開く宣傳使になれ

猿世彦「あ、何時までもお説教は結構ですが、もう好い加減に止めて下さつた

らどうですか、餘り「つらく」て骨にびしびしこたへ、此の

の、喉から血を吐くやうな思が致します

池の底より、

「退引ならぬ釘鋸、

お、往生いたせ。よい加減に、

く、苦しい後には楽しい事があるぞよ。

や、矢釜敷う云うて聞かすのも、汝を可愛いと思ふからだ。

ま、誠の神の言葉をよく聞け、神の言葉に二言は無いぞ。いま聞き外したら萬

古末代聞く事は出来ぬぞ。人民の暗い心で誠の神の經綸は、

け、見當は取れぬぞ、毛筋も違はぬ神の道、汚してはならぬぞ。

ふ、深く考へ、魂を研いて御用に立てよ」

猿世彦「こ、これで、もう結構で御座います。今日はまあ何と云ふ有難い、苦し

しい、結構なやうで結構に無いやうで、嬉しいやうで、嬉しう無いやうで」

池の中より、

「え、まだ分らぬか、

て、天地の神の教を傳ふる宣傳使では無いか、

あ、悪を働いて來た猿世彦、これから心を入れ替へて、

さ、さつぱり身魂の洗濯いたして「さらつ」の生れ赤子になり變り、

き、清き正しき直き誠の心をもつて世人を助け導け、

ゆ、夢々神の申す事を忘れなよ。いつも心を引き締めて氣は張り弓、

め、罪障の深い汝の身魂、苦勞をさして、

み、見せしめを致して罪を取つてやらねば、

し、死んでも高天原へ行けぬぞよ。信心は夢の間も忘るなよ、知らぬ事は知ら

ぬと明瞭云へ、尻の掃除も清らかにいたせ、
ゑゝゝ偉さうに云うでないぞ、この世の閻魔が現はれ高い鼻をへし折るぞ、
ひゝゝ晝も夜も神に祈れよ、
もゝゝもうこれでよいと神が申すまで身魂を磨け。神の目に止まつた上はドンナ
神徳でも渡してやるぞ、
せゝゝ狭い心を持つな、廣き、温かき神心になつて世人を導け、
すゝゝ澄み渡る大空の月照彦の神の御魂の申す事、無寐にも忘れな猿世彦、吾こ
そは元は龍宮城の天使長大八洲彦命なるぞ。汝も随分威張つたものだが、これが
ら「すつかり」心を改めて此國の司となり、狭依彦司となつて世界のために盡せ
よ。この高砂島は金勝要大神の分靈龍世姫神の御守護なるぞ、此鏡の池は根底の
國に通ふ裏門、分らぬ事があらばまた尋ねに來よ」
うゝゝと一聲呻ると共に、その聲は「パツタリ」止みけり。狭依彦および一同の
腰は始めて立ちぬ。一同は喜び勇みて神言を鏡の池に向つて奏上したりける。

(大正一一・二・六 舊一・一〇 加藤明子録)

第三篇 祕露より巴留へ

第一章 海の龍宮（三六一）

足曳の山の草木は枝繁り

葉も春風に霞み行く

一望千里の波の上

浮び出たる八尋の龜の其の背に

春日を受けて跨りつ

千尋の浪路を掻き分けて

底へ底へと沈み行く

御稜威輝く伊奘諾の

神の命の御子と生れし

大道別の命の後身

日の出神はやうやうに

大和田津見の神の宮

底ひも知らぬ大神の

經綸の奥を探らむと

進み來ますぞ雄々しけれ

門前には正鹿山津見神、淤滕山津見神の二柱が、仁王のごとく阿吽の息を凝らし、眞裸體のまま、全身力瘤を現はして傲然として守り居る。淤滕山津見神は、眞先に進み出で、

「ここは龍宮の入口なり。畏れ多くも大和田津見の大神の御住處、何神の許しを受けて此處に到着せしぞ。速かに本津國に引返さばよし、違背に及ばば此の拳骨を御見舞申さむ」

と云ふより早く、日の出神に打つてかかるを、琴平別の化身なる八尋の大龜は、二神の間に突立ち千引の岩と化し去りけり。このとき門内より騒々しき物音聞え來たり。日の出神は大音聲を張上げ歌を歌ひ玉ふ。

天津御神の御言以て 常世の暗を照さむと

心も輕き蓑笠の 世界を巡る宣傳使

天津御空も海原も 豐葦原の神國も

大御惠の隈もなく い行き渡らふ世の中に

汝 <small>な</small> が身 <small>み</small> の心 <small>こころ</small> の愚 <small>おろか</small> さよ 『	深 <small>ふか</small> き經 <small>しぐみ</small> 綸 <small>み</small> も不知 <small>しらぬ</small> 火 <small>ひ</small> の 汝 <small>な</small> が身 <small>み</small> の心 <small>こころ</small> の愚 <small>おろか</small> さよ	於 <small>おど</small> 滕 <small>やま</small> 山 <small>つみ</small> 津見 <small>み</small> や正 <small>まさ</small> 鹿 <small>か</small> 山 <small>やま</small> 津見 <small>つみ</small> の命 <small>みこと</small> の門 <small>かど</small> 守 <small>まも</small> り	これの金 <small>かな</small> 門 <small>かど</small> を開 <small>ひら</small> けよや 吾 <small>われ</small> は日 <small>ひ</small> の出 <small>で</small> 神 <small>かみ</small> なるぞ	探 <small>さぐ</small> らむため <small>ため</small> の此 <small>こ</small> の首途 <small>かど</small> で ただ一時 <small>ひととき</small> も速 <small>すみ</small> かに	音 <small>おと</small> に名 <small>な</small> 高 <small>たか</small> き乙 <small>おと</small> 米 <small>よね</small> 姫 <small>ひめ</small> の 貴 <small>うづ</small> の命 <small>みこと</small> の神業 <small>かむわざ</small> を	千 <small>ち</small> 尋 <small>ひろ</small> の底 <small>そこ</small> の海 <small>うみ</small> の宮 <small>みや</small> 其 <small>そ</small> の岩 <small>いは</small> 屋 <small>や</small> 戸 <small>ど</small> を <small>おし</small> ひら <small>き</small>	琴 <small>こと</small> 平 <small>ひら</small> 別 <small>わけ</small> の龜 <small>かめ</small> に <small>の</small> 乗 <small>の</small> り こ <small>こ</small> に現 <small>あら</small> はれ來 <small>きた</small> るなり	迷 <small>まよ</small> ひ來 <small>きた</small> れる面 <small>つら</small> 那 <small>な</small> 藝 <small>ぎ</small> の 神 <small>かみ</small> の命 <small>みこと</small> を救 <small>たす</small> けむと	日 <small>ひ</small> の神國 <small>かみくに</small> の宣傳 <small>せんでん</small> 使 <small>し</small> 日 <small>ひ</small> の出 <small>で</small> 神 <small>かみ</small> が現 <small>あら</small> はれて	任 <small>まけ</small> のまにまに <small>い</small> 出 <small>で</small> 來 <small>きた</small> る 朝 <small>あさ</small> 日 <small>ひ</small> 輝 <small>かがや</small> く夕 <small>ゆふ</small> 日 <small>ひ</small> 照 <small>て</small> る	試 <small>ため</small> しに漏 <small>も</small> るる事 <small>こと</small> ぞある 天 <small>あめ</small> の御柱 <small>みはしら</small> 大 <small>おほ</small> 神 <small>かみ</small> の	この龍宮 <small>りゅうぐう</small> の城 <small>しろ</small> のみは 神 <small>かみ</small> の守 <small>まも</small> りの彌深 <small>いやふか</small> き
--	---	--	--	--	---	--	---	--	--	---	---	---

と、聲たかだかと歌ひ玉へば、二柱の神はこの歌に驚き、平身低頭ぶるぶる慄ひ
ながら、陳謝の意を表しけり。淤滕山津見は、一目散に門内に驅入り奥殿に進み、
何事か奏上したり。正鹿山津見は、日の出神の先に立ち、別殿に迎へ入れたり。
城内の一方にはますます騒々しき物音聞え來たりければ、平凡事ならじと、日の
出神は、耳を澄まして聽き入りたまひ、正鹿山津見の顔をふと眺め、
「やあ、貴下は桃上彦に非ずや。かかる所に金門を守り給ふは何故ぞ。それにし
ても彼の騒々しき物音は如何に」
と言葉忙しく問い詰めたまへば、正鹿山津見は、
「御推量に違はず、われは聖地エルサレムに於て、暫し天使長の職を勤め遂には
吾が身の失敗のために、國祖國治立大神に累を及ぼし、八百萬の神人に神退ひに
退はれ、根の國、底の國に落ち行かむとする時しも、慈愛深き高照姫神に救はれ、
今は龍宮城の門番を勤むる卑しき身の上、貴下に斯る處にて御目にかかり、實に
慙愧に堪へず、陸の龍宮に於て時めき渡りし桃上彦も有爲轉變の世の習ひ、世の
荒波に浚はれて不知不識の身の過、昨日に變る和田の原、千尋の水の底深き、海

の龍宮の門番の日夜の苦勞艱難御察しあれ」

と、聲も曇りて其の場に泣き伏しにける。

日の出神は同情の念に堪へざるが如く、しばらく差俯向いて悲歎の涙さへ流し居けるが、更に言葉を繼いで、

「貴下の今日の境遇は御察し申す。至急訊ねたきことあり。彼の騒がしき物音は何事ぞ、委しく述べられよ」

龍宮海の秘密、門番の分際として申上げ難し。ただただ貴下の御推量に任すのみ」

と體よく刎ねつける。阿鼻叫喚の聲はますます激しく、あたかも修羅場のごとき感じなりける。

日の出神は突立ち上り、

「桃上彦、われを奥殿に案内されよ」
と云ひつつ、どんどんと進み行かむとする。桃上彦は周章で、
「あゝ、もしもし一寸待つて下さいませ。夕々々、大變です。彼様な處へ御出で

になつては乙米姫より、如何なる嚴罰を蒙るやも知れませぬ。第一私も共にあの恐ろしい聲のする處へ投り込まれねばなりません。先づ先づ御待ち下され、一先づ伺つて参ります」

と、先に立ち足早に奥殿目がけて姿を隠したり。日の出神はただ一人茫然として四邊をキヨロキヨロと見廻し居たまひにけり。

(大正一一・二・七 舊一・一一 外山豊二録)

(序文)第一章 昭和一〇・二・七 於東京銀座林英春方 王仁校正)

第一二章 身代り(三六二)

日の出神は、ただ一人茫然として怪しき物音に耳を澄ませ思案に暮るる折りしも、以前の門番の淤藤山津見はこの處に現はれ、
「貴下は大道別命に在さずや」

と顔を見つめゐる。日の出神は、

「貴下の御推察に違はず、吾は大道別命、今は日の出神の宣傳使なり。吾龍宮へ來りしは、黄金山の宣傳使、面那藝司龍宮に來れりと聞き、一時も早く彼を救はむがためなり。速かに乙米姫命にこの次第を奏上し、面那藝司を吾に渡されよ」と言ひつつ、淤藤山津見の顔を見て、

「オー、貴下は自在天大國彦の宰相、醜國別にあらざるか。貴下は聖地エルサレムの宮を毀ち、神罰立所に致つて歸幽し、根底の國に到れると聞く。然るにいま龍宮に金門を守るとは如何なる理由ありてぞ。詳細に物語られたし」

醜國別は、

「御推量に違はず、吾は畏れおほくも自在天の命を奉じ、聖地の宮を毀ちし大罪人なり。天地の法則に照され、根底の國に今や墜落せむとする時、大慈大悲の國治立尊は、侍者に命じ吾を海底の龍宮に救はせ給ひたり。吾らは其大恩に酬ゆるため、晝夜の區別なく龍宮城の門番となり、勤務する者なり。あゝ、神恩無量にして量る可からず、禽獸蟲魚の末に至るまで、攝取不捨大慈大悲の神の御心、

何時の世にかは酬い奉らむ

と兩眼に涙を湛へ、さめざめと泣き入る。日の出神は、

「汝が來歴は後にてゆるゆる承はらむ。一時も早く奥殿に案内せよ」

醜國別は止むを得ず、力無き足を運ばせながら先に立ちて、奥深く進み入る。

奥殿には數多の海神に取り圍まれて、中央の高座に、花顔柳眉の女神端然として

控へ、日の出神を一目見るより、忽ち其の座を下り、満面笑を湛へて、先づ先づ

これへと招待したり。日の出神は堂々と、何の憚る所も無く高座に着きける。女

神は座を下つて遠來の勞を謝し、且つ海底の種々の珍味を揃へて饗應せり。日の

出神は、これらの珍味佳肴に目もくれず、女神に向ひ、（海底とは遠島の譬也）

「吾は神伊奘諾の大神の御子大道別命、今は日の出神の宣傳使、現、神、幽の三

界に涉り、普く神人を救濟すべき神の御使、今この海底に來りしも、海底深く沈

める神人萬有を救濟せむがためなり。かの騒々しき物音は何ぞ、包み祕さず其の

實情を我に披見せしめよ」

と儼然として述べ立てたまへば、女神は涙を湛へながら、

□ 實ありがたに有難おんあふき御仰おんあふせ、これには深ふかき仔細しさいあり、高天原たかあまはらに現あらはれ給たまひし神伊奘册命かむいざなみのみこと、
黄泉國よもつくにに出いでましてより、黄泉國よもつくにの穢けがれを此處ここに集あつめ給たまひ、今いままで安樂郷あんらくきやうと聞きこえ
たる海底かいていの龍宮りうぐうも、今いまは殆ほとんど根底ねそこの國くにと成なり果はてたり。妾わらはは最早もはやこれ以上いじやう申上まをしあぐ
る權限けんげんを有いうせず、推量すありやうあれ□
と涙なみだに咽むせびけり。

日ひの出神でのかみは神言かみごとを奏上そうじやうしたまへば、忽たちまち四邊あたりを照てらす大火光だいくわくわう、日ひの出神でのかみの身しん體たい
より放射はうしやし、巨大きよだいなる火ひの玉たまとなりて龍宮りうぐうを照破せうはせり。見みれば母神ははがみの伊奘册命いざなみのみことを、
八種やくさの雷神いかづちがみ取り圍かこみ、その御頭みかしらには大雷おほいかづち、御胸みむねには火ほの雷神いかづちを、御腹みはらには黒雷くろいかづち、
陰所みほとには拆雷さくいかづちを居をり、左ひだりの手てには若雷わかいかづちを居をり、右みぎの手てには土雷つちいかづちを居をり、左ひだりの足あしには鳴雷なるいかづち
居をり、右みぎの足あしには伏雷ふしいかづちを居をり命みことの身邊しんべんを惱なやませ奉たてまつりつつありければ、日ひの出神でのかみは、
火ひの玉たまとなりて飛とび廻まはりける。探女さぐめ醜女しこめ、黄泉神よもつかみの群むれは、蛆うじ簇たかり轟とどろきて目めも當あて
られぬ慘状さんじやうなり。かかるところへ乙米姫神おとよねひめのかみ現あらはれ來きたり、
□ 妾わらはは神伊奘册命かむいざなみのみことの御身代おんみがはりとなつて仕つかへ奉まつらむ、伊奘册神いざなみのかみは一時いちじも早はやくこの場ば
を逃のがれ日ひの出神でのかみに護まもられて、常世とこよの國くにに身みを逃のがれさせ給たまへ□

と云ふより早く、八種の雷の神の群に飛び入りぬ。八種の雷神、其他の醜神は、龍宮城の美神、乙米姫命に向つて、前後左右より武者振り附く。伊奘册命に附着せる枉神は、一つ火の光に照されて残らず拂拭されたり。面那藝司は伊奘册命を救ふべく、必死の力を盡して戦ひつつありけれども力及ばず、連日連夜戦ひ續け、その聲門外に溢れ居たりしなり。これにて龍宮の怪しき物音、阿鼻叫喚の聲の出所も、漸くに氷解されにける。

日の出神は神文を唱へたまへば、忽ち以前の大龜現はれ來り、門外に立ち塞がりぬ。日の出神は、伊奘册命を守り、面那藝司および正鹿山津見、淤滕山津見と共に、八尋の龜に跨り海原の波を分けて、海面に浮き出で、常世の國に渡り、ロツキ一山に伊奘册命を送り奉りたり。

其後の海底龍宮城は、體主靈從、弱肉強食の修羅場と化し、八種の雷神の荒びは日に月に激しくなり來り、遂には黄泉比良坂の戦ひを勃發するの已むなきに立到りける。

第一三章

修羅場〔三六三〕

心も清き清彦は

朝日夕日のきらきらと

智利の都を後にして

夜はあるとも祕露の國

祕露の都へ進み行く。

清彦の假の日の出神は、晝夜間斷なく三五教の宣傳に務め、都の中央なる高地を選んで宏大なる館を造り、國魂の神なる龍世姫命の御魂を鎮祭し、その名聲は四方に喧傳され、あまたの國人は蟻の甘きに集ふが如く、四方八方より其徳を慕うて高遠なる教理を聽問に来るもの、夜に日を繼ぐ有様なりける。

假日の出神は大廣前に現はれ、數多の國人に向つて三五教の教理を説き始めたに、末席より眼光炯々として人を射る黒い顔、しかも弓の様に腰の曲つた男、酒に酔つ拂つて捻鉢卷をしながら、澁紙の如き腕を捲りて高座に現はれ、清彦に

向ひ大口を開けて、

「ウワハ、ハ、ハ、ハ、貴様よく化よつたなあ、コラ俺の面を知つて居るか」

と黒い顔を清彦の前に「ぬつ」と突き出し、妙な腰付して右の手を無性矢鱈に振りながら、

「皆の者、眉毛に唾をつけよ。此奴は日の出神と偉さうに申して居るが、今この蚊々虎が面の皮を引剥いて目から日の出神にしてやらうぞ。ウワハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

と腹を抱へ腰を叩き頭をしやくりて嘲弄し始めたり。清彦は一切構はず三五教の教を諄々として説き進めたり。蚊々虎は蠻聲を張り上げて、

「萬場の人々よ、この男は舊は地の高天原に鬼雲彦と共に謀反を企み、常世國の鬼城山に姿を隠し、美山彦、國照姫の悪神の帷幕に参じ、常世の國の會議に於て

泥田の泥狐に欺され、泣きの涙で又もや鬼城山に逃げ歸り、惡逆無道の限りを盡し、さしもの惡に強き美山彦さへ愛想盡かして放り出したる、鬼とも蛇とも譬へ

方無き人非人、數多の神人に虫蜒の如く嫌はれて、遂には流れ流れて祕露の都へ渡り來たれる、善の假面を被る外面如菩薩、内心如夜叉、惡鬼羅刹の變化清熊の

變名清彦と云ふ奴、此奴が智利の國へ渡つた時、二人の伴を連れて居た。其奴も同じ穴の狐、猿世彦に駒山彦、その猿世彦は今はアリナの瀧に庵を結び、三五教の俄宣傳使と化け變り、あまたの國人を誑かす惡魔の變化。駒山彦は祕露の都に現はれて、これまた知らぬが佛の國人を、縦横無盡に誑かす惡魔の再來、その親玉の清熊の成れの果。膺日の出神となつて祕露の國をば闇にする、悪い企の現はれ口、この蚊々虎が見つけた上は、もはや叶はぬ運の盡き。さあさあ清熊白状いたせ、返答は如何ぢや、此場に臨んで何も云はれまい。道理ぢや、尤もぢや。俺が代つて貴様の企を素破抜かうか。智利の都の町端れ、闇の夜に汝ら三人の囁く言葉、【すつかり】聞いたこの蚊々虎、二人の奴を闇の谷間に放つときぼりを喰はしよつて、一人逃げだし路傍の芝生に腰を下し、有りし昔の懺悔話を、後から追ひつく二人の奴に嗅つけられて甲を脱ぎ、茲に三人腹を合して此高砂島を攪亂せむとする惡の張本人、日の出神とは眞赤な偽り、鬼城山の棒振彦の參謀清熊どうぢや、往生したか、早く尻尾を出しよらぬか、ヤアヤア皆の人々一時も早くこの場を去られよ、今に本當の日の出神が龍宮の底から出て來たら、アフンと呆れ

て馬鹿を見るぞよ。この蚊々虎さまは勿體なくも大國彦の一家來の醜國別の家來の、そのまた家來のその家來を連れて居るのは俺ではなうて大國彦様、何處から何處まで、山の谷々、海の底まで、谷蟻のやうに嗅ぎつけ探し廻る自在天の家來の、蚊々虎さまとは俺のことだ、ヤイ清熊まだ強太い白状せぬか、ヤイ皆の奴まだ目が醒ぬか。此處は名に負ふ祕露の國、祕露の都の中央で、夢見る馬鹿があるものか、早う目を醒ませ、手水を使へ、腰拔野郎の屁古垂れ野郎奴と口汚く高座より呶鳴りつけたるより、數多の人々は喧々囂々その去就に迷ひ、彼方の隅にも、此方の隅にも激しき爭論始まりきたり。場内はあたかも鼎の湧くが如く、雷鳴の轟くが如く、遂には鐵拳の雨處々に降り濺ぎ、泣く、笑ふ、怒る、罵る、叫喚く、忽ち阿鼻叫喚の修羅場と化し去りぬ。清彦は壇上に蚊々虎と共に仁王立となりて此光景を看守り居たり。

☐ 神が表に現はれて 善と惡とを立別ける
この世を造りし神直日 心も廣き大直日

ただ何事も人の世は
身の過は宣り直せ

直日に見直せ聞き直せ

といふ涼しき宣傳歌が、場内の喧騒の聲を壓して、手に取るが如く響きわたり、それと同時に、さしも激烈なりし修羅の光景は「びたり」とやみにける。嗚呼この宣傳歌は何人の聲なりしか。

(大正一一・二・七 舊一・一一 加藤明子録)

第一四章 祕露の邂逅 (三六四)

折から表玄關より「ツカツカ」と上り来る三人の宣傳使ありき。宣傳使は直に清彦、蚊々虎の直立せる前に進み寄り、

「オー、清彦殿久し振りだなあ、オー、その方は蚊々虎か」

清彦「ハア、思ひがけなき處にてお目に懸りました。貴下は日の出神様、斯る混亂紛糾の状態をお目につけ誠まことに汗顔あせりの至りに堪へませぬ」

と詫入る。蚊々虎は醜國別の顔を熟視し、

「やあ、あなたは御主人様、根の國とやらにお出ましになつたと承はりしに、今如何して此處にお出になりましたか」

と頭を「ピヨコピヨコ」させ手を揉み乍ら恐さうに挨拶する。清彦は桃上彦を見て驚き、

「やあ、あなたは如何して日の出神様と御同行を何されましたか」

と不思議相に尋ねる。數多の人々はこの光景を見て善惡正邪の區別に迷ひ、各自に耳に口を寄せて種々と囁き始めたり。

醜國別は一同に向ひ、

「満場の人々よ。我は自在天大國彦の宰相なりしが重大なる罪を犯し、生命を奪はれ根底の國に陥ち行かむとする時、大慈大悲の國治立尊の御取計ひによつて龍宮城に救はれ、乙米姫命の守護らせ給ふ照妙城の金門の守護となり、今までの

悪心を改め晝夜勤務を勵む所へ、ゆくりなくも日の出神の御來場、茲に救はれて
淤滕山津見司となり、桃上彦は正鹿山津見司となり、伊邪那美之大神のお供仕へ
奉りて、夜無き祕露の國へ漸く着きたるなり。今清彦の身の上につき蚊々虎の證
言は眞實なれども、清彦もまた悪心を翻し日の出神の代理として祕露の都に現は
れたるものなれば決して偽者に非ず。汝らは清彦を親と敬ひ、よく信じ以て三五
教の教理を感得し、黄泉比良坂の大神業に参加されよ』
と宣り了り口を結び玉ふ。拍手の音はさしもに廣き道場も揺がむ許りなり。
日の出神は群衆に向ひ宣傳歌を歌ひ始めたまへば、壇上の四柱もその聲に合せ
て節面白く歌ひかつ踊り舞ひ狂ひける。

黄金山に現れませる 埴安彦や埴安姫の

貴の命の作られし 嚴と瑞との玉銚の

道を廣むる神司 大道別の又の御名

黒雲四方に塞がれる 暗世を照らす朝日子の

日の出神と現はれて
善と悪とをそぐり別け

山の尾の上や河の瀬に
猛り狂へる枉津見を

眞澄の鏡に照しつと
恵みの劍ふり翳し

醜の身魂を照さむと
山の尾渡り和田の原

海の底まで隈もなく
清めて廻る宣傳使

駒山彦や猿世彦
醜國別や桃上彦の

貴の命の宣傳使
昔は昔今は今

時世時節に従ひて
白梅薫る初春の

優雅心になり鳴りて
吾言靈も清彦の

教に服へ百人
教に従へ諸人よ

世は紫陽花の七變り
天地日月さかしまに

變り輝く世ありとも
この世を造りし神直日

心も廣き大直日
天地四方を「かね」の神

珍の御言の麻柱に
世は永久に開け行く

世は永遠に榮え行く 誠をつくせ百の人
 神の御言を畏みて 身魂を磨け幾千代も
 ミロクの世までも變らざれ ミロクの世までも移らざれ
 世は烏羽玉の暗くとも やがて晴れ行く朝日子の
 日の出國の神國と なり響くらむ天と地
 天地四方の神人よ 天地四方の神人よ
 海の内外の國人よ

との歌につれて數多の群衆は、各自に手を拍ち踊り狂ひ、
 今迄の騒動は一場の夢
 と消え失せ、館の外には長閑な春風吹き渡りゐる。
 之より清彦は紅葉彦命と名を
 賜り、祕露の國の守護職となりける。

(大正一一・二・七 舊一・一一 北村隆光録)

第一五章 ブラジル峠〔三六五〕

春霞棚引渡る海原の

浪搔き分けて立昇る

日の出神の宣傳使

醜の曲津を拂はむと

醜國別の體主靈從

靈主體從と成り變り

楔袂ひし生魂

心【つくし】の「たちばな」の

淤滕山津見と改めて

從屬の司も腰骨の

蚊々虎彦を伴ひつ

教を巴留の國境

ブラジル山に差掛る。

春とはいへど赤道直下の酷熱地帯、木葉を身體一面に纏ひ暑熱を凌ぎ乍ら、腰

の屈める蚊々虎彦に荷物を持たせ、ブラジル峠を登り行く。

モシモシ一寸一服さして下さいな。汗は瀧の如く、着物も何も夕立に逢うたや

うに【びしよ】濡れになつて了つた。何處かに水でもあれば一杯飲みたいものですワ」

「確かにせぬか蚊々虎、何だ、海の底に吾々は長らくの苦勞艱難を嘗めて金門の番をして来たことを思へば、熱い苦しいのと云つて居るか。空氣は十分に無し彼方此方を見ても水ばかりで、碌に息も出来はしない。何ほど嶮しい坂だつて、汗が出ると云つても、涼しい風が【ちよい】ちよい来るじやないか。十分に汗を搾り足を疲らして、もう一步も前進することが出来ないやうになつた所で、一服するのだ。その時の樂さと云ふものは、本當に樂の味が判るよ。龍宮の苦しい、息も碌に出来ない所から、陸へ揚げて貰つた嬉しさと云ふものは、たとへ足が棒になつても萬分の一の苦勞でも無いワ。貴様はまだ苦勞が足りないからさう云ふ弱いことを云ふのだ。俺に隨いて來い」

「それはあまり胴欲ぢやございませぬか。私は龍宮へ行つたことが無いから、貴下のお話は嘘か、本當か知りませぬが、水の中で苦しいのは分つて居ります。併し本當の水の中なら三分か、五分經ぬ間に息が斷れて了うぢやありませんか。そ

れに長らく龍宮に貴下は居られたのぢやから、それを思へば貴下の御言葉は割引
して聞かねばなりません。私はもう半時も休まずに、この山道を歩かされよう
ものなら、身體の汁はさつぱり汗になつて出て了ひ、コンナ熱い山の中で木乃伊
になつて了ひます。ソナ殺生な事を云はずと貴下も改心なさつたぢやないか、
【ちつと】位の情容赦は有りさうなものだナア
と涙を溢す。

「オイ蚊々虎、貴様はなんだい、男じやないか。この位なことで屁古垂れて涙を
流すと云ふことがあるかい」

「私は決して泣きませぬ」

「ソナナラ誰が泣くのだ」

「ハイハイ、私は立派な一人前の男です。苟くも男子たるもの如何なる艱難辛苦
に逢うても【びく】とも致しませぬ。私について居るお客さまが泣くのですよ」

「お客さまは何だ、貴様の副守か、よう泣く奴だな。蚊々虎と云ふからには、蚊
の守護神でも憑いて居るのぢやらう。今まで人の生血を吸ふやうな悪い事ばかり

行つて来た報いだ。貴様の腰は何だい、くの字に曲つて了つとるぢやないか。今までの罪滅した。副守に構はず、本守護神の勇氣を出して俺に随いて来ぬかい」

「貴下は今まで醜國別と云うて、随分善くないことをなさいましたなあ。私は貴下の御命令で【こいつ】は悪いな、コンナことしたらきつと善い報いはないと思つたが、頭から【がみつける】様に云はれるものだから、今までは虎の威を借る狐のやうに、心にも無いことを行つてきました。言はば貴下が悪の張本人だ。私は唯機械に使はれた【のみ】ですワ」

「ウン、何方にせよ使はれた【のみ】か、使はれぬ【しらみ】か、人の生血を吸ふ蚊か、虎か、狼か、熊か、山狗かだよ」

「モシモシそれは餘ぢやありませんか。虎、狼とは貴下のことですよ。日の出神さまに助けて貰うて淤滕山津見とやらいふ立派な名を貰つて、偉さうにしてござるが、貴下は人を威す淤滕山津見だ。餘りどつせ、【ちつと】昔のことも考へて見なさい。大きな口もあまり叩けますまい。此處には貴下と私とただ二人で傍に聞いてをるものも無いから遠慮なく申しますが、本當に醜の曲津と云つたら貴下

のことですよ」

「三五教は過ぎ越し苦勞や、取越し苦勞は大禁物だ。何事も神直日、大直日に見直し聞直し、宣り直す教だから、ソナ死んだ兒の年を數へるやうな、下らぬ事は止したがよからうよ。過ぎ去つたことはもう一つも云はぬがよいワ」

「へーい、うまく仰有いますワイ。龍宮で門番をして苦かつたつて、仰有つたじやないか、それは過ぎ越し苦勞ぢやないのですか」

「よう理屈をいふ奴ぢやな。今までのことは「さらり」と川へ流すのだい。さうして心中に一點の黒雲も無く、清明無垢の精神になつて、神様の御用をするのだよ」

「また地金が出やしませぬかな。何ほど立派な黄金の玉でも、竹熊の持つて居るやうな鍍金玉では直に剥げると云ふことがありますよ。地金が石であれば何ほど金が塗つてあつても二つ三つ擦ると生地が現はれて來るものですかナア」

「莫迦いへ、俺の身魂は中まで水晶だ。元は立派な分靈だ。雉もなかねば射たれまいといふことがある。もう生地の話は止めて呉れ」

「ヘーン、うまいこと仰有りますワイ。口は重寶なものですな」

「オー最早山頂に達した。オイ蚊々虎、話しをしとる間に何時の間にか、山の頂邊に来てしまったよ。貴様が苦しい、もう一步も歩けぬなどと屁古垂れよつて男らしくもない、副守か何か知らぬが、吠面かわいて見られた態ぢや無かつたぞ。もう此處まで来れば涼しい風が當つて、今までの苦勞の仕忘れだ。お前の顔の黒くなつたのも、これも苦勞の仕忘れになつて、白い顔になると重寶だが、これ丈は矢張り生地が鐵だから、金にはならぬよ。まあ、顔が黒いたつて心配するには及ばない。貴様の何時も得意な暗黒で、ちよいちよい何々するには持つて来いだ。暗に烏が飛つたやうなもので、誰も見付けるものが無いからな。本當に苦勞の苦勞甲斐があるよ」

「暗黒に出るのは矢張り蚊ですもの、貴下の仰有ることが本當かも知れませぬ。間違つてゐるかも知れませぬ。しかし貴下の名はいま出世して淤滕山津見とか仰有つたが何と黒い名ですな。恐さうな「おど」おどとした暗の晩に烏の飛つたやうな暗【ずみ】ナント、あまり人のことは言はれませぬ。日の出神さまも偉い

ワイ。それ相當な名を下さる。人を威したり、暗雲になつて譯も分らぬ明瞭せぬ墨のやうな屁理屈を列べる醜國別に於滕山津見とは、よくも洒落たものだワイ、アハ、ハ、ハ、

「オイ蚊々虎、主人に向つて何を言ふ。無禮であらうぞよ」

「ヘン、昔は昔、今は今と、日の出神が歌はれたことを貴下覚えてみますか。昔は昔、今は今後は何だつたか忘れしました。エヘン」

(大正一一・二・八 舊一・一二 外山豊二録)

第一六章 靈縛 (三六六)

一行はブラジル峠の山頂に四邊の風景を眺めながら、下らぬ話に耽り居たり。涼しき風は吹き捲り、次第に烈しく周圍の樹木も倒れむ許りなりけり。蚊々虎は側の樹の根にしつかとしがみ付き、

「モシモシ宣傳使様、どうしませう。散ります散ります」

「それだから蚊と言ふのだ。これつ許りの風が吹いたと云つて、木の根にしがみ付いて散ります散りますもあつたものかい。まるで酒でも注いで貰ふ時の様なことを言ひよつて、弱蟲奴が、これから巴留の國へ行つたら、これしきの風は毎日吹き通しだよ。大沙漠を駱駝の背に乗つて横断しなくてはならぬが、貴様の様な弱いことでは、駱駝の背から蚊のやうに吹き飛ばされて了ふかも知れぬ。あーあ旅は一人に限るナ。コンナ足手纏ひを連れて居ては、後髪を牽かれて、進むことも、何うする事も出来やしない嫌な事だワイ」

「モシモシ宣傳使様、偉さうに仰有るな、後髪を牽かると云つても、髪の毛は一本もありやしないワ。俺の頭を見やつしやれ、棕櫚のやうな立派な毛が澤山と、エヘン、アハン」

「貴様のは髪ぢや無いよ。それは毛だ。誠の人間には髪が生えるし、獣には頭に毛が生えるのだ。俺の頭は髪だぞ。髪と云ふ事は、鏡を縮めたのだ。よう光つとらうがな」

蚊が止まつても迂り落ちる様な頭をして、神様も何もあつたものか。蚊が止まつて嚙様だ。アハ、ハ、ハ、ハ、

何を言ふ。俺は勿體なくも頭照す大御神様だ。頭照す大御神様の御神體は八咫の御鏡ぢやといふ事は知つて居るだらう

ヘン、甘いことを仰有いますな。流石は宣傳使様。大自在天の一の御家來、悪い事ばかり遊ばして、根の國底の國に追ひやられて、終には國處を賣つて、世界中を迂路つき廻つて、負け惜みの強い體のよい乞食だ。宣傳使様と云へば立派な様だが、乞食の親分見た様なものだ。頭照す大御神様も有つたものか。國處立退の命だ

貴様にはもう暇を遣はす。これから歸れ。何と云つても連れて行かぬ
(義太夫調)

私を何うしても連れなと言ふのですか。それはあんまり無情い、胴欲ぢや。思ひ廻せば廻すほど、俺ほど因果な者が世に有らうか。常世の國に顯れませる、大自在天の其の家來、醜國別と歌はれて、空行く鳥も撃ち落す、動もしるき神さ

まの、家來となつた嬉しさに、有らう事があるまい事か、勿體ない天地の神の鎮まり遊ばした、エルサレムの宮を穢し奉り、その天罰で腰痛み、腰は「く」の字に曲り果て、蚊々虎さまと綽名をつけられ、今は屈みて居るけれど、元を糺せば尊き神の御血筋、稚櫻姫の神の御子の常世姫が内證の子と生れた常照彦。世が世であれば、コンナ判らぬ淤藤山津見のお供となつて、重い荷物を擔がされ、ブラジル山をブラブラと、汗と涙で駆け登り一息する間もなく、もうよいこれで歸れとは、實につれない情ない、善と惡とを立別る、神がこの世に坐ますなら、淤藤山津見の醜國別、體主靈従の宣傳使、義理も情も知らぬ奴、矢張り惡は惡なりき。猫を冠つた虎猫の蚊々虎さえも舌を捲いて、泣くにも泣かれぬ今の仕儀、どうして恨を晴らさうか、今は淤藤山津見と、嚴めしさうな名をつけて、肝腎要の魂は、醜の枉津の醜國別、その本性が表はれて、氣の毒なりける次第なり。それよりまだまだ氣の毒なは、この山奥で只一人、足の痛みし蚊々虎に、放とけばりを喰はずとは、ホんに呆れた惡魂よ。玉の緒の命の續く限り、こいつの後に引添うて、昔の缺點を【ヒン】剥いて、邪魔して遣らねば置くものか。ヤア、トンツンテン

チンチンチンだ」

「こらこら蚊々虎、馬鹿な事を云ふな。貴様そら本性か、心からさう思つてるのか」

「本性で無うて何んとせう」

と手を振り口を歪め、身振り可笑しく踊り出したり。

「ハ、貴様は氣樂な奴だナ。コンナ處で狂言したつて、見る者も、聞く者もありやせぬぞ。誰に見せる積りぢや」

「お前は天下の宣傳使、これ丈澤山の御守護神が隙間もなしに聞いて居るのが分らぬか。俺はお前に聞かすのぢや無い。其處らあたりの守護神に、お前の恥を振舞うて行く先き先きで神懸りさせて、お前の缺點を【ヒン】剥かす俺の仕組を知らぬのか。それそれそこにも守護神、それそれあそこにも守護神、四つ足身魂も澤山に面白がつて聞いて居る。夫れが見えぬか見えないか。お氣の毒ぢや、御氣の毒では無いかいな」

このとき幾十萬とも知れぬ叫び聲が四邊を壓して、蚊の鳴く如くウワンと響

きぬ。稍あつて幾十萬人の聲として、ウワハ、、、とそこら中から、聲のみが聞え來たる。淤滕山津見は兩手を組み、顔の色を變へ、大地に胡坐をかき、思案に暮るるものの如くなりけり。

蚊々虎は俄に顔色火の如くなり、兩手を組みしまま前後左右に飛び廻り、
「く、、、くにくにくにくに
て、、てるてる
ひ、、め、、
くにてるひめ」
と口を切りぬ。

淤滕山津見は、直に姿勢を正し兩手を組み審神に着手したり。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬」

と、唱ふる神文につれて蚊々虎は大地を踏み轟かし踊り出したり。

「汝國照姫とは何れの神なるぞ」

「キ、鬼城山に立籠り、美山彦と共に常世姫の命の命令を奉じ、地の高天原を占

領せむと、晝夜苦勞を致した木常姫の再來、國照姫であるぞよ。その方は醜國別、今は尊き淤滕山津見司となりて、日の出神の高弟、立派な宣傳使、妾は前非を悔い木花姫の神に見出され、アーメニヤの野に神都を開くウラル彦と共に、發根と改心を致して今は尊き誠の神と成り、アーメニヤの野に三五教を開き神政を樹立し、埴安彦命の教を天下に布くものである。これより巴留の國に宣傳の爲に出で行かむとするが、暫く見合して後へ引き返し、この海を渡つてアーメニヤの都に立歸れ。巴留の國は神界の仕組變つて日の出神自ら御出張、ゆめゆめ疑ふな。國照姫に間違は無いぞよ」

淤滕山津見は、全身に力を籠めて神言を奏上し、ウンと一聲蚊々虎の神懸りに向つて靈光を放射したるに、蚊々虎は大地に顛倒し、七轉八倒泡を吹きだしたり。其方は邪神であらう。今吾々の巴留の國に到る事を恐れて、この蚊々虎の肉體を使つて、天下の宣傳使を誑かさむとする枉津の張本、容赦は成らぬ。白状いたせ」

「恐れ多くも日の出神の御使、國照姫に向つて無禮千萬。容赦はせぬぞ」

「容赦するもせぬも有つたものか、この方から容赦いたさぬ」
と云ひながら、又もやウンと一聲、右の食指を以て空中に圓を畫き靈縛を施しければ、

「イ、痛い痛い、赦せ赦せ八、白状する。妾はや、八岐の大蛇の眷屬、八衢彦である。この巴留の國は妾らが隠れ場處、いま汝に來られては吾々仲間の一大事だから、國照姫が改心したと詐つて、汝をこの島よりボツ返す企みであつた。斯の如く縛られては何うすることも出来ぬ。サアもうこれから吾々一族は、ロツキー山を指して逃げ行く程に、どうぞ吾身の靈縛を解いて下さい。夕、頼む頼む」
「巴留の國を立去つて海の外に出て行くならば赦してやらう。ロツキー山へは斷じて行く事ならぬ。どうだ承知か」

蚊々虎の神懸りは、首を幾度とも無く無言のまま縦に振つてゐる。淤滕山津見は、ウンと一聲靈縛を解けば、蚊々虎の身體は元の如くケロリとなほり、流る汗を拭ひ乍ら、

「あゝ偉い事だつたワイ。何だか知らぬが俺の身體にぶら下りよつて、ウスイ目

に逢うた。サアサア宣傳使様、もういい加減に行きませうかい。コンナ處に居つては碌なことは出来ませぬよ」
と正氣に歸つた蚊々虎は先に立つてブラジル山を西へ下り行く。
(大正一一・二・八 舊一・一二 東尾吉雄録)

第一七章 敵味方(三六七)

山頂の木を捻倒す如き暴風もピタリと止みて、頭上は酷熱の太陽輝き始めたり。
於滕山津見は、蚊々虎と共にこの山を西へ西へと下りつつ、
「オイ蚊々虎、足はどうだい。ちつと軽くなつたか」
「ハイもう大丈夫です、この調子なれば如何な嶮しき山でも岩壁でも、たとへ千
萬里の道程でも行ける様な心持になつて來ましたワ」
「お前はしつかりせぬと曲津に取り憑かれる恐れがある。何と云つてもまだ改心

が足らぬから、ちつとも臍下丹田に魂が据わつて居ないので、種々の曲津に憑かれるのだよ。それで足が重くなつたり、苦みたり弱音を吹いたりするのだ。曲津は我々のこの山を越えて巴留の國へ行くのを大變に恐れて居るのだよ。それで腹の据わらぬお前に憑つて弱音を吹かすのだ。魂さへしつかりすれば、たとへ億兆の邪神が來たとて指一本さへられるものではないよ」

「ほんたうにさうですな、イヤこれからしつかり致しませう。随分私も貴下の惡口を言ひましたが、赦して下さいますか」

「赦すも赦さぬもあつたものか、皆お前に憑依した副守が言つたのだ。お前の言つたのぢやないワ」

「三五教は甘い拔道がありますな。あれ丈私が貴下のことを【ぼろ】糞に云つたつもりだのに、それでもやつぱり副守が言つたのですか」

「さうだ。邪神か四足の言葉だよ」

「それでも現に私が確に云つた事を、記憶して居ますがなあ」

「サア記憶して居る奴が四足だもの、虎の本守護神は奥の方にすつこみて、副守

がアンナ下らぬ事を云ふのだ。蚊々虎も副守も、まあ似た様なものだねー」

蚊々虎「さうすると私が副守の四足ですか、そりやあまり非道いぢやありませんか。

か。一體貴下のおつしやる事は何が何だか判らなくなりましたよ」

「人間の云ふことならちつとは、こつちも怒つても見たり、理屈を云うて見るの

だけれども、何分理屈を言うだけの價値がないからな」

「へー妙ですな。テンで合點の蟲が承知しませぬわい」

「まあ好い。俺の言ふ通りにさへすればよいのだ。その内に身魂が研けて本守護

神が發動するよ」

二人はコンナ話しに旅の疲勞を忘れて、ドンドンと雑木の茂る、山道を下り行

く。傍に可なり大きな瀑布が、飛沫を飛ばして懸つてゐる。見れば四五人の荒く

れ男が瀑布の前に腰打掛けて、何か面白さうに囁いてゐた。二人はその前を過ら

むとする時、その中の一人の男が大手を擴げて谷道に立塞がり、

「オイ暫く待った。お前は何處のものだ。ここは巴留の國だぞ。鷹取別の司の御

守護遊ばす御領地だ。他國の者はこの瀧より一人も前へ進む事を許さぬのだ。速

かに後に引歸せ」

と睨み付ける。蚊々虎は腕を捲り捻鉢巻をしながら、

「巴留の國が何だ。鷹取別がどうしたと言ふのだ。勿體なくも三五教の大宣傳使
於滕山津見のお通りだ。邪魔を致すと利益にならぬぞ」

途に立塞がつた男、

「俺は巴留の國の關所を守る荒熊といふ者だ。此方の申す事を聞かずに通るなら
通つて見よ。利益にならぬぞ」

「よう吐かしよつたな。俺が爲にならぬと云へば、猿の人眞似をしよつて爲にな
らぬと吐きよる。ウンそれも判つて居る。人に物を貰つて返しにお返禮を出す事
がある。オツトドツコイ貰ひ言葉に返し言葉、しやれるない。俺を一體何と心得
てをる。俺は貴様のやうな副守の容器になつた四足魂とは譯が違ふのだ。本守護
神様の御發動なされる正味生粹の蚊々虎の狼だぞ。下におれ下におれ。神様のお
通りに邪魔ひろぐと貴様の爲にならぬぞ。コラ荒熊もうお返禮は要らぬぞよ」

「此奴は執拗い奴ぢや。オイ皆の者來ぬか來ぬか。五人寄つてこの黒ん坊を倒ば

してしまへ」

「アハ、ハ、ハ、蚊々虎は流石に虎さまだ。俺一人に五人も掛らねば、どうする事も出来ぬとは、貴様らが弱いのか、俺が強いのか、根っから葉っから分らぬ。ヤイ荒熊の五つ一美事掛るなら掛つて見よ」

と拳を握り、腕をニユツと前に突き出し、黒い目をグルグルと剥いて見せる。

「ヤイ貴様あ、何處の馬の骨か、牛の骨か知らぬが、偉う威張る奴だナ。もうそれ丈か、もつと目を剥け、鼻を剥け、口を開け、お化奴が」

「言はして置けば何を吐かすか判りやしない。愚圖々々吐かすこの鐵拳で貴様の横面を、カンカンと蚊々虎さまが巴留の國だぞ」

「オイオイ掛れ掛れ。伸ばせ伸ばせ」

と荒熊が下知するを、蚊々虎は兩方の手に唾しながら、

「サア来い、五つ一、一匹二匹は面倒だ。一同五人の奴、束になつて束て一度にかかれ」

「何だ、割木か、柴のやうに束になつてかかれと、その廣言は後にせえ。吠面か

わくな、後の後悔は間に合はぬぞ
と前後左右より蚊々虎に武者振りつく。

「ヤー、わりとは手對へのある奴だ。もしもし、センセン宣傳使様、鎮魂だ、鎮魂だ、ウンと一つやつて下さいな」

「マー充分揉れたがよからうよ。あまり貴様は腮が達者だから、鼻の一つも捻ぢ折つて貰へ。アハ、ハ、ハ、」

「そりやあまり胴欲ぢや、聞えませぬ。コンナ時に助けて下さるのが宣傳使ぢやないか、人を見殺しになさるのか。もしもし、もうそれそれ今腕を抜かれる。

「イ、ハ、イツターイ腕が抜ける。コラ荒熊、荒い事するな。柔かに喧嘩せぬかい
喧嘩するに固いも柔かいもあるか。この鐵拳を喰へ」

「と云ふより早くポカリと打つ。四人は蚊々虎の左右の手足に確りと、獅噛付きる。」

「オイ四人の者共それを放すな。これからこの蚊々虎の身體を突かうと殴らうと俺の勝手だ」

「オイ突くのも撲ぐるのもよいが、あまり酷いことをするなよ。ちつと負けとけ、割引せい」

「俺は負けと云つたつて、喧嘩に負けるのは嫌ひだ。木挽なら何の様に割挽くが俺や止めた、嫌だ。貴様の生首をこれから捻ぢ切つてやるのだ。アー面白いドツコイ、貴様の面ぢや面黒いワイ。ワハ、ハ、ハ、ハ」

と笑ふ途端に崖から谷底目がけてツデンドウと落込みける。四人は驚いて掴まへた手足を放したれば、蚊々虎は元氣づき、

「さあ大丈夫だ。貴様らもこの谷底へみんな葬つてやらう」

四人は慄ひ戦き、岩に獅噛付いて居る。

「アハ、ハ、ハ、俺の眞正面に來よつて、この方の靈光に打たれたと見えて、荒熊奴が仰向けに谷底に「ひつくり」返つた。オイ荒熊の乾兒共、面を上ぬかい。俺の靈光に「ひつくり」返してやらうかい。もう大丈夫だ。もしもし宣傳使様、貴方はあまり卑怯ぢやないですか。味方の味方をせずに敵の味方をするとはよつぽど好い唐變木ですよ。それだから貴方はおーどーやーまーづーみーと云ふのだ。こ

の蚊々虎の御神力に恐れ入つたらう。これからは荷物持ちになれ
と云つて大法螺を吹きながら四邊を見れば、宣傳使の影は煙と消えて見えざりけ
り。

『あゝ弱い宣傳使だな。此奴もまた谷底に放られたのか知らぬ、あゝ氣の毒なこ
とだ。袖振り合ふも多生の縁、躓く石も縁の端、折角ここまでやつて來たものの、
荒熊と一緒に谷底に放られてしまつたか、エー氣の毒ぢや、アー人間と云ふもの
は判らぬものだナア。今まで偉さうに蚊々虎々々だのと昔の「かばち」を出し
よつて、偉さうに言つて居たのが、この悲惨な態は何の事かい。昔は昔、今は今
ぢや』

と調子に乗つて四人の男を前に据ゑ、一人御託を竝べて居る。そこへ流暢な聲で、

『神が表に現はれて 善と惡とを立別る

この世を造りし神直日』

と云ふ宣傳歌聞え來たりぬ。

「ヨウまた宣傳使か、誰だらう。谷底へ嵌つた幽靈の聲にしては、何となしに力がある。ハテナ、怪體な事があれば有るものぢや」

と獨語を云つてゐると、そこへ淤滕山津見は谷底に落ちたる荒熊を、背に負ひ勞り乍ら宣傳歌を歌ひつつ上り來たり。

「ヤヤ　バ、化け者が、よう化けよつたナア」

「オイオイ蚊々虎、俺だよ。化物でも何でもない眞實者だ。宣傳使は善と惡とを立別る役だ。貴様があまり御託を竝べるから同情は出來ない。却つて俺は荒熊に同情してこの危難を助けたのだ。神の道には敵も味方もあるものか。三五教の御主旨は「味方の中に敵が居り」、敵の中にも味方が在る」と教へられてある。貴様は俺の味方でありながら神様の御心を取違ひ致して、却て敵になるのだ。この荒熊さまは吾々に對して無茶なことを云ひ、吾々の通路を妨げる敵の様だが、敵を敵とせず、敵が却て味方となる教だ。どうだ合點が行つたか」

蚊々虎は怪訝な顔して、

□ へー□

と味の^{あぢ}ない味^み噌^そを喰^{くら}つた様^{やう}な顔^{かほ}をして、首^{くび}を傾^{かたむ}け指^{ゆび}をくはへ、ア^アフンとして山^{やま}道^{みち}に佇^{ちよりつ}立^たしゐたり。

(大正一一・二・八 舊一・一二 谷村眞友録)

第一八章 巴留^{はる}の關守^{せきもり} (三六八)

激^{げき}潭^{たん}飛^ひ沫^{まつ}霽^{がう}々と音^{おと}騷^{さわ}がしき千^{せん}仞^{じん}の谷^{たに}間^まに、身^みを躍^{をど}らして飛^とび入^いり、重^{ぢう}傷^{しやう}に惱^{なや}む荒^{あらくま}熊^{くま}を助^{たす}け起^{おこ}して吾^{わが}背^せに負^おひ、漸^{やうや}く此^こ處^こに驅^{かけ}上^{あが}つて來^きた淤^{おど}滕^{やま}山^{づみ}津^み見^みは、荒^{あらくま}熊^{くま}を大^{だい}地^ちに下^{おろ}して神^{かみ}言^{こと}を奏^{そう}上^{じやう}し鎮^{ちん}魂^{こん}を施^{ほどこ}し、頭^{とう}部^ぶの傷^{きず}所^{しよ}に向^{むか}つて息^{いき}を吹^ふきか^かけたるに、不^ふ思^し議^ぎや荒^{あらくま}熊^{くま}の負^ふ傷^{しやう}は拭^{ぬぐ}ふが如^{ごと}く癒^いえ、苦^く痛^{つう}も全^まく止^とまりて元^{もと}の身^{からだ}體^{たい}に復^{ふく}したり。荒^{あらくま}熊^{くま}は大^{だい}地^ちに兩^{りやう}手^てをつき高^{かう}恩^{おん}を涙^{なみだ}と共^{とも}に感^{かん}謝^{しや}し、且^かつ無^ぶ禮^{れい}を陳^{ちん}謝^{しや}したりける。

□ オイ荒^{あらくま}さま、ドツコイ黑^{くろん}坊^{ぼう}の熊^{くま}さま、三^{あな}五^な教^{ひけう}の御^ご神^{しん}德^{とく}とはコ^コンナもの^{もの}だ^だい。耳^{みみ}

の穴を浚つて「とつくり」と聞かう。エヘン、蚊々虎様の
と云ひつつ指の先で鼻を押さへながら、
「この大きな鼻の穴から「フン」と伊吹をやつたが最後、貴様は蝶螻が泥に酔つ
たやうに大きな口を開けよつて、ア、アと虚空を掴んで仰向けに顛覆返つたが
最後、この深い深い谷底へ「スツテンドウ」と顛覆返つて頭を打ち割つて、「ア
イタツタツタ、コイタツタツタ、ア、ア今日は如何なる悪日かと、處もあらうに
コンナ深い深い谷底へ取つて放られ、此處で死ぬのか、後で女房は嘸やさぞ、悔
むであらう。死ぬるこの身は厭はねど、昨日に變る今日の空、定め無き世と云ひ
ながら、さてもさてもあまりだわ、不運が重なれば重なるものか、と云つて女房
が泣くであらう」などと下らぬ事を、河鹿のやうに、谷水に漬つて吐きよつた其
處へ、天道は人を殺さず、三五教の俺らの先生様の醜國別オツトドツコイ淤藤山
津見様が悠然として現はれたまひ、攝取不捨、大慈大悲の大御心をもつてお助け
遊ばしたのだよ。何と有難いか、勿體ないか、エーン改心を致せ、慢心は大怪我
の基だぞよ。慢心するとその通り、谷底に落ちて酷い目に遇つてアフンと致さね

ばならぬぞよと、三五教の神様は仰有るのだ。その實地正眞を此方がして見せてやつたのだぞ。改心ほど結構なものは無いぞよ。エヘン」

「コラ、コラ蚊々虎、黙らぬか。何といふ法螺を吹く、神様の教を聞きかじりよつて、仕方のない奴だ。黙つて俺の云ふ事を聽いて居れ」

「ヘン、大勢のところでは恥を搔かさいでも、ちつとは俺に花を持たして呉れてもよささうなものだなあ」

と小聲にて呟く。荒熊は宣傳使の顔をじつと見上げ、

「ヨウヨウ、貴下は醜國別様では無かつたか」

「ヤ、さういふお前は高彦ではなかつたか。これはこれは妙な處で遇うたものだ。一體お前はコンナ處へどうして來たのだ。常世會議の時には随分偉い元氣で彌次りよつたが、かうなつた譯を聞かして呉れないか」

「ハイ、ハイ、委細包まず申上げますが、併しながら、貴下は自在天様の宰相醜國別様、一旦幽界とやら遠い國へお出になつたと云ふ事なのに、どうしてまあ此處へお越しになつたのか、ユ、幽霊ぢや無からうかナア」

「幽霊でも何でもなし」

實は斯様々々と、有し來歴を詳細に物語り、高彦の經歷談を熱心に聴き入りぬ。高彦は兩眼に涙を湛へながら、

「私は貴下が宰相として大自在天にお仕へ遊ばした頃は、貴下のお加護で相當な立派な役を與へられ、肩で風を切つて歩いたものでございますが、貴下の御歸幽後は鷹取別の天下となり、惡者のために讒言されて常世神王様の勘氣を蒙り、常世國を叩き拂ひにされて妻子眷屬は離散し、私は何處へ取つく島もなく、寄る邊渚の捨小舟、漸く巴留の國に押し流され、夜に紛れてこの國に上り、勞働者となつて働人の仲間に紛れ込み、些し力のあるを幸に今は僅に五人頭となつて、この巴留の國の關守となり、面白からぬ月日を送つて居ります。この巴留の國には常世神王の勢力侮り難く今また伊奘册命様が何處からかお出になつて、ロツキー山にお鎮まりなされ、常世神王の勢力ますます旺盛となり、この巴留の國は鷹取別の御領地で、それはそれは大變嚴しい制度を布かれ、他國の者は一人もこの國へ這入れない事になつて居ます。萬一これから先へ貴下がお越しなさるやうな事が

あれば、私は關守としての役が勤まらず、鷹取別の面前に引き出され、裁きを受けねばなりません。その時私の顔を見知つてゐる鷹取別はヤア貴様は高彦ではないか、と睨まれやうものなら、又もやこの國を叩き拂ひにされて辛い目に遇はねばならぬ。折角命を助けて貰つて、その御恩も返さず、これから元へ歸つて下さいと申上げるは恩を仇にかへす道理、ぢやと申して行つて貰へば今申す通りの破目に遇はねばならず、貴下がお出になるならば、この關守の荒熊の首を刎ねて行つて下さい」

と瀧の如き涙を垂らして大地に泣き伏しける。蚊々虎は笑ひ出し、

「ウワハ、弱い奴ぢや。何だい、高の知れた鷹取別、彼奴がそれほど恐ろしいのか。俺の鼻息で貴様を吹き飛ばしたやうに、鷹取別もまた吹き飛ばしてやるワイ。エ、心配するな、蚊々虎に従いて来い、俺が貴様を巴留の國の王様に爲てやるのだ。面白い面白い」

「オイ蚊々虎、貴様は口が過ぎる。この國の守護神が、其邊一面に聞いてをるぞ」折から吹き来る夏の風、この場の囁きを乗せて巴留の都へ送り行く。

(大正一一・二・八 舊一・一二 加藤明子録)

第四篇 巴留の國

第十九章 刹那心 (三六九)

淤^{おど}滕^{やまづ}山^み津^み見^みの宣^{せんでん}傳^し使^しは大地^{だいち}に伏^ふしたる荒^{あらくま}熊^まに向^{むか}ひ、
高^{たか}彦^{ひこ}殿^{どの}、貴^{あなた}下^たは今^{いま}まで大^{だい}膽^{たん}不^ふ敵^{てき}の強^{つはもの}者^{もの}なりしに今^{いま}斯^かく卑^ひ怯^{けふ}未^み練^{れん}の精^{せい}神^{しん}になら
たのは、察^{さつ}するに貴^{あなた}下^たの身^{しん}體^{たい}には、邪^{じゃ}神^{しん}惡^{あく}鬼^きが憑^{ひよう}依^いして、天^{てん}授^{じゆ}の身^み魂^{たま}を弱^{よわ}らせ臆^{おく}
病^{やうもの}者^{もの}と墮^だ落^{らく}せしめたるならむ。凡^{すべ}て人^{ひと}は心^{こころ}に惡^{あく}ある時^{とき}は物^{もの}を恐^{おそ}れ、心^{こころ}に誠^{まこと}ある
時^{とき}は物^{もの}を恐^{おそ}れず、吾^{われ}は是^{これ}より貴^{あなた}下^たの魂^{みたま}をいれ替^かへせむ。暫^{しばら}くここに瞑^{めい}目^{もく}靜^{せい}坐^ざさ

れよ」

と嚴命したるに、荒熊は唯々諾々として、命のまにまに兩手を組み、路上に瞑目静坐したり。

宣傳使は雙手を組み、一二三四五六七八九十百千萬の神嘉言を奏上し終つて、左右の手を組みたるまま食指の指頭より靈光を發しつつ、荒熊の全身を照したり。荒熊は忽ち身體動搖し始め前後左右に荒れ狂ひ、「キヤツ」と一聲大地に倒れたるその刹那、今まで憑依せる惡靈は、拭ふが如く彼が身體より脱出したり。宣傳使は「赦す」と一聲呼ばはると共に荒熊は元の身體に復し、心中英氣に滿ち顔の色さへ俄に華やかに成り來たりぬ。

荒熊は突立上り大地を踏み轟かし、
「吾こそは元を糺せば、大自在天の宰相醜國別の御片腕、一時の失敗より心魂阻喪し、千思萬慮の結果度を失ひて、八岐大蛇に憑依され、風の音、雨の響きにも心を痛め茅の穂にも戦き恐れ、折角神より受けたる吾が御魂も、殆ど潰え果て、弱り切りたるその所へ、如何なる神の引き合せか、昔仕へし醜國別の宣傳使に、

人跡稀なるこの山奥に廻り合ひ、危難を救はれ、日頃吾身を冒しむたる悪鬼邪神
を取拂はれ、心は晴れて大空の月の如く輝き渡り、澄みきりたり。最早かくなる
上は幾百萬の敵軍も、億兆無数の曲神も、眞澄の鏡振りはへて、誠の劍抜き持た
し、縦横無盡に切りまくり天地に轟く言靈の力に、巴留の都に蟠まる、鷹取別を
言向けて功績を立てむ。嗚呼嬉しし嬉しし悦ばし』
と腕を叩いて雄叫びしたり。

宣傳使は満面に笑を湛へ、

『あゝ勇ましし勇ましし。高彦殿これより巴留の都に向はむ、案内されよ』

と、先に立ちて行かむとするを、高彦は袖を叩へて、

『暫くお待ち下さいませ。この先には數萬の群衆、日の出神の當國に押し寄せ來
ると聞き軍勢を整へ、伏兵を設けて待ち居れば、如何に神徳高くとも軽々しく進
むべからず、一と先づ我は様子を窺ひ報告仕らむ。暫く此所に待たせ給へ』
と、雲を霞と驅け出したたり。

蚊々虎は肘を張り、右の手の拳を固めて左の利き腕を打ち敲きながら、

「たとへ悪魔の軍勢幾百萬押し寄せ来る共、この蚊々虎が腕に任せ、寄せ来る敵を縦横無盡に打ち伏せ張り倒し、一泡吹かせて呉れむ。ヤー面白し面白し、吾一生の腕試し、腕が折れるか千切れるか、蚊々虎の隠し力の現れ時、サアサア出て来い、やつて来い。役にも立たぬ蠅蟲奴ら、この蚊々虎の鼻息に百や二百の木端武者、吹いて吹いて吹捲り……」

「その廣言は後の事だ、さう今から力むとまさかの時に力が抜けて了ふぞ、蚊々虎」

「宣傳使様、オー此處な四人の守護神、人間様、心配するなよ。俺の力をお前達は知らぬから取越苦勞をするが、神の道に取越苦勞は大禁物ぢや。今と云ふこの刹那が勝敗の分る所、最初から敵を恐れてどうならうか、戦はぬ内から蚊々虎は敵を呑んで居るのだ。臆病風に誘はれては成らないぞ。この蚊々虎さまがブラジル峠を登つて来る時に、道の兩方に雲霞の如き、數限りも知れぬ澤山の敵が、俺等を待ち伏せて居た。その時この宣傳使を傍の木の下に忍ばせ置き、數萬の敵に向つて大音聲。ヤーイ皆の奴木端武者共、俺を何と心得てゐる。この方は廣い

世界に二人とない智勇兼備の天下の豪傑蚊々虎さまとは吾事なるぞ。相手になつて後悔するな。サー来い勝負と大手を擴げた。數多の敵は言はして置けば要らざる廣言、目に物見せてくれむと、四方八方より、タツタ一人の蚊々虎さまを目蒐けて攻め寄せたり。強力無雙の蚊々虎さまは、寄せ来る敵を箸で蠶を撮む如うに、右から来る奴を左へポイントコセ、左から来る奴を右へポイントコセ、終にはエ、面倒と、首筋を一寸撮んで空を目がけてプリンプリン、また来る奴を一寸撮んでプリンプリン、上から降りて来る奴、下から上へ放られる奴、空中で頭の鉢合せをして、アイタ、ピカピカと目から火を出し、放り上げられた奴と、宙から落ちて来る奴と、途中で貴方お上りですか、私は降りです、下へ降りなしたら蚊々虎さまに宜敷……」

「コラコラ法螺を吹くにも程がある。黙らぬかい。言はして置けば調子に乗つて……ここを何と心得をる。數萬の強敵を前に扣へて置いて、ソナ氣樂なことを言うて居る所で無いぞ」

「ヤー、ヤツパリ淤滕山津見ぢやなあ、數萬の敵にオドオドして、向ふは眞暗が

り、暗墨の如くに、一寸先は眞黒助だ。エヘン豪さうに口ばつかり、取越苦勞はするな過越苦勞は禁物ぢやのと、口先で立派なことを仰有るが、この蚊々虎さまはかう見えても刹那心、たとへ半時先に鶮殺しに逢はされやうが、ソナ事は神様の御心に任して居るのだ。モシ宣傳使さま、さうぢや有りますまいかな。釋迦に説法か、負うた子に教へられて淺瀬を渡ると言ふのか、いやもうトンとこの邊が合點の蟲が、承知しませぬワイ。まさかの時になつて來ると、宣傳使さまの覺悟も誠に怪しい頼り無いものだワイ」

と、目を剥き舌を少し出して、宣傳使の顔をチヨツと見上げる。

宣傳使は顔を少しくそむけながら、

「さうだなア。さう言へば、マアソナものかい」

「ソナものかいも有つたものかい。甲斐性無し奴が、ちと改心したか、エーン」

「蚊々虎、無禮で有らうぞよ」

斯かる所へ以前の荒熊は、呼吸を喘ませながら、坂道を上り來たりぬ。

蚊々虎は頓狂な聲で、

「ヤー歸つたか様子は何んと、仔細は如何に、細に、言上仕れ」

「また貴様出しやばるな」

「出しや張るツて、刹那心ですよ。氣が何だか急から急いで問うたのですよ。

決して取越苦勞ではありませぬよ」

荒熊が、

「申し上げます、不思議なことには何時の間にか人影も無くなつて居ります。之

には何か深い計略の有る事と思ひますが、軽々しく進む譯には行きませぬ。一

つこれは考へものですか」

「ナ―二刹那心だ。行く所まで行かな分るものかい。進め進め」

と蚊々虎は、先に立つて進み行く。

後に六人は路傍の岩に腰打ち掛け、何かヒソヒソと頭を鳩めて囁きゐたり。

蚊々虎は只一人、ドンドン腕を振りながら一目散に坂道を下り行く。

(大正一一・二・八 舊一・一二 森良仁録)

第二〇章 張子の虎（三七〇）

淤^{おど}滕^{やま}山^{まづ}津^み見^みは荒^{あらく}熊^まの高^{たか}彦^{ひこ}その他^たの四^よ人^{にん}と俱^{とも}に静^{しづ}々^{しづ}と、ブラジルの山^{やま}を西^{にし}へ西^{にし}へと降^{くだ}り行^ゆく。遙^{はる}か前^{ぜん}方^{ぼう}に展^{てん}開^{かい}されたる原^{げん}野^やあり、彼^あ方^ち此^ち方に黄^た昏^その暗^{やみ}を縫^ぬうて燈^{あか}火^りが瞬^{また}きゐる。前^{ぜん}方^{ぼう}遙^{はる}かに見^み渡^{わた}せば松^{たい}明^{まつ}の光^{ひかり}、皎^{かう}々^{かう}と輝^{かが}き大^{おほ}勢^{ぜい}の喚^{わめ}き聲^{こゑ}聞^{きこ}えけり。一^{いっ}行^{かう}は、その聲^{こゑ}の方^{ほう}に向^{むか}つて急^{いそ}ぎけり。

見^みれば蚊^か々^か虎^{とら}を眞^ま中^{なか}に、數^{すう}百^{ひやく}人^{にん}の群^{ぐん}衆^{しゆう}は遠^{とほ}巻^まに取り^と巻^まきて何^{なに}事^{ごと}か呶^ど鳴^なりつけ居^をる。蚊^か々^か虎^{とら}は中^{ちゆう}央^{あう}の高^{かう}座^ざに上^あり、

☐ 朝^あ日^{さひ}は照^{てる}とも曇^{くも}るとも 月^{つき}は盈^みつとも虧^かくるとも
た^たとへ大^{だい}地^ちは沈^{しづ}むとも 誠^{まこと}の力^{ちから}は世^よを救^{すく}ふ
神^{かみ}が表^{おもて}に現^{あら}はれて 善^{ぜん}と惡^{あく}とを立^たて別^わける

ヤイ、巴^は留^るの國^{くに}の奴^{やつ}共^{ども}、善^{ぜん}と惡^{あく}との立^た別^{わけ}の戰^{せん}争^{そう}は、今^{いま}におつ始^{はじ}まるぞ。黄^よ泉^{もつ}比^ひ良^ら

坂の戦ひが目前に差し迫つて居るのだ。何をキヨロキヨロして居るのだい。お前達は朝から晩まで「飲めよ騒げよ一寸先は暗夜、暗の後は月が出る」などと、眞黒けの一寸先の判らぬウラル彦の宣傳歌に呆けて、酒ばかり喰つて腸まで腐らして居る連中だらう。勿體なくも黄金山から御出張遊ばした天下の宣傳使、常照彦とは我輩の事だ。確かり聞け、諾かな諾く様にして改心さして遣るぞ。おい。盲目共、聾共、どうだ改心するか、するならすると男らしく【キツパリ】此處で神様に申し上げる」

群衆の中から、

甲「おいおい何だ彼奴は、偉さうに吐かしよつて、よつぽど酒が飲み度いと見えるぞ。貴様らウラル彦の宣傳歌を聞いて酒ばかり飲んで俺には少しも飲まして呉れぬと呶鳴つて居るではないか」

乙「貴様、聞き違ひだ。彼奴はなあ、三五教の宣傳使で俺らに酒を飲むな、酒を飲むと腸が腐つて死んで終うと云うて呶鳴つて居るのだ。彼奴の言草はチツとは氣に喰はぬが然し吾々を助けてやらうと思つて、大勢の中に單身で飛び込んで、

生命を的に彼様な強い事を云うてるのだ。何ほど度胸があつても、吾身を捨てて

懸らな、アンナ大膽なことは云はれるものぢやないよ

丙「何、彼りや狂人だよ。當り前の精神でソナ馬鹿な事が云へるか。これほど

皆が一に酒、二に女、三に博打と云うて居るその一番の樂みを放かせと云ふのだ

もの、どうせ吾々のお氣に入らぬことを喋べるのだから、生命を的にかけて、

ああやつて歩いてゐるのだ。チツとは聞いてやらぬと冥加が悪いて

甲「何だか知らぬが、この間ウラル彦の宣傳使が來た時には、澤山の瓢箪を腰に

つけて自分一人酒をグツと飲んで、酒飲め飲めと勧めて居つたが、何程飲めと

云つたとて、俺らは酒をもつて居ないのに飲む事も出来ないし、宣傳使奴が甘さ

うに飲んで管を巻きよるのを、唇を嘗めて青い顔して、羨り相に聞いて居るのも

餘り氣が利かぬぜ。それよりも彼奴のやうに自分が飲まずにおいて、皆に飲むな

飲むなと言ふ方が、まだましだよ。根性なりと僻まいで宜いからなあ

大勢の中より酒に「へべれけ」に酔うた男、片肌をグツと脱ぎ、黒ん坊が黄疸

を病んだ様な膚を現はし乍ら、宣傳使の前に歩々蹣跚として進み寄り、

男「やい、やーい、貴様あ、ささ酒を飲むなと吐すぢやないかエーン、酒は飲んだら悪いかい、馬鹿な奴だなあ、これほど甘いものを喰うなと吐かしよる奴は一體全體、何處の唐變木だい。エーン、酒が無うてこの世が渡られると思つとるか、馬鹿、何でもかでも酒が無ければ、夜も明けぬ、日も暮れぬ世の中だ。そして貴様、「さけ」もさけも、世の中に、酒ほど甘いものがあらうか、四百種病の病より酒を止めるほど辛い事は無いと云ふ事を知つとるか、貴様のやうな唐變木には話が出来ぬワイ。トツトと歸れ。俺の處のお多福奴が、毎日日にち酒を飲むな飲むなと吐かしよつて、「むか」付くの「むか」付かぬのつて、腹が立つて腸が沸えくり返る。それで俺あ、意地になつて嫌でも無い酒を無理に飲んでやるのだ。それに貴様は何處の奴か知らぬが、自家の嬢と同じやうに酒を飲むな、喰ふなとは何の事だい。眞實に人を馬鹿にしやがらあ、コンナ事でも自家の嬢が聞きよつたら、三五教の宣傳使様が酒を飲んだら腸が腐るとおつしやつたと、白い齒をむき出し、團栗眼を釣りよつて「イチヤイチャ」云ふにきまつてらあ。糞面白くもない。俺の處の嬢の出て來ぬ中に早う去なぬか、待ち遠い奴だ。何を【ほざ】

いて居やがるか」

蚊々虎は泥酔者の言葉を耳にもかけず疝聲を張り上げて、

「世の中に酒ほど悪い奴は無い 家を破るも酒の爲め

離縁になるのも酒の爲め 喧譁をするのも酒の爲め

生命を捨てるも酒の爲め 小言の起るも酒の爲め

「ケンケン」云ふのも酒の爲め 酒ほど悪い奴は無い

腸腐らす悪酒に 酔うて管巻く悪者は

扱もさても氣の毒な 酒を飲むなら水を飲め」

と歌ひ出すを、泥酔者はますます怒つて、蚊々虎の横面目蒐けてポカンと殴りつ

ける。蚊々虎は又もや疝聲を張上げて、

「人を殴るも酒の爲め 夫婦喧譁も酒の爲め」

男「まだ吐かしよるか、【しぶとい】奴だ。もつと殴つてやらうか」

蚊々虎は目を塞ぎ、泥酔者に向つて【ウーン】と一聲唳鳴りつけたるに、泥酔者はヒヨロヒヨロと「よろめき」ながら、傍の石原に顛倒し額を打ちて、瀧の如く血を流しゐる。大勢の中より、

甲「おいおい、泥酔者が轉けよつた。あらあ何だ、血が出て居るぢやないか、救けてやらぬかい」

乙「救けてやれと云うたつて、コンナ者に相手になる者は、この廣い巴留の國に一人もありはせないよ。彼奴は【グデン】虎の【グニヤ】虎の喧嘩虎と云うて大變に酒の悪い奴だ。指一本でも觸へ様ものなら、因縁をつけよつて【ヘタバリ】込んで、十日でも二十日も愚圖々々云うて只の酒を飲む奴だ。アンナ者に相手になつたらそれこそ家も倉も山も田も飲まれて了ふぞ。相手になるな、放つとけ放つとけ。彼奴が死によると皆の厄介除けた。國中の者が餅でも搗いて祝ふかも知れないよ」

乙「彼奴が噂に高い酒喰ひの喧嘩虎か。やあ煩さい煩さい、よう云うて呉れた」

虎「だ、だ、誰だい、俺を〔グデン〕虎の〔グヅ〕虎の喧嘩虎だと、何處に俺がグヅを巻いたか、喧嘩をしたか。さあ承知せぬ、俺を誰様と心得て居る。俺は廣い巴留の國でも二人とない虎さまだ。虎さまが酒を飲むのが何が不思議だい。酒飲みは皆酔うと首を振りよつて、誰も彼も張子の虎になるのだ。虎が酒飲んだのが、な、な、何が悪い。さあ承知せぬ、貴様の家は知つとるから之から行つても家も、倉も、山も、田も、御注文通り飲んで遣らうかい。二人の奴、酒の爛をして置きよらぬかい」

と團栗目をむいて睨みつける。

甲「乙「モシモシ、虎さまとやら、お氣に障りまして誠に済みませぬ。私は決して貴方の事を申したのではありませんせぬ。他の國にソナ人があるげなと云うたのです。取違して貰つては困ります」

「いかぬいかぬ、誤魔化すか。何でも宜い、飲んだら良いのだ、コラ、八頭八尾の大蛇の子とは俺の事だぞ。何も彼も飲むのが商賣だ」

二人は顔を顰め當惑して居る。蚊々虎はこの場に現れて、

「おい虎公、酒喰ひ、何を愚圖々々云ふか、俺の腕を見い、誰だと思つてる、三五教の宣傳使だ。貴様が喧嘩虎なら此方さんは蚊々虎ぢや、虎と虎との、一つ勝負を始めようかい」

「な、何だ、喧嘩か、喧嘩は酒の次に好きだ。こいつ、酒の肴に喧嘩でもやらうかい、面白からう」

と虎は立上つて、蚊々虎目蒐けて飛び掛る。蚊々虎は泰然自若として彼が打擲するままに身を任せ居る。斯る處へ暗を破つて、

「神が表に現れて

善と悪とを立別る」

と聲爽かな宣傳歌は聞え來たりける。

(大正一一・二・八 舊一・一二 北村隆光録)

第二章 瀧の村〔三七一〕

蚊々虎は喧譁虎に、蝶螺の如き拳を以て、頭といはず顔と云はず、身體一面、嫌といふ程打擲せられ、平氣の平左で宣傳歌を謠つて居る。群衆の中より又もや一人の泥酔者現はれきたり、

「おい虎公、そんな手緩い事で【あく】かい。俺が手傳うてやらう」

と云ひながら、脚もひよるひよると進み來り、棒千切を以て、

「こうやるのだ」

と云ひつつ、ポンと喰はしたり。酒に酔ひ潰れて眼も碌に見えない泥酔者は、蚊々虎と間違へて、喧譁虎の頭を嫌といふ程打ちのめす。喧譁虎は、

「コラ、何をしよるのだ、喧譁芳。貴様は蚊々虎の鼻屑をしよつて、何だ。こんな酒を飲むなと云ふやうな馬鹿な奴に、味方をするよと云ふことがあるかい。喧譁なら負けはせぬぞ」

と云ふより早く鐵拳を振り上げて、芳公の頭を打擲る。芳公は矢庭に棒千切を以

て、虎の頭を打つ。虎公はますます怒つて、芳公の髪を掴んで引摺り廻す。芳公は悲鳴を擧げて泣き叫ぶ。群衆の中より口々に、

「オイオイ、誰か這入らぬか這入らぬか」

「這入れと言つたつて彼様酒癖の悪い奴の中に、誰が仲裁に這入る奴があるものか、放つとけ放つとけ」

二人は組んづ組まれつ、血塗になつて、死物狂に闘ひ出したるを、蚊々虎は二人の中に分け入り、

「マアマア待つた待つた。喧嘩は止めた止めた。オイ虎公、芳公、貴様らが喧嘩してるのではない。酒が喧嘩をしてるのだ。それだから俺が酒を止めると云ふのだ。どうだ止めるか」

「ヤア何だい。貴様だと思つて喧嘩して居つたのに、俺の友達の虎公だつたのかい、此奴あ、的が外れた。虎公勘忍せ。是からこの宣傳使に掛るのだ」

芳公と虎公は兩方より、蚊々虎に向つて、頭にポカポカと鐵拳を加へる。蚊々虎は泰然自若として打たれて居る。群衆は口々に、

「何と豪いものだな。三五教の宣傳使は本當に忍耐力が強い。吾々も彼の宣傳使に見倣つて、何事も辛抱するのだ。さうすれば喧嘩も何もいりはしない。立派な教だ。ウラル教の宣傳使の様に口ばつかりと違ふ。本當に立派な行ひだ。我々も三五教が俄に好きになつたよ」

この時又もや暗中より、

「朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも 誠の力は世を救ふ」

と云ふ宣傳歌が聞えて來た。群衆は耳を澄まして、聲する方に向き直る。

松明の火はドンドン燃え立つて、周圍は晝の如く明かである。そこへ宣傳歌を歌ひながら淤藤山津見は、荒熊の高彦を従へて、悠々と出で來たる。

「ヤア蚊々虎か。お前その頭はどうした。ひどく血が流れて居るではないか」

「血ぐらゐ流れたつて、血つとも應へぬ。誠の力は世を救ふ。血を以て世界を洗

ふのです。血つとも心配はいりませぬ。力とするは神ばかりです』
とニコニコ笑つて居る。

荒熊は大音聲を張り上げて、

「我こそはブラジル山の關所を守る荒熊である。今迄の悪を改め、善に立ち歸り、三五教の宣傳使に従つて、此處まで來たのだ。今此處に居る蚊々虎は、宣傳使のお供だ。供でさへも、これほどの忍耐力を持つて居る。人間は忍耐力がなくては、何事も成就せないぞ。七轉八起は世の習ひとはいふものの、轉ぶは易い、亡ぶのは容易だ。されど起き上るのは却々六ヶ敷い、是には堪へ忍が肝腎だ。皆の人たちよ、三五教の教を聞いて心のドン底から靈魂の洗ひ替をなさるがよからう。この世はウラル教の宣傳歌ぢやないが、一寸先は闇の世だ。弱い人間の力で、この世が渡れさうな事はない。俺も今までの我慢や悪を止めて、三五教に入信したのだ。皆の人々よ。俺が鏡だ。皆揃うて改心して下さい」
と嗚り立てる。群衆は各小聲になつて荒熊の話聞き、
「ア、人間も變れば變るものだ。彼奴の口から、どうして、あんな言葉が出る

のだらう。きつと好い教に違ひない』
と口々に譽め稱へて居る。

淤滕山津見は中央の高座に登り、諄々として三五教の教理を説き初めたり。是よりこの群衆の七八分は一度に三五教の信者となり、澤山の駱駝を宣傳使に贈つて、巴留の都行きを助けたり。この村は瀧の村と云ふなり。

(大正一一・二・八 舊一・一二 土井靖都録)

第二章 五月姫〔三七二〕

この日は巴留の國の國魂を祭る可く、數多の群衆は廣き芝生に出で、神籬を立て種々の物を獻じ、直會の酒に酔ひ潰れ、夜に入つて松明を點して、今や直會も濟み退散せむとせる折柄に、蚊々虎は一目散に走り來つて宣傳歌を歌ひ始め居たり。蚊々虎は喧譁虎や喧譁芳に打擲され、勘忍袋を押しへて我慢してゐた矢先、淤

藤山津見、高彦の二人現はれたのでホツト一息し、又もや宣傳歌を歌ひ、代つて高彦の改心演説があつて、次に淤藤山津見が、聲も涼しく宣傳歌を調子よく歌ひたり。

群衆の中より天女の如き美人が現はれ、宣傳使の前に頭を下げ、

「宣傳使様、誠に有難う御座いました。妾はこの地方の酋長閻山津見の娘、五月姫と申すもの、なにとぞ妾を大慈大悲の大御心を以て御供に御使ひ下さいますれば有難う存じます」

と恥し氣に頼み入る。群衆は酋長の娘五月姫がこの場に現はれ、宣傳使に叮嚀に挨拶せる體を見て大いに驚き、口々に、

甲「なんと宣傳使と云ふものは偉いものだな。巴留の國の東半分を御構ひ遊ばす閻山津見の御娘の五月姫様が、あの通り乞食のやうな宣傳使に頭を下げ、何卒御供に伴れて行つて下さい」と仰有るのだもの、何と俺も一つ宣傳使になつて、アンナ別嬪に頭を下げさしたり「妾を何處までも伴れて行つて下さい」ナンテ、花の唇をパツト開いて頼ましたいものだ」

乙「この助平野郎」

と矢庭に甲の横面をピシヤリと擲りつける。

甲「妬くない、妬いたつて馨しいことはありやしないぞ。貴様のやうな蟆鞋面に誰が宣傳使になつたとして随って行きたいナンテ云ふものがあるかい。突いて行きませぬ竹槍で、缺杭の先に糞でも附て突いて行きます位のものだよ、アハ、ハ、ハ、」

蚊々虎は五月姫に向ひ、

「エヘン、世の中に何が尊いと云つた所で、天下の萬民を救うて肝腎の靈魂を水晶に研き上げる聖い役をする位、尊いものはありませぬ。さあさ、随いて御座れ、蚊々虎が許す。モシモシ御主人、でない、醜、ドツコイ淤滕山津見の宣傳使様、拙者の腕前はこの通り。お浦山吹の花が咲き盛りですよ」

五月姫「イエイエ、妾は貴方のやうな御方に連れて行つて貰ひたくはありませぬ。何ほど尊い宣傳使様でも、ソナナ黒い御顔では見つともなくて外が歩けませぬワ、ホ、ハ、ハ、」

「顔の色は黒くつても、心の色は赤いぞ。赤き心は神心だ。神の心になれなれ人々」

よ、人は神の子、お前は人の子、神の代りを致す宣傳使の蚊々虎に随いて來れば大丈夫だよ。結構な花が咲きますよ」

「貴方の鼻は誠に立派な牡丹のやうな「はな」でございます。奥様が嘸御悦びでせう。縁は妙なもので合縁奇縁と云ひまして、妾は如何したもののか、貴方のお顔は蟲が好きませぬ。何卒「そちら」の方の御供をさして頂きたう御座います」

高彦は右の食指にて鼻を押へて、顔をぬつと突き出し、俺かと云はぬばかりに頤を「しやくつ」て見せる。

「オイ、關守の、谷轉びの、死損ひの、荒熊、自惚れない。この世界一の男前、蚊々虎でも肱鐵を御喰し遊ばす女神さまだ。貴様の「しやくつ」面に誰が随いて來るものがあるものかい」

高彦「モシモシ五月姫様、夫れは一體誰の事ですか。恥し相に俯向いてばかり居らずに明瞭と言つて下さい。高彦の私でせう」

五月姫は首を左右に振り、

「いーえ、違ひます、違ひます」

□ ソンナら誰だい□

□ もう一人の御方□

□ 莫迦にしよる。オイ、醜、オド、幽霊、宮毀し、龍宮の門番、世の中に物好き

な奴があればあるものだ。コンナ澁紙面がよいといの。オイ醜の宣傳使さま奢れ

奢れ。本當に大勢の中で恥を搔かして、蚊々虎はもうお前達と一緒に宣傳は

止めだ。コンナ美人を俺が折角宣傳して置いたのに、後の方からチヨツクリ出

来て、仕様も無い聲で歌を歌ふものだから、さつぱり御株を奪られて了つた。オ

イ高彦、お前と二人この場を「とつと」つと立ち去らうぢやないか□

□ 蚊々虎、さうは行かぬよ。この宣傳使の御供を吾々は何處までもするのだから

□ ヤア分つた。宣傳使の後にこの別嬪が随いて行くものだから、貴様は體のよい

ことを云ひよつて五月姫の御供をするつもりだらう。そして間には臭い屁の一つ

も頂かして貰はうと思ひよつて、本當に嫌らしい奴だナ。貴様は女にかけたら目

を細くしよつて、その態たら無い一體何だい□

□ 貴様の面は何だい。オイ涎を拭かぬか。見ともないぞ□

淤滕山津見は、默然として兩手を組み吐息を漏らしてをる。五月姫は思ひ切つたやうに、

「もうし三人の宣傳使様、妾の住處は實に小さき荒屋で御座りまするが、貴方等が御泊り下さいまするには、事缺ぎませぬ。妾が父の闇山津見も、三五教の宣傳を非常に有難がつて居ります。何卒妾に隨いて御越し下さいませ」と先に立ちて歩み出す。

淤滕山津見は始めて口を開き、

「何は免もあれ、闇山津見に御目にかかつて、三五教の教理を聽いて貰はう。然らば今晚は御世話になりませう」

「あゝ早速の御承諾、妾が兩親も嘸や悦ぶことで御座りませう。コレコレ供の者、駕籠を此處へ持つてお出で」

「アイ」

と答へて暗黒より一挺の駕籠を明りの前に擔ぎ出す。

「なにとぞ宣傳使様、これに御召し下さいませ」

「吾々は天下を宣傳するもの、苦勞艱難は吾々の天職、勿體ない、駕籠に乗るとは到底出来ませぬ。駕籠に乗らねばならなければ平に御断りを申します」

「やあ、乗り手が無ければ、蚊々虎でも幸抱いたしますよ」

五月姫は、

「貴方の駕籠ぢやありませんか」

蚊々虎は舌を一寸出して、

「あなたの駕籠ぢやありませんかと仰せられるワイ」

と肱鐵砲の眞似をしながら、淤滕山津見の後から蚊々虎は不承無精に随って行く。

駕籠は空のまま何處とも無しに影を隠しける。五月姫は先に立ち三人の宣傳使

を伴ひ、闇山津見の館に歸り行く。

(大正一一・二・八 舊一・一二 外山豊二録)

五月姫の従者は松明を點し乍ら、先に立つて道案内をなす、三人の宣傳使は後に隨いて行く。蚊々虎、高彦の二人は途々話しを始める。

（小さい聲で）「おい、縁は異なるもの乙なものじゃないか。吾輩のやうな目許の涼しい鼻筋の通つた、口許の締つた男らしい、そしてお負に立派な毛の生えた男を嫌つて、あの禿茶瓶の醜國別が好きだとは、何處で勘定が合ふのだらう。彼奴が頭巾を着てよるから、夜の事なり間違へよつたのだぜ。頭巾を脱いだら五月姫は吃驚しよつて「矢張り人違ひで御座りました。こちらのお方」ナンテ言ひよつて、俺の方へ秋波を送るに決つてるわ。アンナ男を可愛がつたところで、何處が尻やら頭やら判つたものぢやない。物好もあればあるものだね」

高彦「俺が女だつたら……」

「さうだつたら、俺に惚れるだらう」

「自惚れない。貴様の腰は【く】の字に曲つて居るなり、皺噺聲の疝聲を出して、石原を薬罐でも引摺る様な宣傳歌を歌はれたら、愛想が盡きて了ふわ。マア何かい、宣傳使の禿頭の化が露はれて、五月姫が尻を振つたら、第二の候補者はマア

高さまかい」

「高が知れたる高彦が、何だい。山道の關守奴が、餘り自惚れな」

「へつぴり」腰の藥罐聲の貴様に、五月姫も有つたものかい」

「何、馬鹿にしよるない」

と蚊々虎は、高彦の横面を拳骨を固めてポカンとやらうとするを、高彦は、

「おい、三五教だよ、堪へ忍びだ」

「ヤアー、宣傳使も辛いものだな。俺が今迄の蚊々虎だつたら、貴様の頭を思ふ

存分やつてやるのだけれど、あゝ神様も胴欲だワイ」

五月姫は二人の争ひを聞いて、思はず知らず、

「ホ、ホ、」

と笑ひ出したり。

「おい高公、ホ、ホケキョーぢやと。まるで鶯の様な聲だね」

「そらア貴様の藥罐聲とは、テンデ物が違ふよ。金と鉛か、お月さまと鼈か、雲

と泥か、まあソナものだなあ」

何つ！ キリキリキリキリ

「こら、齒軋りを嚙んで握り拳を固めよつて、そら三五教だよ。見直し、聞直しだ」

「直に人に轡を嵌めよつて、コンナ奴に生半熟教理を教へると都合が悪いわ」

「皆さま暗夜に御苦勞に預りました。これが妾の兩親の住まつて居ります破屋でござります。さあさあお上り下さいませ」

淤滕山津見は、

「然らば御免」

と、五月姫に導かれ、先に立つて進んで行く。蚊々虎はその口眞似をして、

「暗夜の處、ご苦勞で御座いました。これが妾の兩親の住まつて居ります荒屋でござります。さあさあお上り下さいませ。……然らば御免」

「貴様獨言いうて、一人返事をしてるのか。馬鹿だなあ」

「おい高彦、馬鹿と言ふ事があるか、宣り直せ」

「馬鹿々々しい目に逢つたワイ。おい蚊々虎、愚圖々々しとると門から突出され

やしまひかな」

何、突き出しよつたら突き出たら可いのだ。「つき」出て、月出る彦の神さまに成るのだ。あゝ、月が上つた、あれ見い、三五の明月だ」

四邊は月光に照されて、晝の如くに明るくなりぬ。

二人は今や東天を「かす」めて差昇る満月の光を眺めて、色々と無駄話に耽る内、中門はガラガラ ピシヤツと閉められ、五月姫、淤滕山津見は、深く門内に姿を隠したりける。

おい高公、ガラガラ ピシヤンぢや」

おい蚊々虎、ガラガラ ピシヤンて何だい」

何だつてガラガラ ピシヤンぢや無いか」

ガラガラ ピシヤンが何だい。閉る時はピシヤンと云ふし開ける時はガラガラ

と云ふのだ。何處の門口だつて、ガラガラ ピシヤンはするよ。何が珍しいのだ」

貴様も血の環りの悪い奴だな。それでは宣傳使も落第だよ。天の岩戸はピツシ

ヤリと閉つて、俺ら二人は「放つとけぼり」だ。人を雲天井に寝さしよつて、自

分ぶんらは綾あや錦にしきに包つつまれて淤おど滕やま山づ津み見みの奴やつ、今こん晩ばんは神か樂ぐらをあおげて面おも白しろさうに岩いは戸と開びらきをやりよりるのだよ。馬ば鹿か々ば々かしいぢやないか。一ひとつ今こん晩ばん門もんの戸とでも叩たたいて噓はやしてやらうかい、「むかつく」からなあ」

「三あ五な教ひけうだ。堪こらへ忍しのびだ。怒おこつちやいかぬよ」

「馬ば鹿かにしやがるなア、辛しん抱ぱうせうかい」

この時とき又またもやガラガラと音おとがして、三さん人にんの若わかい女をんな、徐しづ々しづと二ふ人たりの前まへに現あらはれ、

「これはこれはお二ふた方かた様さま、夜よるの事ことと言いひ、取とり込こんで居をりますで、ついで忘れましわすた。お姫ひめ様さまがお二ふた人たりの方かたは何ど處こへゐらつしやつたと、大たい變へんにお尋たづねで御ご座ざいます。

どうぞ早はやく此こ方ちへお這はい入いり下くださいませ」

「おい、これだから堪こらへ忍しのびが第だい一いちだと言いふのだナ。俯うつ伏ぶいた拍へう子しに頭づ巾きんを迂すり

落おとして光ひかつた頭あたまを五さ月つき姫ひめに見みられて、落らく第だいしよつたのだぜ。斯かう成なると矢や張っぱり蚊か々がと虎こさまだよ」

「糠ぬか喜よろこびをまするるない、お前まへのやうな腰こし付つきでは誰たれだつて惚ほやしないよ。それは目めの「まん」丸まるい鼻はなの大おほき口くちの大おほき締しまりのある、一ち寸よつと見みても強つよさうな高たか彦ひこさま

に、白羽の矢が立つのだよ。まあまあ明日の朝に勝敗が分るわ」
「もしもしお客様お話は後でゆつくりして下さいませ。お姫様が大變お待ちで御座います」

蚊々虎「吐したりな吐したりな、お姫様がお待遠だとい。エヘン」
と蚊々虎は肩怒らして先に立ち門内に姿を隠したりけり。

（大正一一・二・八 舊一・一二 東尾吉雄録）

第二四章 盲目審神（三七四）

闇山津見の奥殿の廣き一間は、夕食の用意調へられ、一應主客の慇懃なる挨拶も終りて各自晚餐の席に着きぬ。

夕食も茲に相濟み、淤藤山津見は二人と共に神床に向つて天津祝詞を奏上する。闇山津見は一行に向ひ慇懃にその勞を謝し、且つ、

「折り入つて宣傳使にお訊ね申し度き事があります。何卒御教示を願ひます」と云ふ。

「何事か知りませぬが、神様に伺つて見ませう」

「宇宙萬有一切の事を説き明す宣傳使、大は宇宙より小は蟲の腹の中まで」

「コラコラ蚊々虎、お黙りなさい」

「私は高天原に坐ましたる伊奘册命が、黄泉の國へお出ましになつたと云ふ事を

承はつて居ました。然るに此ごろ常世のロツキー山に伊奘册命が現はれ給うたと

云ふ事を巴留國の棟梁鷹取別より承はりました。二人の伊奘册命がおりなさる

とすれば、「どちら」が眞實で御座いませうか。吾々はその去就に迷ひ、どうと

かしてその眞偽を究め度きたものと、日夜祈願をして居りました。然るに昨夜の

夢に「明日は三五教の宣傳使がこの國へ來るから、五月姫を迎ひに遣はせ」との

お告げでありました。それ故今日は吾娘を町端れの國魂の森に群衆に紛れて入り

込ませ、宣傳使のお出を待たせて居りましたところ、夢のお告げの通り、三五教

の宣傳使に、お目に懸つたのも、全く御神示の動かぬところと深く信じます。こ

の事ことについて何卒御教示を願ねがひます」

「サア確かに吾われ々は龍宮城りゅうぐうじやうより伊奘册命様いざなみのみことさまのお供ともを致いたして参まゐりましたが、途中とちうで別わかれました。伊奘册命様いざなみのみことさまには日ひの出神でのかみと云いふ立派りつぱな生神いきがみと、面那藝司つらなぎのかみがお伴とも致いたして居をる筈はずであります。ロツキー山ざんに、これから行ゆくと仰あふせになりましたから、それが眞實まことの伊奘册命様いざなみのみことさまでありませう」

蚊々虎かがとらの身體しんたいは俄にはかに振動しんどうを始めはじ、遂つひには口くちを切きり、
「オ、、淤おど山やま津見づみ、汝なんぢの申まをす事ことは違ちがふぞ違ちがふぞ。伊奘册命様いざなみのみことさまは、テ、、矢張やつぱり云いはれぬ、云いはれぬ。ロツキー山ざんに現あらはれたのは、常世神王とこよしんわうの妻つま大國姫おほくにひめの化ばけ神がみだぞよ」

「汝なんぢは何いづれの曲津神まがつかみぞ、現げんに吾われ々は伊奘册大神いざなみのおほかみのお伴ともをして海上かいじやうに別わかれたのだ。その時ときのお言葉ことばに、これよりロツキー山ざんに立籠たてこもると仰あふせになつた。其方そのほうは吾われを偽いつはる邪神じやしんであらう」

蚊々虎かがとらは手てを振ふり揚あげながら首くびを左さ右みぎに振ふり、
「違ちがふ違ちがふ、サツパリ違ちがふ。ロツキー山ざんの伊奘册命いざなみのみことは、大國姫おほくにひめだ。もつと確しつかり

審神を致せ。此方を何れの神と思つて居るか。盲人の審神者、モーチつと靈眼を開いて、我が正體を見届けよ」

「如何に巧に述べ立つるとも、この審神者の眼を暗ます事は出来まい。外の事ならいざ知らず、伊奘册大神の御事に就いては此方確に見届けてある。偽りを云ふな、退れ退れ」

「斷じて退らぬ。汝の靈眼の開くるまで」

「淤滕山津見は一生懸命に兩手を組み、靈縛を加へむとす。蚊々虎は大口開けて、ウワハ、ハ、ハ、小癩な、やり居るワイ。ウワハ、ハ、ハ、餘り可笑うて腹の皮が捻れるワイ。ウワハ、ハ、ハ、」

「闇山津見様、この神懸りは當にはなりませぬ。大變な大曲津が憑ついて居ます。あの通り笑ひ轉けて、吾々を嘲弄いたす強太い惡神。コンナ奴の云ふ事は信じなくて宜しい。吾々は生た證據人、伊奘册大神は、この常世の國のロツキー山に確に居られます」

蚊々虎は又もや大口開けて、

「アハ、ハ、あかぬ、あかぬ、あかぬ、於滕山津見の盲の審神者イ、如何に靈縛を加へても、ウ、ハ、動かぬ動かぬ。煩いか倦厭したか。エエ、偉さうに審神者面を提げて何の態、俺の正體が分らぬか。可笑しいぞ可笑しいぞ、ウワハ、ハ、ハ、カ、ハ、可笑さうなものだ。キ、ハ、氣張つて氣張つて汗泥になつて、兩手を組んで、ウンウンと靈縛は何の態だ。ク、ハ、苦勞が足らぬぞ。コンナ審神者が苦しいやうな事で、どうして宣傳使がつとまるか。ケ、ハ、怪しからぬ奴だ、見當は取れまい、權幕ばかりが強つても神には叶ふまいがな。コ、ハ、これでもまだ我を張るか、困りはせぬか。サ、ハ、審神者のなんと、好くもほざいたものだ、サツパリ靈眼の利かぬ【探り審神者だ】、シ、ハ、知らぬ事は知らぬと云へ、強太い奴だ。神の申す事を敵對うて、この神は邪神だの、當にならぬのとは、それや何の囁言だ。ス、ハ、隅から隅まで氣のつく審神者でないと、靈界の事は澄み切るやうには分らぬぞ。セ、ハ、宣傳使面を提げて、盲審神者が俺を審神するなぞとは片腹痛い。ソ、ハ、そんな事で世界の人間が導かれるか」

「タ、ハ、頼みます、もう分りました。忪へて下さい、併し貴神はお考へ違ひでは

ありませぬか。現に私は伊奘册大神様のお伴して御口づからロッキー山に行くところ、云ふ事を承はつたものですから、この事計りはどうしても眞實に出来ませぬ。何ほど云うても譯の分らぬ宣傳使、神はこれから夕々、立ち去るぞよ。言葉終ると共に蚊々虎の肉體は、座敷に仰向様に打倒れたり。淤滕山津見は再び鎮魂を施し、神言を奏上し、而して淤滕山津見は、ロッキー山に伊奘册神の隠れ居ます事を確に信じ闇山津見に固く、相違ない事を告げけり。闇山津見は厚く感謝してその夜は三五教の話に夜を明したり。

附言

伊奘册命の火の神を生みまして、黄泉國に至りましたるその御神慮は、黄泉國より葦原の瑞穂の國に向つて、荒び疎び來る曲津神達を黄泉國に封じて、地上に現はれ來らざるやう牽制的の御神策に出でさせられたるなり。それより黄泉神は海の龍宮に居所を變じ、再び葦原の瑞穂の國を攪亂せむとする形勢見えしより、又もや海の龍宮に伊奘册大神は到らせたまひ、茲に牽制的經綸を行はせ給ひつつありける。乙米姫命を身代りとなして黄泉神を龍宮に封じ置き、自らは日の出神に

迎へられて、ロッキー山に立籠るべく言擧げしたまひ、竊に日の出神、面那藝司とともに伊奘諾の大神の在ます天教山に歸りたまひぬ。されど世の神々も人々も、この水も漏らさぬ御經綸を夢にも知るものは無かりける。ロッキー山に現はれたる伊奘册命はその實常世神王の妻大國姫に金狐の惡靈憑依して、神名を騙り、常世神王大國彦には八岐の大蛇の惡靈憑依し、表面は、日の出神と偽稱しつつ、種々の作戦計畫を進め、遂に黄泉比良坂の戦ひを起したるなり。故に黄泉比良坂に於て伊奘册命の向ひ立たして事戸を渡したまうたる故事は、眞の月界の守り神なる伊奘册大神にあらざ大國姫の化身なりしなり。

(大正一一・二・八 舊一・一二 加藤明子録)

第二十五章 火の車〔三七五〕

闇山津見の館における於藤山津見一行の三五教の説示は、益々微に入り細に渉

り、遂に鷄鳴に達したり。

闇山津見は一同に向ひ、

「思はず尊き御話に實が入りまして、最早五更となりました。皆さま御疲勞でせう、暫らく御休み下さいませ」

と別室に寢所を作り、奥の一室に姿を隠したり。

「大變に草臥ました。何うです、一つ休まして貰ひませうか。實際ブラジル峠を

越えて来て、蚊々虎の脚は棒のやうになつて了ひましたよ」

「それだから廣言は後にせよと云ふのだ。千里萬里も應へぬとか、たとへ數萬の敵が押寄せ来るとも張り倒すとか偉い元氣だつたが、随分弱音を吹くなあ。お前の刹那心も調法なものだよ」

「ナア高彦、些とは休養といふことをせなくては、身體のためにならぬ。眠る時には眠る。遊ぶ時には遊ぶ。活動する時には、獅子奮迅の勢で活動すれば好いちやないか」

「大變雲行きが變つて来ましたな。何うやら明日は雨が降りさうだ。雨が降つた

ら、また悠悠々休まして貰はうかい。昨日は宣傳使様に随いて大活動だった。大沙漠を横断するのも勇壯なものだ。時に昨夜の神懸りは何うだった。随分詮らぬものだなあ、蚊々虎さま」

「ナ―ニ、神様は俄審神者に分つてたまらうかい。これから此方が神懸り兼審神者だ。もしもし宣傳使様、今日から私が審神者の役だ。そこへ一遍御坐りなさい。眠るのが厭なら審神者でもして、守護神を現はして上げようかい。ブラジル峠でこの神主に悪霊が憑いたからと云つて、何時までも悪霊ばかりが憑いてたまるものか。淤滕山津見の審神者は先入主をよう除らぬから、薩張り平凡審神をするのだ。矢張り過去の事を思つて居るから、本當の事が判らぬのだよ」

「ソナナラ改めて審神をしてやらうか」

「人民の癖に神を審神すると云ふことがあるか」

「さうだらう、化けを現はされては面目ないからな」

「五月姫の前で邪神だの、【あて】にならぬのと面目玉を潰されては、審神して貰ふ氣にもならぬのう」

この時門外に宣傳歌が聞えきたる。三人は耳を澄まして聴きゐる。宣傳歌は追々と近寄り來たる。二人の女に導かれて、この場に現はれたる宣傳使あり。彼は被面布を捲り上げ、一行に挨拶する。

「私は三五教の宣傳使です。承はれば巴留の國に同じ三五教の宣傳使が見えたといふことで、取るものも取敢へず参りました。私は智利の國に宣傳を行つてゐるものです」

蚊々虎は熟々宣傳使の顔を見て、

「ヤア、お前はコゝ、駒山彦じやないか。俺等と一緒に高白山を攻めた時、爆弾に命中つて脆くも死んだ筈のお前が、何うして此處へやつて來たのだ。ハ、ア夜前俺らが神懸りをやつたので、貴様救けて貰はうと思つて幽冥界から來たのだな。道理で顔の色が蒼黒いワイ。コラ駒山彦の幽霊、俺が今審神をしてやらう」

「オーお前は蚊々虎か。ようまあ無事で居つたね。お前の事が忘れられぬので幽冥界から迎へに來たのだよ。さあさ一緒に一緒に行かう。閻魔様が待つてゐるぞ。貴様はあんまり悪い事ばかりやつたので、閻魔の廳から御迎へに來たのだ。門口には

赤鬼や、青鬼が澤山に来て待つて居る。俺は貴様の顔を知つて居るので検視の役に來たのだ。サーサ早く早く」

「駒山彦、待つて下さい。モシモシ宣傳使様、此奴は曲津でせう。審神して下さいな。困つたものがやつて來ました」

「審神するに及ばぬ。この靈眼で一目見たらチヤンと分つてゐるのだ。成程貴様は悪い奴だ。是から閻魔さまにお目玉でも頂戴して、修行した上で幽冥界の宣傳でも行つたらよからう。現界も幽界も同じことだ。唯生命がなくなる丈の違ひだ、とつとと行つたらよからう。アア悪い事は出來ぬものだ」

「モシモシ、駒山彦の地獄の御使さま、貴方も知つての通り、俺よりもモツト悪い張本人が此所に居ります。此奴はなあ、今は偉さうに淤滕山津見ナント云つてゐるが、元は醜國別と云つて、有らうことが有るまいことか、御三體の大神様の御宮毀ちの張本人だ。私はこの男に頭先の先で使はれた丈だ。閻魔さまも一寸聞えませぬ。罪の大小輕重をよく審判して下さい。コンナ悪い奴を此世に放といて、蚊々虎さまのやうな正直な者を幽世へ連れて行くとは、餘り胴欲ぢや」

高彦「エー蚊々虎さま、刹那心だよ。先の事は何うならうと心配せいでよい。年貢の納め時だ。男らしくとつと行つたがよからう。序でに、淤滕山津見さまも……後に残る宣傳使はエヘン、この高彦さま一人だ。五月姫と是から二人、宣傳に歩くのだよ」

「莫迦にするない。俺は「そいつ」が修羅の妄想だ。モシモシ、駒山彦のお使さま、この高彦といふ奴はな、今まで此の巴留の國に荒熊と云うて悪い事ばかりしてゐた奴だ。貴方も知つてるだらう。昔は俺らと一緒に随分悪い事をした奴だ。「いつそ」のこと三人とも連れて行つて下さいな」

「イヤ、さうは行きませぬ。今度は一人だけ御迎へして歸ります。御車が一臺より来て居りませぬから」

「ヤア、洒落てるね。地獄へ行くのに車が迎へに來たのか。ドンナ立派な車だい。それはそれは立派な火の車ですよ」

「エー火の車、「そいつ」は御免だ。ソナラ籤引をしようかい」

「アハ、ハ、ハ、馬鹿だね。嘘だよ。蚊々虎、幽霊でも何でもありはしないが、貴

様は今まで偉さうに審神者になつてやるの、立派な神懸りになるのと法螺を吹いたが、駒山彦の彼の靈衣が判らぬか。幽界から来たものなら三角になつて居る筈だ。彼の圓滿な五色の光彩を放つてゐる靈衣が判らぬか」

「ほんにほんに、餘り周章てて靈衣に氣がつかかなかつた」

「貴様は本當に靈衣が見えるのか。貴様の靈衣は三角になりかけて居るぞ。三角になる奴は冥土行き近づいた證據だ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

蚊々虎は自分の頭へ手をやり、身體中を探つて靈衣が手に觸らぬかと搜してゐる。駒山彦は一同に向ひ、

「私は不思議な縁にて筑紫の國より、智利の國へ渡る船中に於て、日の出神様に避り返ひ、結構な教を承はり、夫れより惡心を翻し、舊友と共に此の高砂島に渡り智利の國を猿世彦と南北に別れ、宣傳を致して居りました。然るに風の便りに承はれば、三五教の宣傳使が、ブラジル峠を越えられたと云ふこと、巴留の都には鷹取別といふ惡神が居つて、三五教の宣傳使を全滅させようと、いろいろ計畫をして居ると云ふことですから、吾々も一つ御手傳ひがしたいと思つて參つたの

です。何卒御供に御加へ下さらば有難う存じます』

『面白い面白い、蚊々虎が御供を許す』

『私は蚊々虎さまに御願ひしたのぢやありません。淤滕山津見さまに願うたので

すよ』

『俺が許したら同じことだ。ねエ、淤滕山津見さま』

このとき門外に、幾百人とも知れぬ人聲聞え來たりぬ。

(大正一一・二・九 舊一・一三 外山豊二録)

(第一二章) 第二五章 昭和一〇・三・二 於神聖會總本部 王仁校正)

第二六章 讚嘆(三七六)

門内には駱駝の嘶く聲、群衆の話し聲、刻々に高まり來たる。蚊々虎はムツクと身を起し、玄關に立ち現はれ、

「ヤアヤアその物音は敵か味方か、實否は如何にと、唳鳴り立ててゐる。」

高彦は吹き出し、

「オイオイ、周章てるな、なぜ刹那心を發揮せぬか」

「刹那心ぢやと云つたつて、斯う成つて來てはどうかうも有つたものかい。刹那心も切無いワイ、この蚊々さまは」

「アハ、ハ、ハ、弱い奴だな、法螺計り吹きよつて。昨日のやうな勇氣はよう出さぬのか」

「出さいでか、まあ見ておれ。これから蚊々虎は寄せ來る敵に向つて、この鐵拳を縱横無盡に打ち振り打ち振り、打つて打つて打ち倒し、勝鬨擧ぐるは瞬く間さ。細工は流々仕上げを見てから何なと言へ」

と云ふより早く、韋駄天走りに門外に飛び出しける。高彦は後見送り乍ら、
「オーイ、待て待て、アー往つて了ひよつた。周章者だなあ、飛んで火に入る夏の蟲かい、モシモシ淤滕山津見様、如何取り計らひませう」

「まあ急せくに及およばぬ。悠ゆつくりお茶ちやなど飲のんで心こころを落おちつ着ちけたら良よからう」

「察さつするところ、鷹たか取とり別の配てした下の軍勢ぐんせいが、吾われわれ々い同ちゆうを亡ほろぼすべく、押おし寄よせたの

では有ありますまいかナア淤おど滕や山まさま」

「サア淤おど滕や山ま津見づみには何なんとも判わからぬなあ」

この時とき韋駄みだ天走てんぱしりに玄關げんくわんより上あがつて來きた蚊か々が虎とらは、

「オーイ、淤おど滕や山ま津見づみ、一いち同どうの者もの、確しつり致いたせ、敵てきは間ま近ぢかく攻せめ寄よせたりだ。駒山こまやま

彦ひこを始はじめとし、愁なまじいに身みを逃のがれむとして敵てきの捕虜とりことなり、死し恥にぢを見みせむよりは、

潔いさぎよくこの場ばで割腹かつぶく々々かつぶく。サアサア腹はらを切きつたり切きつたり」

「アハ、々々、オイ、狂言きやうげんをするない。あの聲こゑを聞きいたか。ウローウローと言いつ

てるではないか。吾われわれ々い行かうを、この邊へんの人民じんみんが神様かみさまのやうに思おもつて、お祝いはひに來きて

るのだぞ。駱駝らくだの聲こゑと言いひ、喜よろこびの聲こゑと云いひ、あの言靈ことたまにどうして敵意てきいをふくんで

居をるか。貴様きさまもいい周章あわてもの者だ。それだから臍下さいかた丹たん田でん、天あまの岩戸いはとに魂たましひを据すゑて居をら

ぬと、「まさか」の時ときには狼狽うろたへて、キリキリ舞まひを致いたさな成ならぬと仰おつ有しやるのだ

よ。何なんだ、この態さまは、キリキリ舞まひを仕しよつて、恥はぢでも知しれ。五月さつき姫ひめさまが、襖ふすまを

細目に開けて、笑つて居らつしやるぞ」

「ソナナことは遠の昔に百も承知だ千も合點だ。駒山彦の奴、俺を地獄から迎ひに來たなんて脅かしよつたから、俺も一つ返報【がへし】をして見たのだ。貴様は要らぬ事を云ひよつて、俺の妙計の裏を搔くと云ふ事があるかい。實の事を云へば、五月姫様でさへも、その父さまの闇山津見さまでさへも、丁重に待遇して、教を受けられるやうな立派な蚊々虎の宣傳使を、お祝ひ申せ、お禮に行かねば成らぬと、皆の者が言合して、色々の珍しい物を澤山持つて、駱駝に積んでな、蚊々虎に進上したいと云つていよるのだよ。へん、豪勢なものだらう」

「アハ、ハ、ハ、笑はせやがらあ。へー貴様の様な宣傳使に、誰が木の葉一枚呉れる者があつて堪るか。みな淤藤山津見の宣傳使と、高彦さまの改心演説に感心してお祝に來たのだよ。餘り自惚れて貰ふまいかい。貴様は自惚れるのも一番だが、恐がるのも、威張るのも一番だ。それだから馬鹿の一番と云ふのだよ、ウ

フ、ハ、ハ、」

「何なと勝手に吐けい。百千萬の敵にも、ビクとも致さぬ事は無いことは無い蚊々

虎だ。木端武者は控へて居らう」

「オイ、また狂言するののか。五月姫が窺いてるよ」

玄關に二三人の聲として、

「頼みます、頼みます。闇山津見さまに會はして下さい」

玄關番は、

「ハイ」

と答へて、直ちに奥の間に走り入り、この旨を傳へたるに、闇山津見は、五月姫と共に宣傳使一同の前に現はれて、

「昨夜は失禮致しました。今日はどうか御悠りと御休息を願ひます。就ましては巴留の國の人民共が、宣傳使の勞を犒ひたいと申して種々の御土産物を持參致しました。今三人の代表者がこれへ参りますから、何うか話をしてやつて下さいませ」

「重ね重ねの御親切、有難う存じます。何時でもお目に掛りませう」
斯く挨拶を交す折しも、三人の男、代表者としてこの場に現はれ、一同に向ひ

叮嚀に辭儀をしながら、

「宣傳使御一同様に申上げます。この地方は、鷹取別の軍勢が澤山に入り込み、強盗をする、婦女子を嬲り者にする、亂暴狼藉致らざる無く、昨日迄は何事が勃發するかも知れないと云つて、この國人は戦々兢兢々として仕事も手につかず、心配を致しまして、國魂の神のお祭を始めて居ました處が、思はずも宣傳使様の宣傳歌が聞えると共に、鷹取別の軍勢も、惡神の私語も、ピタリと影を隠し、聲を潜めて了ひました。大方この大沙漠を横斷して、西の國へ逃げ歸つたのでせう。吾々人民が塗炭の苦みをお救ひ下さいました其の御高恩の萬分の一に酬ゆる爲めに、吾々は人民を代表して、茲に數十頭の駱駝を献上致したいと思つて参りました。御受納下さらば有難き仕合に存じます」

と、云ふを聽きて、
「ああさうか、それは良く改心が出来た。結構だ。神様は何よりも改心が一等だと、宣はせられる。高砂島の國魂、龍世姫神は實に偉い神さまだ。さうしてそれよりま一つ偉いのは、この蚊々虎の宣傳使だ」

「はい、左様で御座いますか。その偉いお方は何處に居られますか。一度拜顔を願ひたいものです」

「居られますとも、確にこの場に鎮座します。篤と拜んで歸るがよからう」

高彦クスクスと笑ひ出す。

「不謹慎な奴だ。何が可笑しいか。黙れ黙れ」

蚊々虎は代表に向ひ、

「蚊々虎といふ生神の、立派な廣い世界に唯一人より無い宣傳使は、この御方だ」

と右の手を左手にて握り、食指を突き出し乍ら、空中を東から西へと指ざし、そ

の指の先を自分の鼻の上に、テンと乗せて見せる。高彦は、

「オイ、三五教は耐へ忍びだ」

と云ひつつ、横面をピシヤリとやる。

蚊々虎「何をツ、チヨ、チヨコザイナ。蚊々虎を知らぬか」

「オイ、見直し聞き直し、耐へ忍びだよ。それが生神の宣傳使だよ」

五月姫は思はず、

「オホ、、、」

と倒て笑ふ。

「貴方がその結構な宣傳使で御座いましたか。それにしても餘りお輕う御座いますな」

「輕いぞ輕いぞ、お前達の様に罪の重い者では宣傳使は出來ぬからのう」

「蚊々虎さま、偉い勢ですな、駒山彦も感心致しました」

「ウン、それでよい。長く饒舌ると屑が出る。言はぬは言ふに彌勝るだ。オイ、代表者共、生神の宣傳使は、人民の厚き志、確かに受納致したと申し傳へよ」

「ハイ、畏まりました」

「代表甲　「オイ、一寸此奴は可笑しいぜ」

「代表乙　「神さまなんて、アンナものだよ」

「代表丙　「妙な神さまも有つたものだな」

「蚊々虎ニヤリニヤリ、

「其方共は何を私語るか。生神の前だぞ」

「イヤ、三人の御方、私が淤滕山津見で御座ります。何うか皆さまに宜しう御禮を仰有つて下さい。今偉さうに申上げました彼は、蚊々虎と云ふ私共の荷物を持つ従僕で御座いますから、何うかお心に障へられぬやうに。宣傳使はアンナ者かと思はれちや、教の疵になりますから、私は改めて宣り直します」

蚊々虎は面を膨らし、淤滕山津見の宣傳使を睨み詰めて居たりける。

高彦は堪へかねて

「ウワハ、、、、、」

闇山津見も同じく

「フツフツ、、、、、、」

駒山彦もまた

「クワツ　クワツ　クワツ　クワツ」

五月姫も

「オホ、、、、」

代表者は妙な顔して

□ 工へへへへへへ。□。

（大正一一・二・九 舊一・一三 東尾吉雄録）

第二十七章 沙漠〔三七七〕

蒼空さうくう一天いつてんの雲翳うんえいも無なく、天津日あまつひは中天ちうてんに輝かがやき玉たまふ眞晝まひるどき時とき。

茲ここに四人よにんの宣傳使せんでんしは、數十頭すうじつとうの駱駝らくだに數多あまたの食物しよくもつを積つみ、駱駝らくだの背せにヒラリと跨またがつて閻山くらやま津見つみ夫婦ふうふうに名殘なごりを惜をしみ、大沙漠だいさばくを横斷わうだんして、巴留はるの都みやこに進すすまむとす
る時とき、五月さつき姫ひめは名殘なごり惜をしげに門口かどぐちに送おくり出いで、

□ 堅磐かきは常磐ときはに變かはり無なき 世よや久方ひさかたの大空おほぞらの

天あまの河原かはらに棹ささして エデンエデンの河かはに天降あもりまし

惠めぐみも深ふかき顯恩けんおんの 郷さとに鎮しづまる南天王なんてんわう

日の出神と現はれて 四方の國々隈もなく
 神の御教を輝かし 千尋の海の底の宮
 龍の都に出でまして 憂瀨に惱む神人を
 救ひ玉ひし生神の 教の御子の宣傳使
 淤滕山津見司様 その外三人の宣傳使
 名残は惜しき夏の空 五月の暗に掻き曇る
 心悲しき五月姫 血を吐く思ひの杜鵑
 思ひは同じ世を救ふ 神の身魂を稟け繼ぎし
 妾は女の身なれども 神の御言を宣べ傳ふ
 清き司と成らざらめ 常世の闇を晴らさむと
 思ふ心の仇曇り 晴らさせ給へ淤滕山津見
 教の司の宣傳使 汝は都へ妾は後に
 残りて何を樂まむ 明日をも知れぬ人の身の
 空しき月日を送るべき 荒野の露と消ゆるとも

沙漠の塵に埋むとも 世人を思ふ村肝の
心は曇る五月闇 疾く晴らさせよ宣傳使

と聲しとやかに歌ひて、名残を惜む。閻山津見はこの歌を聞いて五月姫の心中を
察し、新に駱駝を曳出し來り、五月姫に與へ、淤藤山津見一行と共に、宣傳使と
して天下を教化することを許したり。五月姫は天へも昇る心地し、茲に男女五人
の宣傳使は轡を竝べて、さしもに廣き巴留の大沙漠を横斷することと成りにけり。
茲に五人の宣傳使は、閻山津見をはじめ數多の國人に「ウロー　ウロー」の聲
に送られ、意氣揚々として、閻山津見の館を後に、宣傳歌を歌ひ乍ら進み行く。
いよいよ大沙漠に差懸りたれば、前方よりは烈しき風吹き荒み砂煙を立て、面を
向くべきやうも無かりけり。
蚊々虎は大音聲を張り上げて、

風よ吹け吹け旋風吹けよ

砂よ飛て飛て天まで飛てよ

雨も降れ降れイクラデモ降れよ たとへ沙漠は海と成り

天は下りて地と成り 地は上りて天と成る

如何なる大難來るとも 神に貰うた蚊々虎の

この言靈に吹き散らし 薙いで拂うて巴留の國

靡き伏せなむ神の徳 蚊々虎さまの神力に

何れの神も諸人も 虎狼や獅子熊も

青菜に鹽のその如く 縮んで萎れてペコペコと

謝り入るは目の當り 風も吹け吹け何ぼなと吹けよ

砂も飛て飛て何ぼなと飛てよ ソンナ事には應へぬ神だ

應へぬ筈だよ誠の神の 教を傳へる宣傳使

淤藤山津見の司様 勇む心も駒山彦や

天狗の鼻の高彦や 天女に擬ふ五月姫

ちつとも恐れぬ金剛力の 蚊々虎さまがござるぞよ

進めや進めいざ進め

と口から出任せに、大法螺を吹きながら駱駝の背に跨り、勢よく風を冒して進んで行く。漸くにして風はピタリと止んだ。夏の太陽は又もや煌々と輝き始めたり。駒山彦「オイオイ蚊々虎の宣傳使、豪勢なものだな。お前のその大法螺には、風の神だつて何だつて萎縮して了ふわ。よくも吹いたものだなー」
蚊々虎「向ふが吹きよるから吹いたのだ。滅多矢鱈に吹いて、俺らを砂煙に巻よつたから、俺も亦一つ風の神に向つて、大法螺を吹いて吹いて、風の神もお前達も一緒に煙に巻いたのだよ」
高彦「ハ、ハ、ハ、相變らず、空威張の上手な男だネー」
「矢釜敷う言ふない、先を見て貰はうかい。先になつて驚くな、何んな働きをなさるか知つて居るかい」

「オホン刹那心だ。先の事を云つたつて判るものか。今の内に精出して法螺でも吹いて置くが宜からう。萬緑叢中紅一點の五月姫の女宣傳使が居ると思つて、俄に元氣づきよつて、聲自慢で法螺歌を歌つたつて、風の神なら往生するならむも、五月姫さまはソナ事では一寸お出でぬぞ」

馬鹿言ふな。オイオイ、際限も無いこの沙漠だ。一體何日程走つたら、巴留の都へ行くか知つて居るか」

ソナ事は知らぬワイ。お前は神懸さまぢやないか、宇宙一切の事が判明なら、その位な事が鏡に懸けた如く知れさうなものでないか」

一行は互に駱駝に跨り、或は宣傳歌を歌ひ、雑談に耽りながら、漸くにして巴留の都に着きにける。

(大正一一・二・九 舊一・一三 森良仁録)

第二十八章 玉詩異(三七八)

一行は巴留の都の入口の、老木茂れる森林に駱駝を繋ぎ休息したりぬ。淤滕山津見は一同と車座になり、作戦計畫を相談したり。

此處は大自在天、今は常世神王の領分、鷹取別が管掌するところだから、よほ

ど注意をせなくてはならぬ。大自在天の一派は、精鋭なる武器もあれば、権力も持つて居り知識もある。加ふるに天の磐船、鳥船など無数に準備して、併呑のみを唯一の主義として居る體主靈從、弱肉強食の政治だ。吾々はこの惡逆無道を懲さねばならぬのだ。さうして吾々の武器といつたら、唯一つの玉を持つて居るのみだ。その玉をもつて、言向和すのだから、大變に骨が折れる。先づこの戦に勝のは忍耐の外には無い。御一同の宣傳使、この重大なる使命が勤まりますか」

蚊々虎は、

「勿論の事、武器もなければ爆弾もない、唯天から貰つたこの玉一つだ」と握拳を固め一同の前に突出し、肩を怒らしながら、

「吾は天下の宣傳使、腰に三尺の秋水は無けれども、鐵より固いこの拳骨、寄せ来る敵を片端から、打つて打つて打ちのめし、一泡吹かして呉れむ」

「コラコラ、ソナ亂暴な事をやつてよいものか。ミロクの教を致す吾々は、一切の武器を持つ事は出来ない。唯玉のみだ」

「その玉はこれだ」

と握拳を丸くして、「ニユツ」と突出して見せる。

高彦「馬鹿だなあ、そりや握り玉だ。玉が違ふよ」

蚊々虎「ソナラ俺は玉を二つ持つてゐる蚊々虎だ。何方を使はうかな。貴様ら

の持つて居るのは餘程大きい立派なものだよ。駱駝に乗つて走る時には邪魔に

なる。歩く時にも大變な邪魔物だ、一つ貴様に貸してやらうか。それはそれは立

派な鞆の玉だぞ」

洒落どころかい、千騎一騎の正念場だ。貴様の魂を以て敵に當れと云ふ事だよ

「宣傳使がそれ位の事を知らぬで勤まるかい、一寸髑つてやつたのだよ。敵地に

臨んでも、綽々として餘裕のある、蚊々虎さまの度胸を見せてやつたのだよ。高

彦、これ見よ、「だらり」と垂下つて居る。度胸の無い奴は強敵の前に来ると縮

み上ると云ふことだが、貴様の玉は二つとも臍下丹田の岩戸の邊に鎮まつて居

るのだらう。否舞ひ上つて居るのだらう」

五月姫は、

「ホ、蚊々虎さまのお元氣な事、妾は臆が燃れます」

と腹を抱へて忍び笑ひに笑ふ。

「コレコレ、姫御前のあられもない事、宣傳使の仰有る事を、若い女の分際として笑ふと云ふ事があつたものか。女らしうもない、ちと【らしう】しなさい」

「淤滕山津見様、蚊々さまや、高さまのお話では一向要領を得ませぬ。一つ大方針を駒山彦に示して下さいな」

淤滕山津見は立つて歌を歌ふ。

「宣傳將軍雷聲有
争知臨敵城下地

進神兵萬里沙程
大道勝驕却虚名

「何と六ヶ敷い歌だのう。宣傳使様、一遍審神をして上げませうか、蚊々虎が。妙な事を云ひますなあ、猿の寝言のやうにさつぱり譯が分らぬじゃないか」

「イヤ、駒山彦は分つてゐますよ」

「分つてゐるなら云うて呉れ、へボ審神者の誤託宣だ。どうで碌な事はあるまい。」

蚊々虎さまを大將とすれば、總ての計畫は「キタリキタリ」と箱指たやうに行くのだが、淤滕山津見は我があるから、サツパリ行かぬのだ。駒山彦よ、貴様も犬や猿の寝言みたやうな事を、知つとるの、知らぬのと云うて、貴様達が知つて怪るか。もう教へて貰はぬわ。脱線だらけの事を聞いたつて仕方がないからなあ」斯く談合ふ所へ、長劍を提げ甲冑を身に纏うた荒武者數十名の駱駝隊現はれ來り、

「ヤア、その森林に駱駝を繋ぎ、休息せる一行のものは、三五教の宣傳使には非ざるか、潔く名乗を上げて吾らが槍の錆となれよ」
と呼ばはりたり。

「ヤアお出たなあ、日頃の力自慢の腕を試すは今この時だ。ヤア五月姫殿、この蚊々虎が武勇を御覽あれ。オイオイ三人の弱蟲共、この方の武者振を見て膽を潰すな」

高彦は蚊々虎に向ひ、
貴様三五教の教理を忘れたか」

「危急存亡のこの場に當つて、三五教もあつたものか。機に臨み、變に應ずるはこれ即ち神謀鬼策。汝らの如き愚者小人の知るところで無い。邪魔ひろくな」

と赭黒い腕を捲つて數十人の群に飛び入り仁王立となつて大音聲、

「吾こそは、元を糺せば盤古神王の遺兒、常照彦なり。今は蚊々虎と名を偽つて、巴留の都に天降り來りし、古今無雙の英雄豪傑だぞ。この鐵拳を一つ揮へば百千萬の敵は一度に雪崩を打つて、ガラガラガラ。足を一つ踏み轟かせば、巴留の都は一度にガラガラ滅茶々々々々。鬼門の金神國治立尊の再來、蓮華臺上に四股踏鳴らせば、巴留の國の三つや四つ、百や二百は忽ち海中にぶるぶるぶる、見事對手になるなら、なつて見よー」

と眼を剥いて呶鳴りつけたり。

この權幕に恐れてか、數十騎の駱駝隊は、駱駝の頭を立て直すや否や、一目散に「もと」來た道へ走り去りぬ。蚊々虎は大手を振り一同の前に鼻「ぴこ」つかせながら歸り來り、

「オイ、どうだい、俺の言靈は偉いものだらう。言靈の伊吹によつて雲霞の如き

大軍も瞬く間に雲を霞と逃散つたり」

一同「ハ、ハ、ハ、ハ」

「イヤもうどうも駒山彦は恐れ入った。随分吹いたものだね」

「吹かいでか、二百十日だ。吹いて吹いて吹き捲つて巴留の都を、冬の都にして

仕舞ふのだ」

高彦「油断は大敵だぜ、逃たのは深い計略があるのだよ。蚊々虎が勝に乗じて追

ひかけて行くと、それこそ【どえらい】陥穽でもあつて豪い目に遇はす積りだよ。

それに違ひない、さすがは淤滕山津見様だ。最前も吟はつしやつたらう、

争知臨敵城下地

大道勝驕却虚名

だ。オイ敵の散亂した間に何とか工夫をしようではないか」

「女の俄宣傳使の差出口、誠に恐れ多い事では御座いますが、此處で有り難い神言を奏上して宣傳歌を歌つたらどうでせう。蚊々虎さまの言靈よりも御神徳が現

はれませう」

淤^{おど}滕^{やまづ}山^み津^み見^みはやや感^{かん}心^{しん}の體^{てい}にて、

「ヤア、これは好^よいところへ氣^きがついた。ヤア一同^{いちどう}の方^{かた}々^{がた}、神^{かみ}言^{ごと}を力^{ちから}一^{いつ}ぱい奏^{そう}上^{じやう}いたしませう」

一同^{いちどう}「御^ご尤^{もつと}も御^ご尤^{もつと}も」

と異^い口^く同^{どう}音^{おん}に答^{こた}へながら、芝^{しば}生^ふの上^{うへ}に端^{たん}坐^ざして神^{かみ}言^{ごと}を奏^{そう}上^{じやう}し、終^{をは}つて五^ご人^{にん}の宣^{せん}傳^{でん}使^しは蚊^か々^{がとら}虎^{とら}を真^ま先^{つさき}に宣^{せん}傳^{でん}歌^かを歌^{うた}ひながら、城^{じやう}下^かに向^{むか}つて進^{すす}み行^ゆく。

（大正一一・二・九 舊一・一三 加藤明子録）

第二十九章 原山祇（三七九）

五^ご人^{にん}の宣^{せん}傳^{でん}使^しは、巴^は留^るの城^{じやう}下^かを指^さして宣^{せん}傳^{でん}歌^かを歌^{うた}ひ乍^{なが}ら、前^{ぜん}後^ご左^{さい}右^うに眼^めを配^{くば}り、何^い時^つ敵^{てき}の襲^し来^{らい}せ

むも圖り難し、寄らば鐵拳を加へむと拳を握り、肩を怒らし、異様の足つきにて
進み行く。城下には彼方にも此方にも三人、五人、十人と集つてこの宣傳使の扮
装を見て、種々の噂をやつて居る。

甲「オイこの閒來た宣傳使は、鷹取別さまに慘酷い目に遭つて、沙漠の中に埋め
られて仕舞ひよつたと云ふ事だが、今來た奴はよつぽど強さうな奴ぢや無いか。
きつと仕返しに來よつたのだらう。また一つ面白い騒動がオツ始まるぜ。あの
【ギロギロ】した眼の玉を見い。あんな眼で一つ睨まれたら、なんぼ御威勢の高
き鷹取別さまでも、縮み上つて了ふぜ」

乙「何、あの腰を見よ、【く】の字に曲つて仕舞つてるぢやないか。偉さうに大
道を大手を振つて、八王神の様に六方を踏んで歩いてるが、コンナ奴は腰の【く】
の字のやうに苦もなく撮み出されてしまふよ」

甲「【ヨウ】、あれは何だ。素適な別嬪が居るぞ。氣樂な宣傳使だなあ。嬢を伴
れよつて、コンナ敵城下へ、歌を歌つて來るなんて、よほど度胸が無くては、や
れた藝では無いぜ」

甲「たつた今、御城内の駱駝隊が豪い勢で行きよつたが、歸る時は蒼白な顔して火の玉が出たとか云つて逃げて歸つたでないか。彼奴は餘程偉い奴だぜ」

蚊々虎はこの聲を耳に挿んで得意顔、

「オーイ、其處に居る人間共、今何と云つた、火の玉が出たと云つたらう」

一同「ハイハイ申しました」

「その火の玉は何處から出たのか分つてるか。勿體なくも三五教の宣傳使様の之

が光つたのだよ」

と指で自分の眼を指して見せる。

高彦「コラコラ道草を喰はずに【ズツ】と行かぬか」

「何だい、人を牛か馬かのやうに吐かしよつて、何でも宜いワイ。蚊々虎さまに

踵いて來い。恐相に五人の眞中に這入りよつて、高彦、その態ア何んだ。矢面に

立つのは矢張り蚊々虎さまだ。歌へ歌へ」

一同は聲を揃へて、

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立別たてわける

傲おごり高振たかぶり世よの人ひとを

目下めしたに見下みおろす鬼瓦おにがはら

寒さむい暑あついも知しらず顔がほ

天狗てんぐの鼻はなの鷹取たかとり別わけが

巴留はるの都みやこに現あらはれて

生血なまちを搾しぼり民草たみぐさの

汗あせや膏あぶらを吸すうて飲のむ

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立別たてわけて

誠まことのものは久方ひさかたの

天津御國あまつみくにへ救たすけ往ゆく

地獄ぢごくのやうな巴留はるの國くに

春はるは來くれども花咲はなさかず

秋あきは來くれども實みは實のらず

冬ふゆの寒さむさにブルブルと

慄ふるひ戦をのく民草たみぐさを

救たすけむ爲ための宣傳使せんでんし

巴留はるの都みやこの人々ひとびとよ

神かみの教をしへに目めを醒さませ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まことの神かみの守まもります

三五あななひけう教せうは世よを救すくふ

音おとに名高なだかき淤おどやま津見つみの

貴うづの命みことの宣傳使せんでんし

光り輝く蚊々虎の 二つの眼に照されて
 常世の枉津見逃げて行く 黑白も分ぬ五月空
 日の出神が現はれて 世界を照す五月姫
 四方に塞がる村肝の 心の駒山彦の司
 さしもに廣き大沙漠 駱駝の背に跨りて
 神徳高き高彦の 道を教ふる宣傳使
 巴留の都の人々よ 眼を洗へ目を覺ませ
 眼を洗つて目を覺ませ 唯何事も人の世は
 直日に見直し聞き直す 誠の神の宣傳使
 怯めず怖れずドンドンと 吾らが前に現はれて
 救ひの道を早く聞け 救ひの船に早く乗れ
 乗り後れなよ神の船

と歌ひ乍ら何の恐れ氣もなく、鷹取別の城門に向ふ。このとき天空を轟かして幾

千とも數へきれぬ天磐船、鳥船が北方の天高く姿を隠しける。

淤滕山津見は平然として、

「アハ、さすかの鷹取別も言靈の偉力に恐れ宣傳歌に縮み上つて逃げよつたな。刃に衄らずして勝とはこの事だ。然し油斷は大敵、一同の者氣を注けられよ」

「何と宣傳使様、蚊々虎の言靈に限りませぬ。最前も最前と云ひ雲霞の如き大軍が吾々の鼻息に吹き散つたかと思へば、又もや吾々の宣傳歌に縮み上がつて逃げてしまつた。眞實に何で是程、この蚊々虎は神力が多いのか知らぬ。吾ながら驚嘆するの外は無いぢやないですか」

「コラコラ貴様ばかり功名を横取り仕様と思つても、さうはさせぬぞ。皆日の出神様の御守護だ。貴様は俺の目が光つたのだなんて法螺を吹きよつたが、あれを見よ。城の櫓の上に大きな火の玉が現はれて居るぢやないか」

一同は櫓に眼を注げば、高彦の言のごとく皎々赫々たる巨大なる火の玉は、五色の輝きを見せて空中に揺らいで居る。一同は思はずアツと云ひ乍ら大地に平伏し、拍手して天津祝詞を奏上したり。茲に淤滕山津見は高彦をこの國の守護神と

して原山津見と命名し、急使を馳せて天教山の木花姫の御許に認許を奏上したりける。

(大正一一・二・九 舊一・一三 北村隆光録)

第五篇 宇都の國

第三〇章 珍山峠〔三八〇〕

高彦は巴留の國の西部の守護職となり、國魂龍世姫神の神靈を奉齋し、鷹取別の後を襲ふことになりぬ。一行は數日間ここに滞在し國人に宣傳歌を教へ、名残を惜しみつつ又もや宣傳歌を歌つて、珍の國を指して進み行く。夜を日に踵いで

四人の宣傳使は、漸くにして巴留と珍との國境、珍の峠の山麓に着いた。四人は芝生の上に腰打掛け折柄吹きくる涼風に汗を拂ひつつ、四方山の話に耽りぬ。

四邊の木々の梢には油蝉が、ミーンミーンと睡たさうな聲で囀つて居る。駒山彦は細谷川の清き水を手に掬つて飲みながら、

「ア、水ほど甘いものは無い。酔醒の水の甘さは下戸知らずだワイ」

蚊々虎「オイ駒、酒も吞まずに酔醒もあつたものかい。餘り日が長いので草臥れて夢でも見居つたな。夢の浮世と云ひながら、さてもさても困つた駒山彦だ。ア

ハ、ハ、ハ、

「オイ蝉の親方、乾兒が澤山あると思つて威張つてるな」

「蝉の親方つて誰のことだい。よもや俺のことぢやあるまいな」

「誰のことだか知らぬが、蝉といふ奴は人が來ると啼き止んで、パイイと隣の木へ遁て行く奴ぢや、その機に屹度小便をかけて行くよ。貴様はこれまで何でも物を買ひよつて、好い程使ひよつてモ一嫌になつたと云ひよつて、價も拂はずに小便をかける奴ぢやらう。矢釜敷吐く奴は蝉だよ。しかしモ一コンナことは免除し

て置かうかい、この山坂になつてまた悄氣で平太りよると一行の迷惑だからな」
「殊更暑き夏の日、巴留の都を立出でて、岩の根木の根踏【さく】み、心の駒に鞭打ちてここまで来るは来たものの、こないな奴と道伴れに、なるのは俺も秋がきた。大神さまも胸欲だ。困つた駒山彦の奴、珍山峠の頂邊から、駒の如くに轉げ落ちて……」

「コラコラ蚊々虎、縁起の悪いことを云ふな。淤滕山津見さまが居らつしやるのを知らぬか」

「【おど】山も何もあつたものかい。俺の困るのは珍山峠だ。一つ水でも飲んで元氣を出して越えてやらう」

と云ひながら、谷水を掬うて一口飲み、

「ヨ、此奴は妙な味がするぞ。さうして湯のやうに熱いじゃないか。ナンデも此の水上に温泉が湧いて居るに違ひ無いわ。餘り早く旅でも無し、一つ此の谷川を傳うて湯の湧いて居る所まで探検しようぢやないか」

淤滕山津見は不思議さうに、

「さうか、温いか、妙だナア」

「大變に暖かくつて好い味のする水ですよ。旅の疲れを癒すには持つて來いだ。一つ行つて見ませうか」

「よからう」

と一同は、谷川を右へ飛び越え、左へ渡り上ること數十町、漸くにして谷幅の廣い處に出て來た。はるか向ふに谷間を響かす宣傳歌聞え來たる。

蚊々虎「やあ宣傳歌だ。コンナ所に誰が來て居るのだらう」

駒山彦「莫迦云へ、誰がコンナ所に來て氣樂さうに人もをらぬのに宣傳歌を歌ふ奴があるものか。きつと天狗だよ」

「何ツ！ 天狗だ。そいつは面白い。一つ蚊々虎と天狗と力競べでもしてやらうか」

「オイオイ、貴様は何でも彼でも向ふ【いき】の強い奴だナ。ドンナ危ない處でも一番に飛び出しよつて、しまひには失策るぞ」

「俺が失策つたことが一度だつてあるかい。強敵を前に控へて矛を納め、旗を巻

て豫定の退却をするのは大丈夫の本懐では無いぞ」

「また法螺を吹きよる。まあまあ油断大敵だ。そーつと様子を考へて行つて、其の上のことにせい」

「貴様は何時でもそれだから困る。畏縮退嬰主義だ。出る杭は打たれる。觸らぬ蜂は刺さぬ、事勿れ主義の腰弱宣傳使。俺は偵察ナンテ、ソナ氣の長い事はして居れない。これから一步先へ行つて偵察兼格闘だ。俺が勝たら呼ぶから出て来い。俺が負けたら黙つて居るわ。お前の様な弱蟲が隨いて来ると足手纏ひになつて、碌に喧嘩も出来はしない」

と云ひながら一目散に歩足を速めて、猿の如く谷川の岩をポンポンと飛び越えて、姿を隠したり。

三人の宣傳使は、その後を追うて悠々と登り行く。忽ち前方に當つて、

「オーイ、オーイ」

と呼ぶ蚊々虎の疳高い聲が、木靈に響き來たる。

駒山彦「ヤア、あれは蚊々虎の聲ですな。また何か一人で威張つてるのでせう。

面白^{おもしろ}い奴^{やつ}もあればあるものすな

淤^{おど}滕^{やまづ}山^み津^み見^み 彼^{あいつ}奴^{やつ}は剽^{へう}輕^{きん}な奴^{やつ}で、比^ひ較^{かく}的^{てき}豪^{がう}膽^{たん}者^{もの}だから伴^つれて歩^{ある}いて居^をるのだが、

旅^{たび}の憂^うさ晴^はらしには打^うつて「すげ」たやうな男^{をとこ}だ。アハ、ハ、ハ、ハ、

五月^{さつき}姫^{ひめ} 本^{ほん}當^{たう}に面^{おも}白^{しろ}い方^{かた}ですな。彼^あの方^{かた}と一^{いつ}緒^{しよ}に宣^{せん}傳^{でん}に廻^{まは}つてをれば、何^い時^つも笑^{わら}

ひ通^{とほ}して春^{はる}のやうな心^{こころ}持^{もち}がしますわ。ホ、ハ、ハ、ハ、

駒^{こま}山^{やま}彦^{ひこ} 大^{たい}變^{へん}な御^ご執^し心^{しん}ですな。お浦^{うら}山^{やま}吹^ふさま、駒^{こま}も堪^{たま}りませぬワ

五月^{さつき}姫^{ひめ}は、

ホ、ハ、ハ、

と笑^{わら}ひながら袖^{そで}口^{ぐち}に顔^{かほ}を隠^{かく}す。又^{また}もや、

オ、イ、オ、イ

と云^いふ聲^{こゑ}が響^{ひび}き來^きたりぬ。一^{いつ}行^{かう}は思^{おも}はず足^{あし}を速^{はや}めて聲^{こゑ}する方^{ほう}に急^{いそ}ぎける。

(大正一一・二・九 舊一・一三 外山豊二録)

第三章 谷間の温泉（三八一）

三人の宣傳使は、聲を知邊に崎嶇たる谷道を、流れに沿うて登り來たり、見れば湯煙濛々と立ち昇り、天然の温泉が湧き居る。蚊々虎は一人眞裸になつて、倒れてゐる男の前に雙手を組み、神言を奏上し、鎮魂を施しむたり。

駒山彦は之を見て、

「ヤア、蚊々虎さま、そら何だ」

蚊々虎は鎮魂を了り、

「ヤア、何でもない。此處に一人の人間が倒れて居るのだ。身體を探つて見れば、まだ血の循つて居る【せい】か、この湯の【せい】か知らぬがそこら中温い。どうぞして助けたいものだ、一生懸命鎮魂してるのだが、俺らの力では此奴ばかりはいかぬ。淤藤山津見の宣傳使に、一つ鎮魂をやつて貰ひたいと思つて呼んだのだよ。モシモシ先生、一つこの男に鎮魂を施してくださいな」

淤藤山津見は、

「やつて見ませうかな」

と云ひながら、天の數歌を歌ひ了つて雙手を組み、ウンと一聲、鎮魂の息を掛た。裸體になつて倒れて居た男は、ムクムクと起上り、目を擦りながら、四人の宣傳使が前に在るに氣がつき、

「ヤア、何れの方が存じませぬが、一命をお救ひ下さいまして有難う存じます」と顔を上ぐる途端に、蚊々虎は、

「ヨー、貴方は秘露の都で御目に懸つた、正鹿山津見の宣傳使では御座らぬか」
「アア貴方は蚊々虎殿か。ヨーヨー、淤滕山津見殿、思はぬ處で御目に懸りました。是も全く三五教の神様の御引合せ、有難う存じます」

淤滕山津見「貴方はどうして、斯る山奥に御越しになつたのですか、是には何か深き仔細がありますませう」

「ハイ、私は秘露の都で、日の出神様や貴方らと袂を分ち、それより巴留の國を宣傳せむと、この珍山峠を越え、鷹取別の城下に宣傳歌を歌つて参りました。所が俄に數百の駱駝隊が現はれて、前後左右より取圍み、槍の切尖にて所構はず突

刺され、失神したと思へば、沙漠の中に葬られて居た。私は砂を掻き分けて這ひ上り、夜陰に紛れて巴留の都を逃げ出し、この峠に差しかかる折りしも、傷所はますます痛み、最早一步も進むことが出来なくなり、喉の渴きを谷水に醫さむと、細谷川の清水を汲んで見れば、何とも知れぬ芳き香と味がある。さうして此水は谷水に似ず實に温かい。是は薬の水ではあるまいかと、手に掬つて傷所に塗つて見た所が、忽ち其傷は癒えました。されど身體の疲勞はどことなく苦しく、それに堪へかね、この谷川を逆れば屹度良い温泉があらう、其處へ行つて身の養生を致さむと、漸く此温泉を尋ね當ました。それより日夜この温泉に身を浸し、數多の槍傷はすっかり癒えましたが、あまり浴湯が過ぎたと見えて逆上し、知覺精神を喪失してこの場に倒れて居た處、尊き神の御引合せ、貴方方に巡り合ひ、命を助けて貰ひました。コンナ有難い事はありません。』

と兩眼に涙を湛へながら、兩手を合せて感謝の意を表したり。

淤藤山津見は、

何事も神様の御引き合せ、吾々は神様の綱に操られて、貴方を救ふべく遣はさ

れたものでありませう。吾々は感謝の言葉を受けては、實に勿體ない氣がする。天地の大神に早く感謝をして下さい。吾々も共に神言を奏上いたしませう』
と淤藤山津見の言葉に従ひ、一同はこの温泉の周圍に端坐して神言を奏上したりける。

(大正一一・二・九 舊一・一三 土井靖都録)

(第二六章) 第三一章 昭和一〇・三・三 於天恩郷透明殿 王仁校正)

第三二章 朝の紅顔(三八二)

珍山峠の谷間には、神の仕組か、偶然か、此處に不意くも温泉の側に邂逅合ひ、滾々として盡きざる神の恵の温かき温泉に、日七日夜七夜、心身を淨め、又もや一行五人は神言を奏上し、宣傳歌を歌ひながら、徐徐とこの峠を登り行く。漸く一行は珍山の山頂に到達したり。

蚊々虎は、

「ア、ア、ア、苦中樂あり、樂中苦あり、苦樂不二、善惡一如とは能く言うたものだ。汗をタラタラ流して苦しみてをれば、結構な温泉がチヤンと吾々に湯を湧かして「サア皆さま、永々御苦勞であつた。嚙々お疲勞でせう」とも何とも言はずに、不言實行の Handbook を見せて居る。又復この坂を汗みどろになつて登つてくれば、コンナ結構な平坦な土地があつて、涼しい風が吹いて來るワイ。極樂の餘り風だ。本當に苦しまぬと、樂の味は判らぬワイ」

駒山彦も、

「本當に結構だつた。鞆丸の皺伸ばしだつたよ。貴様の面も餘程皺が取れたよ」
蚊々虎は、

「馬鹿を言ふない、俺は素から皺ナンテ有りやしないよ。貴様は何時弱蟲だから、一寸した事にでも顔を顰めよるから、自然に皺だらけだ。オイ勘定をして見よ、澤山な皺だぞ。四八三十二も寄つてるわ」

「よく饒舌る奴だなあ、口が千年ほど先に生れたのだらう」

山に千年、海に千年、口に千年といふ劫を経た兄さまだよ

「蟻みたいな奴だな。三千年経つて、初めて人間に生れると言ふのだが、貴様は何時人間に成るのだい」

「人間どころか、俺は神さまだよ」

「さうだらう。蚊だとか蚤だとか、虎だとか、蟲のやうな、四つ足のやうな名をつけよつて、それで神様か。人の頭に止まつて、頭を【カミ】様。人間を引き裂いて喰ふ神様だらう」

「ヤイ、駒、貴様劫々口が達者に成りよつたな。何時の間にか俺のお株を奪りよつて」

「決つた事だ、名からして駒さまだ。駒の如くに言霊がよく轉ぶのだよ」

正鹿山津見は、立つて東南方を指さし、

「淤藤山津見様、ズツと向ふに青々とした高山が見えませう、彼の國が珍の國ですよ。私は日の出神様に、「珍の國を守れよ」との嚴命を受けました。然しながら、まだ外に尊い國がある様に思へて、何うしても氣が落ちつかず、この峠をド

ンドンと登つて、夜を日に次いで巴留の都へ宣傳に行つたのです。さうした處が、今度は神様の戒めだと見えて、散々な目に逢ひ、お蔭で生命だけは助かりました。これをおもへば、吾々は我を出すことは出来ませぬ。ただ長上の命令に従つて、神妙にお勤めするに限ると、ほとほと改心いたしました。蚊々虎々アンナ細長い珍の國に、ウヅウヅして居るのも氣が利かれないと思つたのでせう。まだ外に結構な國が亞拉然丁と思つて、欲の熊鷹、股が裂けたと云ふ様なものすな、正鹿山津見さま」

淤滕山津見は、

「コラコラ蚊々虎、貴様は直にそれだから困る。何故それほど言靈が汚いのか」
「これは怪しからぬ。貴方は私の發言權を妨害するのですか」
「いや、さうではない。あまりお喋りが過ぎると聲が草臥れて、【まさか】の時に言靈の力が弱ると困るから氣をつけたのだよ。それよりも峠に上つた祝に、氣樂な世間話でもして、悠くりと休まうかい」
「ドンナ話でも宜しいか、貴方は發言權を決して止めませぬな」

「宜しい宜しい、何なと仰有れ。貴方の好きな話を、靜に面白く願ひます」

「靜に面白く話が出来ますか。貴方は無理を言ひますね。丁度、黙つても言へ、寢て走れ、鞆玉喰はへて背伸びせよ、と云ふやうな御注文ですな。如何に雄辨家の蚊々虎でも、それ計りは御免だ」

淤滕山津見は、

「さう氣を廻して怒つては困る。何でもいい、一寸位大きな聲でも構はぬ」

蚊々虎は、芝生の上に大胡座をかき、

「工、人間もいい加減に片付く時には片付くものだ。ある處に祝姫と云ふ古今獨歩、珍無類、奇妙奇天烈、何とも彼とも言うに言はれぬ、素適滅法界の美人があつた。そのお姫さまを、彼方からも此方からも、女房にくれ、夫にならうと矢の催促であつたが、祝姫は、自分の容色に自惚れて、私は天下絶世の美人だ、アンナ人の嫁になるのは嫌だ、アンナ男を婿に取るのは、提燈に釣鐘だ、孔雀の嫁に鳥の婿だ、あまりこの美人を見損ひするな。私もこれから、天下の宣傳使になつて一つ功を建て、偉い者になつた曉は、世界中の立派な男の、權威のある婿を

選り取りすると言つて、どれもこれも、こぐちから肱鐵砲を亂射して居た。さうする間に、櫻の花は何時までも梢に止まらず、

花の色はうつりにけりな徒らにわがみ世にふるながめせしまに

と何處やらの三五教とか、穴ない姫とかが言つた様に、段々と顔に小皺が寄つて昔の色香は、日に月に褪せて了つた。それでも、何處やらに残る姥櫻の其色は、實に素適滅法界のものだつた。祝姫は、何これでも偉者となりさへすれば、世の中は一ホド、二キリヨウ、三カネだと言つて、高く止まつて居つたが、たうとう天罰が當つて、私によう似た名の付いた、蚊取別といふ天下一品の禿ちやまの瓢箪面のヘツピリ腰の禿だらけの男と夫婦になつて、宣傳使になつた實際の話があるよ。五月姫さまも、いい加減に覺悟をせぬと、朝の紅顔、夕べの白骨で、見返る者は無いやうに成つて、清少納言の様に門に立つて、妾の老骨を買はぬかと言つたつて、買手が無くなつて了ひますよ」

駒山彦は吹き出し、

「アハ、ハ、ハ、うまいのう、イヤ感心だ。然し蚊々虎、心配するな。此間も貴様

が天狗と喧嘩すると云つて驅出した後で、五月姫さまが、「蚊々虎さまは本當に色こそ黒いが、快活な人ですね。妾あの人と一緒に宣傳に行くのなら、一寸も苦い事はありませんわ。面白くて旅の疲勞も忘れて了ふ」と言つていらつしやつたよ、ねえ五月姫さま、さうでしたわね」

と顔を覗き込む。

五月姫は、顔に袖をあてて愧かしげに伏向く。

蚊々虎「へん、天下の色男、俺の吸引力は豪いものだらう」

正鹿山津見「あゝ蚊々虎さまの辨舌といひ、勇氣と云ひ、さう無くては天下の宣傳使には成れませぬ。吾々のやうに、巴留の都へ行つて、宣傳歌を歌つて居ると、後に目が無いから、駱駝隊にグサリと突かれて、芋刺と成り、沙漠の中へ放り込まれる様なことでは、宣傳使も何もあつたものではない。これから一つ、蚊々虎さまに倣つて、膽玉でも練りませうかい」

駒山彦は、

「おい蚊々公、お目出度う」

蚊々虎かがとら「エー妬やくない」

「妬やくないと云いつたつて、天道てんだうさま様も焦こげつくほど俺おいらの頭あたまを焼やくではないか。焼やくのは此頃このころの陽氣やうきだよ。あまり暑あついので、貴様きさまは一寸ちよつと逆上さかせ上あつたな。水みづでもあれば頭あたまからブツかけてやるのだが、生憎あいにく山の頂邊てつぺんで水みづも無し、幸福しあはせな奴やつだワイ」

「サアサア皆みなさま汗あせも大分だいぶん乾かわきました。これからぼつぼつ峠たうげを下くだりませう」

と言いひつつ先さきに立たつて、淤滕山おどやま津見つみは歩あるき出だした。

「あゝあゝ、肝腎かんじんの正念場しやうねんばに氣きの利きかぬことだワイ」

と蚊々虎かがとらは小聲ここゑに呶つぶやき、振返ふりかへり振返ふりかへり、五月姫さつきひめの顔かほを竊ぬすみ目めに眺ながめつつ坂さかを下くだる。

(大正一一・二・九 舊一・一三 東尾吉雄録)

第三三章

天上眉毛てんじやうまゆげ (三八三)

炎熱焼くが如き夏の空

花の都と謳はれし

巴留の都を後にして

淤滕山津見の一行は

漸うここに辿り着き

桃上彦を相添へて

天津御神の珍の御子

世の民草を救はむと

聲も涼しき宣傳歌

足を揃へて珍山の

峠を下る雄々しさよ。

日は漸く西に傾き、山と山との谷道には大なる影映し來たる。

駒山彦は、

「ヤア、大分に涼しくなつて來たねー。無ければならず、有つては困るものは太

陽の光熱だ。斯うして山蔭に日が隠れると、夜のやうに涼しくなつて來た。斯う

云ふ涼味は旅行をして見ねば味はふことは出來ぬものだナア」

蚊々虎は口を尖らせ、

「貴様何を言ふか、罰當り奴が。無ければならぬものの、有つては困るとは、そ

ら何だ、宣り直せ宣り直せ。無ければならぬもので、無くては困る日天様、暑い光熱を頭の上から照して下さつたのは、神様の厚い御恵だ。さうして涼しき蔭を吾らに投げ與へ、澄み切つた風を吹かして下さるのは、神様の吾々を保護したまふ清き涼しき御恵の御かげだと宣り直さぬか」

「やあ、此奴は一つ失策つた。御天道様、いま蚊々虎の云つた通りに駒山彦は宣り直します」

「ソラ見たか」

「空見たつて日天様は、山に御隠れになつてゐるじゃないか」

「空呆けるない」

「淤藤山津見は、」

「ヤアヤア、また始まつたか。面白いねー」

「五月姫は俯むいて、」

「ホ、ホ、ホ、」

「と微笑かに笑ふ。」

蚊々虎は、

「五月の空の五月姫、床しい聲で花の唇を開いて、ホ、ホ、ホ、杜鵑、聲も聞えりや姿も見える。見れば見るほど氣高い姿の花菖蒲、黑白も分かぬ暗の夜に、綾に尊き五月姫の御道伴れ。世の中は何うしても女に限るねー。男ばかり歩いて居ると、何時となしにゴツゴツとして角張つて、どうもうまく車の運轉がつかぬやうだ」

駒山彦「蚊々虎、貴様は「く」の字形の腰付きで、女が無ければ角が立つの、ゴツゴツするのとも言へたものぢや。貴様らに、何ぼ五月姫だつて暑苦しい、誰が秋波を送るものかい。好い氣になりよつて、煽て揚げられて、天下の色男は俺だいと云ふやうな、その鼻息は何だい」

「大分駒の息も荒くなつたが、弱い奴だな。苦しいのか、夫れ程苦しければ恰度其處に都合の好い岩がある。其處で一服やつたら何うだ。足の弱い、腰の弱い宣傳使を伴つて歩くと、足手纏ひになつて困る。まあ貴様一服でもするが好いわ。モシモシ淤滕山さま、正鹿山さま貴方達も何なら一服なさつたら如何ですか。五

月姫さま貴方は女にも似合はぬ御脚は達者だ。脚の達者なもの同士一足御先へ失敬しませうか」

「ヤア、うまい事を云ひよる。貴様の腹は讀めたぞ。五月さま、貴方も休みなさい。蚊々虎一人先に行つて、道を踏ん迷つて谷底へ落ちて寂滅爲樂だ。先へ行け、骨くらは駒山彦が道伴れの好意で拾つてやるワイ」

「ヤア、邪魔臭い縁起でも無いこと云ひよるから、俺も一つ達者な足を辛抱して休ましてやるかい」

「倒頭本音を吹きよつた。アハ、ハ、ハ、」
一行は、平面な岩の上に足を伸ばして暫時休息する。太陽は全く地平線下に没せしと見えて、四邊は追々と暗くなり來たる。

正鹿山津見は不安な顔で、

「まだ是から珍の都へは餘程の道程があります。この先にモ一つ大きな山を越さねばなりません。何分荆棘の茂つた猪より通つたことの無い、而して嶮しい山道ですから、悠くりと此處で夜を明かしませうか。この先の山は天雲山と云つ

て此珍山峠よりも餘程高いですよ。而して此頃は大變な大蛇や毒蛇が道に横たはつて居ますから、夜の旅は危険ですからな。此の峠を大蛇峠と云ふ位ですから」
「何ッ！、大蛇峠ですか、大蛇が出ると、其奴は面白い。日頃の腕試し度胸試しだ。夫れを聞けば蚊々虎の腕は「りゆう」りゆうと鳴つて来る。ヤア、面白い、矢も楯も堪らぬやうになつて来たワ。オイ、一同の宣傳使、一つ大蛇に向つて宣傳歌でも聞かしてやらうじやないか。宣傳歌の徳に依つて大蛇は神格化して大變な美人になるよ」

駒山彦は呆れて、

「また美人のことを云ひよる。貴様一人行くが好いワ」

「驚いたか、肝を潰したか、おつ魂消たか、何だい其の顔色は。青大將のやうに眞蒼になりよつて、阿呆大將奴が」

「コラコラ、蚊々虎、阿呆大將と云ふことがあるか、駒山の前で宣り直せ」

「宣り直すとも、今まで駱駝に乗つてみたが、今度は大蛇の背に乗り直した」

「偉い法螺を吹くね。實物を拜見したら反對に蚊々虎の方から、尾を巻いて遁げ

るだらう」

正鹿山津見は靜かに、

「闇夜の事と云ひ、峻山絶壁といひ、夜道に日は暮ませぬ。まあ、悠くりと致しませう」

淤滕山津見は、その尾について、

「また新しい日輪様を拜むまで、此處で祝詞を奏上て御日待ちを致しませうか」
一同「よろしからう」

と巖上に端坐し、天津祝詞を奏上し、宣傳歌を一通り歌つて、岩の褥に腕枕、星の紋のついた青い蒲團を被つて、華胥の國に遊樂の身となりぬ。半圓の月は東天をかすめて昇り來たる。五人の姿は手に取る如く明かに見え出し來たりぬ。

蚊々虎は目を醒し、

「ヤア、何れも此れも、よく臥せり居つたものだナア。人間も罪の無いものだワイ。何奴の顔が一番罪のない顔をしてゐるか、一々點檢をしてやらうかい。まづ第一に淤滕山津見の首實檢に及ぶとしようか。ヤア、此奴は昔から悪い奴だと思

つたが、ホンニ一寸悪さうな顔をしてをるワイ。この口許が一寸憎らしい。大きな口を開けよつて、涎を出して居る所の態と云つたら、見られたものぢや無いワイ。幸ひ峠を下る時に「むし」つてきた桑の實がある。此奴で一つ顔を彩つてやらうかナア」

と獨語を云ひながら、口の邊り目の周圍に紫の汁を塗つけた。月影に「すかし」て見て、

「ヤア、面白い面白い、明日の朝になつたら随分吃驚することだらう。此奴は「地獄行き」と書いて置いてやれ」
と頬邊に印を入れる。

「ヤア、正鹿山津見の顔か。此奴は割とは悪人に似合はぬ好い顔だな。彩ると却つて似合はぬかも知れないが、片怨みがあるといかぬから、何なと書いてやらうか」

と鼻を紫に塗つて了つた。

「サア、これから矢釜敷家の駒公だ。此奴の額に何と書いてやらうかナ。分つた

「五月姫欲しさに、よう妬く男」と、ハ、ハ、ハ、ハ、是で好い。サアこれから五月姫の番だ、花の顔月の眉、何處にも缺點がないワイ。それでも御附合に何とかせなくてはなるまい。オーさうだ、角隠しの天上眉毛だ」
と、チヨボチヨボと額に圓を描いた。

「やあ、此奴は素的だ。ますます別嬪になつた。何處とも無しに愛嬌が彌増て威嚴が加はつた。ヤア、これで濟みか。俺だけ無疵で居つては面白くないから、俺も一つやつてやらうかな、ウンさうだ。「世界一の色男」と書いて置いてやるかい。ハ、ハ、ハ、面白い面白い、ドツコイ面黒い面黒い、五百羅漢の陳列場見たやうになつて了つた。ワハ、ハ、ハ、」

駒山彦は目を醒まして、

「誰だ、安眠の妨害する奴は。人間はな、刹那心だよ。寝る時にはグツと寝て、働く時には働くのだぞ。氣違ひの様に五月姫と婚禮でもしてゐるやうな夢でも見居つたのか。何だい、夜中に笑ひよつて早く寝ぬか」

「ハイハイ、寝ます寝ます、お前等も頭を上げぬと寝るがよいワイ。ヤア、早く

寝て了つたな。全で鱧の化物を見たやうな奴だ。ワハ、ハ、ハ、ハ、誰も彼も罪の無いやうな有るやうな顔してよく寝てるワイ。この蚊々虎も付き合ひだ。狸の空寝入りでもやらかさうかナア」
とゴロツと肘を枕に横たわりける。

眞心や巖面寝暖桑の夢（弓）

（大正一一・二・一〇 舊一・一四 外山豊二録）

第三四章 烏天狗（三八四）

月は中空に輝き、星稀なる大御空、雲を散らして吹く松風の音に、五月姫は目を醒まし、
「これはこれは、
一切萬事を忘れ、御寝になつた時の御顔は悪相に見える。」

是も矢張り心の色かいなー。正鹿山津見様の此の御鼻は何として是ほど赤いのだらう。鼻筋の通つた、綺麗な男前だと思つたに、此のまた鼻は何事ぞ、甚だ醜くい御顔立。ヤアヤア蚊々虎さまの御顔にも妙な色が顯はれて居る、蚊々虎さま、せかいだいいちの色男」と書いてある。ホ、ホ、ホ、罪の無ささうな御顔。本當に此の御顔は神様のやうだわ。ヤ、嫌な事、「五月姫に惚れて、よう妬く男」ア、嫌な事、駒山さまたら何と妙な御顔に成られたでせう。ホ、ホ、ホ、」
蚊々虎は五月姫の聲を聞きながら、可笑しさを耐へて齒を喰締り、クークーと口の中で笑うて居る。

駒山彦は五月姫の聲にムツクと起き上り、五月姫の襟髪をグツと握つて、
「コラ素平太、何を吐かしよるのだい。淤藤山津見の顔は悪相だの、正鹿山津見の顔が赤いの、好きだの嫌ひのと吐きよつて、剩けに「世界一の色男だ」なんて俺が知らずと寝て居るに餘りだ。駒山彦は「五月姫に惚れて、よう妬く男」なんて馬鹿にするな、女早のない世の中だ。世界に男の数が四分、女の数が六分、何だ其シヤツ面は。貴様のやうな女は、此の高砂島には、策で量る程「ごろつ

て「居るのだ。へん天上眉毛を附けよつて、馬鹿にするない。人が知らぬと寝て居るかと思つて、蚊々虎の顔を穴の明くほど覗きよつて、世界一の色男だと、何を吐ざきよるのだ。惚れた貴様の目からは菊石も鱷、鼻の取れたのも、腰の曲つたのも、優らしう見えるだらう。月は皎々として天空高く輝き渡れども、お前の胸は戀の暗だ。味噌も糞も一所雑多にしよつて、誰がお前のやうな端女に惚れるの妬くのと餘り馬鹿にするない」

蚊々虎「ク、ク、ク、ク、ウハ、ウハ、面白面白。おつとどつこい、ク、ク、桑の實で顔を彩られ、面赤いワイ。ウハ、ウハ、」

此笑ひ聲に、淤藤山津見、正鹿山津見の二人は、ムツクと起き上り、
「あゝよく寝入つて居たのにあた喧しい、折角の面白い夢を破られて了うた。貴様らは困つた奴ぢやない。夜明けに間もあるまい。モ一と寝入りせなくちやならないから、お前達も黙つて寝たら宜からう」

駒山彦「ヤ、淤藤山津見さま、貴方の顔はソラ何んだ。正鹿山津見さま、其鼻は何うした。チト變だぜ」

おどやまづみ 變でも何でも宜い。やつぱり顔は顔ぢや

まさかやまづみ 鼻は鼻だよ。ア、喧しい奴だ

かがとら ウハ、ハ、ハ、ハ

さつきひめ ホ、ハ、ハ、ハ

こまやまひこ 馬鹿々々しい、笑ひ所か、人の顔の棚下しをしよつて、素平太の癖にな

ア

おどやまづみ コレコレ駒山彦、三五教だ。宣り直さぬかい

こまやまひこ ハイハイ

さう斯うする間に月の色は漸く褪せて、其處ら一面ホンノリと明くなり來たり

ぬ。諸鳥は言ひ合したるやうに、木々の梢に囀り始めた。數十羽の鳥は、五人が

あんぐわ 安臥せる上空をアホウアホウと鳴きわたる。

かがとら オイ、阿呆共、起きぬかい。烏までアホウアホウと言うてるよ。お天道

さまに、【いい】面曝した。お前たちの顔は何んだい

いちどう 一同はムツクと起上り互ひに顔を見合せ、

一同「ヤーヤー、ヨーヨー、誰だい、コンナ悪戯をしよつたのは」

駒山彦「蚊々虎だ、決まつてるわ」

「お前たちの面を熟々考ふるに、之は矢張り烏の仕業だなア。烏が最前も大きな聲でカアカアカカアカア蚊々虎かも知れぬと鳴いて居たよ。察する所、要するに即ち、天狗の悪戯だよ。天狗といふ奴はなア、黒い顔しよつて腰の曲つてる癖に、悪戯をする奴だ」

駒山彦は吹き出し、

「たうとう白状しやがつたなア。ヤー貴様の顔には「世界第一の色男」だて、馬鹿にしよるわ。俺も何だか顔が鬱陶敷、顔の皮が、引つ張るやうだ。正鹿山津見さま、一寸私の顔を見て下さいナ」

「ヨー書いたりな書いたりな、しかも赤字で、五月姫に惚れて能う妬く男

ハ、ハ、ハ、ハ」

「ヤー夫れで讀めた。五月姫さま、濟まなかつた、宣り直しますよ。貴方私の顔

の字を見ただのだなア。私はまたお前さまが私の悪口を云うたのだと思つて一寸愛想に怒つてみた。心の底から決して決して怒つては居ないよ。量見して下さい」
蚊々虎「涙弱い奴ぢやなア、直に女とみたら目を細くしよつて、結構な男の頭をピヨコピヨコ下る腰抜男奴、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」
五月姫「皆さまのお顔に何だか赤いものが附いて居ますよ。妾の顔にも何か附いて居やしませぬか」

一同は手を打ちて、

「ヨ一秀逸だ、天上眉毛だ。それで幾層倍神格が上つたかも知れやしないワ」
五月姫は、

「ホ、ハ、ハ、ハ、ハ」

と笑ひながら袖にて顔を隠す。於滕山津見は襟を直し、容を改め儼然として、

「コラコラ蚊々虎、悪戯をするにも程があるぞよ。何だ、吾々一同の顔を知らぬ間に彩りよつて、吾々の顔は草紙でないぞ、ノートブックとは違ふぞ」

蚊々虎「私もチヨボチヨボだ。誰か腰の曲つた烏天狗でもやつて来て、悪戯をし

たのでせう。

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直せ

駒山彦「勝手に奴ぢやなア、都合が悪いと直に宣傳歌を歌ひよる。ホントに困つ

た男だ」

「實際の悪戯者はよう判明つて居る。いま此方さまが指の先で此人だとハツキリ指してやるから、此方さまの指の先の落ちて行く先を見て居るがよいワイ。今の

今の悪戯小僧は何處から来たか、東から来たか、西から来たか、南から来たか、
【きた】かきたか矢張り北ぢや、乾の隅の腰の屈んだ烏天狗のやうな、世界で一

の色男、蚊々虎さまが皆書いた、この鼻さまぢや
と、自分の鼻を押へて見せる。駒山彦も、

「俺も一つ書いてやる、蚊々虎そこに寝ぬか」

「後は明晩に悠然と伺ひませう」

「何故そんな悪戯をするのか」

蚊々虎は腕を捲り肩を怒らしながら、

「是には深い仔細がある。是から先の大蛇峠を越える時に、洞の周囲が嘘八百八

十八丈、身體の長は八百八十八萬里、尨大い大蛇に出會すのだ。夫で淤滕山津見

は怖い顔して見せる、正鹿山津見は赤い鼻をニユーと突き出して大蛇を笑はせ轉

ばすためだ。蚊々虎は天下第一の色男は「コンナ」ものぢやと大蛇の奴に見惚れさ

すのぢや。駒山彦は「デレ助」と云ふものはアンナ「シヤ」ツ面かと、大蛇に穴

の明くほど見詰めさすのだ。さうして天女のやうな五月姫を、何とまあ別嬪も有

るものぢやと見詰めさすのぢや。つまり魅を入れさすのぢや。大蛇に魅を入れら

れたら五月姫さまは助かりっこは無いわ」

駒山彦「ア、顔を洗うと云うたつて、水も何も有りやしない。御一同このまま水

のある所まで行きますせうか」

一同「仕方が無いなア、サア参りませう」
と草鞋脚絆に身を固め、さしもに嶮しき大蛇峠に向つて足を運びける。

(大正一一・二・一〇 舊一・一四 森良仁録)

第三十五章

一二三世(三八五)

樹々に嘯る百鳥の聲、眠氣なる油蝉の聲に送られて、夏の炎天を喘ぎ喘ぎ嶮し
き坂を登り行く。汗は瀧の如く流れ、彩られた顔はメチヤメチヤになつて赤い汗
さへ流るる無状さ。一行は汗を拭ひ拭ひ、漸くに山頂に達したり。山頂には格好
の岩が程よく散布されてありぬ。宣傳使一行は、各自に岩に腰打かけ息を休めた
り。

蚊々虎「ままになるなら此涼風を、母の土産に見たい」
駒山彦「オイ、蚊々虎、殊勝らしい事を云ふね。「ままになるなら此涼風を母の

土産みやげにして見みたい。随ずい分ぶん孝かう行かう者ものだなア。夫それほど親おや孝かう行かうの貴き様さまが放ほう蕩たうばかりや
よつて、兩りやう親しんに心しん配はいをかけ、子こがな無なうて泣なく親おやは無ないが、子このたために泣なく親おやは澤たく
山さんあるとか云いつてな、ソソンナ優やさしい心こころがあるのなら何な故げ親おやを放ほつたらかして其そこ邊らじ
中ちゆうを迂う路ろつき廻まるのだ。口くちと心こころと行おこなひと一いつ致ちせぬのは、神かみ様さまに對たいしてお氣き障ざはりだ
ぞ
□

人にん間げんの性せいは善ぜんだ。誰たれだつて親おやを思おもはぬ子こがあらうか。浮う世きよの波なみに漂ただはされて止や
むを得えず、親おや子こは四し方ほうに泣なき別わかれと云いふ悲ひ慘さんの幕まくが下おりたのだよ。親おや子こは一いつ世せ、
夫ふう婦ふは二に世せ、主しゅ従じゆうは三さん世せと云いふ相さうなからのう□

駒山彦こまやまひこは、

□ヘン、うまい事ことを云いひやがらア。親おやは如どう何うでも良よいのか、夫ふう婦ふは二に世せなんて、
死しんでまで添そうと思おもひよつて二に世せも三さん世せも夫め婦とだと思おもつて居をるから情なさけない。如いか何か
に五さつ月き姫ひめぢやとてお前まへのやうな腰こし屈まがりに、誰たれが心しん中ぢゆう立だてをするものかい□

蚊々虎かがとらは

□故郷ふるさとの空そら打うち眺ながめ思おもふかな、國くにに殘のこせし親おやは如いか何かにと□

駒山彦は

「オヤオヤ又出たぞ。何だ貴様、今日に限つて殊勝らしい事を竝べ立よつて、一角詩人氣取りになつて「ア、蚊々虎さまはああ見えても心の底は優しいお方だ。たとへ腰は曲つてもお顔は黒うても、男前はヒヨツトコでも、チツとくらゐ周章者でも、心の底のドン底には兩親を思ふ優しい美しい心の玉が光つて居る。アンナ人と夫婦になつたら嘸や嘸、圓満なホームが作れるであらう。おなじ夫を持つなら、あの様な優しい男と夫婦になつて見たい」などと五月姫さまに思はさうと思ひよつて、貴様よツぽど抜目のない奴だワイ。アハ、ハ、ハ、」

淤滕山津見は、

「ヤア感心だ、人間はさう無くてはならぬ、山よりも高く、海よりも深い父母の恩を忘れる奴は人間でない。お前もまだまだ腐つては居らぬ、頼もしい男だよ」

駒山彦は、

「オイ鼻を高くすな、貴様は直に調子にのる男だから餘り乗せられるとヒツクリ返されるぞ。天教の山ほど登らせておいてスツトコトントン、スツトコトンと落

される口だぞ。貴様、親よりも女房が大切だらう。親子は一世、夫婦は二世なぞと云ひよつて、之ほど大切な親よりも「五月姫殿、お前が女房になつたらモツトモツト大切にするぞ」と遠廻しにかけよつて、うまい謎をかけよるのだ。本當に巧妙なものだね」

蚊々虎はしたり顔にて、

「オイ、駒、貴様わけのわからぬ奴だナ。俺がいま宣傳してやるから尊い御説教を謹聽しろよ。親子一世と云ふ事は、何ほど貴様の様な極道息子の親泣かせでも、親が愛想をつかしてモウ之つきり親の門口は跨げる事はならぬ。七生までの勘當だと云つた處で、矢張り親子は親子だ。お前が俺に勘當するなら勘當するでよい、又外に親を持ちますと云つた處で生んで呉れた親は矢張り一つだ。親子は一世と云ふ事は、泣いても笑つても立つても轉んでも一度より無いのだ。それだから親子は一世と云ふのだ。斷つても斷れぬ親子の縁だよ。貴様の考へは大方生てる間は親子だが、死んで仕舞へば親でも無い子でもない、赤の他人だと云ふ論法だらう。ソナナ譯の分らぬ事で宣傳使が勤まるか」

駒山彦「能う何でも理屈を捏る奴だな、夫婦は二世とは何のことだい。親よりも結構だ、死んでからでも又互に手に手をとつて三途の川を渡り、蓮の臺に一蓮托生、百味飲食と夫婦睦じう暮さうと云ふ蟲の良いい考へだらう。さう甘くは問屋が卸すまい。貴様極樂に行つて、蓮の臺に小さくなつて夫婦抱合つて、チヨコナンと泥池の中で坐つて見い。どうせ碌な事はして居らぬ奴だから、貴様が金城鐵壁だ、お前と俺との其仲は千年萬年はまだ愚五十六億七千萬年の後の三口の世までも、お前と俺と斯うして居れば之が眞實の極樂だ、ナア五月姫さま、現界に居つた時は駒山彦の意地悪に随分冷かされたものだが、斯うなつちやア、もう占たものだ」なぞと得意になつてゐると、娑婆に残つて居る貴様の舊惡を知つた奴が噂の一つもせぬものでも無い。噂をする度に噓が出てその途端に、蓮の細い莖がぐらついて二人は共に泥池の中へバツサリ、ブルブルブル土左衛門になつて仕舞ふのだよ。一旦死んだ奴の、もう一遍死んだ奴の行く處は何處にもありはせない。さうすると又娑婆へ生れよつて、ヒュー、ドロドロ怨めしやいと兩手を腰の邊りに下向けにさげて出て來るのが先づ落だな。夫婦は二世だなぞとソナナ的の

無い事は、まあ云はぬが宜からう

蚊々虎々「エーイ、喧しい、俺のお株を取つて仕舞ひよつて、能うベラベラと燕の

親方の様に喋る奴だナ。この蚊々虎々さまの説教を謹んで聴聞いたせ。夫婦は二世

と云ふ事は、貴様の考へてる様な意味で無い。夫婦と云ふものは陰と陽だ。「鳴

り鳴りてなり餘れる處一處あり、鳴り鳴りてなり合はざる處一處あり、汝が身の

成り餘れる處を我身の成り合はざる處に、さしふたぎて御子生んは如何に」と宣

り給へば「しかよけむ」と應答し給ひきと云ふ事を知つてるかい。夫婦と云ふも

のは世の初めだ。誰の家庭にも夫婦が無ければ、圓滿なホームは作れないのだ。

さうして子を生むのだよ。其子がまた親を生むのだ

「オット待て待て、脱線するな。親から子が生れると云ふ事はあるが、子が親を

生むと云ふ事が何處にあるかい

「貴様、分らぬ奴だな。男と女と家庭を作つたのは夫は夫婦だ。そこへ夫婦の息

が合つて「オギヤ」と生れたのだ。生れたのが即ち子だ。子が出来たから親と云

ふ名がついたのだ。子の無い夫婦は親でも、何でもありやしない。此位の道理が

分らないで宣傳使になれるかい。さうして不幸にして夫が死ぬとか、女房が夭折するとかやつて見よ。子が出来てからならまだしもだが、子が無い間に女房に先だたれて仕舞へば、天地創造の神業の御子生みが出来ぬでは無いか。人間は男女の息を合して、天の星の数ほど此地の上に人を生み足はして、神様の御用を助けるのだ。そこで寡夫となつたり寡婦となつたり、其神業が勤まらぬから、第二世の夫なり妻を娶るのだ。之を二世の妻と云ふのだい。貴様の様に此世で十分イヤついで、又幽世に行つてからもイヤつかうと云ふ様な狡猾い考へとはチト違ふぞ。さうして二世の妻が、又もや不幸にして中途で子が出来ずに先に死んで仕舞つたら、夫はもう天命だと諦めるのだ。三回も妻を持つと云ふ事は、神界の天則に違反するものだ。それで「已を得ざれば」、「二人目の妻までは是非なし」、と云つて神様が御許し下さるのだ。其を夫婦は二世と云ふのだよ。あゝあ一人の宣傳使を拵へ様と思へば骨の折れる事だ、肩も腕もメキメキするワイ」

淤滕山津見は感じ入り、

「ヤア、蚊々虎は偉い事を云ふね。吾々も今まで取違をしてゐた。さう聞けばさ

うだ。正鹿山津見さま、如何にもさうですね。何でも無い事で氣のつかない事が、世の中には澤山ありますなあ。三人寄れば文殊の智慧とやら、イヤもう良い事を聞かして貰ひました。南無蚊々虎大明神」

駒山彦は、

「親子は一世、夫婦は二世、そいつは貴様の、オイ蚊々虎先生の懇篤なる、綿密なる、明細なる、詳細なる、正直なる……」

蚊々虎「馬鹿、人をヒヨットくるか、蚊々虎大明神だぞ」

「ヒヨットコ ヒヨットコ来る奴もあれば、走つて来る奴もあるワイ」

「困つた奴だなア、主従三世だ。今日から貴様は蚊々虎の家來で無いぞ」

「家來で無いもあつたものかい、誰が貴様の家來になつたのだ。ソナ法螺を吹かずに主従は三世の因縁を聞かして下さらぬかい」

蚊々虎「下さらぬかなら、云うてやらう。人に物を教へて貰ふ時には矢張り謙遜るものだ。【からだ】に徳をつけて貰ふのだからな。オホン、主従三世と云ふ事は、例へて云へば此蚊々虎さまは、もとは此處にござる淤滕山津見様が醜國別と

云うて悪い事計りやつて居る時に俺が家來であつた。然しコンナ主人に仕へて居つては行末恐ろしいと思つたものだから、如何かして暇を呉れて與らうと思つたのだ。さうした處がネツカラ良い主人が見つからぬのだ。探してゐる矢先に日の出神と云ふ立派な宣傳使が現はれたのだ。それで此方さまは、第二世の御主人日の出神にお仕へ申して居るのだ。さうして淤藤山さまは、蚊々虎々々と云つて家來扱ひをされても、俺の心は五文と五文だ。その代り一旦主人ときめた日の出神の前に行つた位なら、ドンナ者だ。臣節を良く守り、萬一日の出神様が俺の見當違ひで悪神であつたと氣がついた時は、其時こそ弊履を捨つるが如くに主人に暇を與るのだ。さうして又適當な主人を探して、それに仕へるのだ。それを三世の主従と云ふのだよ。三代目の主人は醜國別よりも、もつともつと悪い奴でも、もう代へる事は出来ない。そこになつたら、ア、惟神だ、因縁だと度胸を据ゑて、一代主人と仰ぐのだ。三回まで主人を代へ、師匠を代へるのは、止むを得ない場合合は神様は許して下さるが、其以上は所謂天則違反だ。主従四世と云ふ事はならぬから「主従は三度まで代へても止むを得ず」と云ふ神様が限度をお定めになつ

て居るのだよ。どうだ、駒、俺が嘸んでくくめるやうな御説教が、腸にしみこみたか、シユジユと音がして浸み込むだらう。賛成したか、それで主従三世だよ
一同は聲を揃へて、

「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

（大正一・二・一〇 舊一・一四 北村隆光録）

第三十六章 大蛇の背（三八六）

一同の宣傳使は、蚊々虎の面白き講釋に或は感じ或は笑ひ、其雄辨を口々に褒めちぎり居たる。折しも何處ともなく青臭い風がゾーゾーと音を立てて吹き來たりけり。

駒山彦は驚きながら、

「ヤア出よつたぞ。あの聲は大蛇の音だらう。吾々は一つ覺悟をせなくてはなら

ぬ。腹帯でも締めて行かうかい」

蚊々虎は、

「正鹿山津見さまが此山には大變な大蛇が居るなぞと、吾々の膽を試して見やうと思つて、嘘言ばかり云つたのだな。長いものと云つたら此處まで來るのに、蚯蚓一匹居やせなかつたぢやないか。マア、一つ此涼しい風を十二分に受けて、大蛇の來るやうに歌でも歌つて踊らうかい。大蛇山には蛇が居るぢやげな、大きな、大きな蛇ぢやげな、嘘言ぢやげな」

正鹿山津見「蚊々虎さま、吾々は苟くも天下の宣傳使、決して嘘言は申しませぬ。大蛇はかういふ木の茂つた處には居りませぬ。この峠を少しく下ると、山一面に茫茫たる草ばかりです。その草の生えた所へかかると、大きな奴が彼方にも此方にも、澤山に前後左右に往來して居ます。大蛇の王にでも出會さうものなら大變ですよ。マア道中安全のために神言を奏上しませう」

「それ【じゃ】蚊々虎の【じゃ】推でしたか」

駒山彦は、

「コラまた洒落てゐるナ、大蛇の峠を通行しながら、ソナ氣樂な事を云つて居るものがあるか。如何に口の達者な蚊々虎さまでも、實物に出交したら、旗を捲いて退却するに決つて居るワ」

蚊々虎は態と悄氣たやうな顔をして、

「さうかなア、此方さまは如何な敵でも恐れぬが、大蛇だけはまだ經驗が無いから、些と「おろちい」やうな氣がする。駒公、貴様今度は先に行け、此方は五人

の中央だ」

駒山彦「態見やがれ、弱蟲奴が」

と争ひつつ大蛇峠をどんどん東に向つて下る。駒山彦はどこともなくびくびく胸を躍らせながら、態と空元氣を出し、宣傳歌を歌つて、大蛇峠を下つて行く。その聲はどこともなく慄うて居る。蚊々虎は、

「オイ、お先達、その聲はどうだい、慄つてるぢやないか。半泣聲を出しよつて、ソナ聲を聞くと、大蛇先生、女だと思つて飛びつくぞよ」

駒山彦は首をスクメながら、

「ヤア、出た出た、ド豪い奴だ。アンナ奴がこの山道に横たはつて居ては、通る事は出来はしない」

と、どすんと道の傍に腰を据ゑる。蚊々虎は、

「どれどれ、俺が見てやらう」

と右の手を額にあて、

「ヤア、おい出たおい出た。素適滅法界に太い奴だ。向ふの山から此方の山まで、

橋を懸けた様になつて居よるなあ。こいつは面白い。ドツコイ尾も頭も黒い大蛇

峠。オイ駒さま、今日は一番槍の功名だ。毎度此方さまが先陣を勤めるのだが、

あまり厚顔しうすると冥加が悪い。今日は先陣をお前に譲つてやらう。サア立た

ぬか、ハ、腰を抜かして、胴の据わつとる駒山彦の宣傳使様か」

駒山彦は、

「ナ、何だか足が重たくなつて歩けませぬわ。蚊々君、頼みだ。お前へ行つて

呉れ」

「ドツコイさうはいかぬ、君子は危きに近づかずだ。飛んで火に入る夏の蟲だ、

アンナ長い奴にピンと跳ねられて見よ。それこそ吾々のやうな人間は、天に向つてプリンプリンプリンぢや。此方はプリンプリンとやられた機みに天教山までポイトコセーと無事の御安着だ。貴様達はお上りどすか、お下りだすかの口だよ」

淤藤山津見「刹那心だ、蚊々虎も屁古垂れたな。どれ私が責任を帯びて先陣を勤めませう」

と怯まず怖れず、どしどしやつて行く。大蛇の横たはる數十歩前まで淤藤山津見は進んだが、

「ヤア、あれ丈太い奴が居つては跨る譯にも行かず、飛び越える事も出来ず、これや一つ考へねばならぬなあ。蚊々虎妙案は無いか」

「有るの無いのつて、越えられるの越えられぬの、怖い怖くないの」
駒山彦「何方が眞實だい。越えるの越えられぬのと、どつちが眞實だい」

「まあ蚊々虎さまの離れ業を見て居なさい」
と云ひながら、大蛇の前に「つか」つかと進み、拳を固めて、大蛇の腹をポンポ

ンと叩きながら、

「オイ、オイ大蛇の先生、同じ天地の間に生を稟けながら、なぜ此様な見苦しい蛇體になつて生れて來たのだ。俺は神様の救ひを宣べ傳ふる貴き聖き宣傳使だ。貴様も何時までも此様な淺ましい姿をして深山の奥に住居をしてゐるのは苦からう。日に三寒三熱の苦みを受けて、人には嫌はれ、怖がられ、ホントに因果なものだ。俺は同情するよ。是から天津祝詞を奏上してやるから、立派な人間に一日も早く生れて來い。其代りに俺たち五人を背に乗せて、珍の國の都の見える所まで送るのだよ。よいか」

大蛇は鎌首を立て、兩眼より涙をぼろぼろと落とし、幾度となく頭を下げてゐる。「よし、分つた。偉い奴だ。此處に居る四人の宣傳使は盲目だから俺の素性を些とも知らないが、貴様は俺の正體が分つたと見える。よしよし助けてやらう」

大蛇は又もや兩眼より涙を垂れ、俯伏せになつて、早く乗れよと云ふものの如く、長き胴體を三角なりにして待つて居る。

蚊々虎は手招きしながら、

「オイ皆の奴、ドツコイ皆の先生方、早く乗つたり乗つたり。随分足も疲勞たらう。大蛇先生、吾々一行を珍の國の都近くまで、送らして下さいと頼みよつたぞ。サア早く早く乗りなさい。乗り後れるとつまらぬぞ」

一同は舌を巻いて、何とも彼とも云はず、呆然として佇立み居る。五月姫は、御一同様、どうでせう、乗せて頂きますせうか」

駒山彦は呆れて、

「これはこれは大膽な女だなあ。アンナものに乗せられて耐るものか」

蚊々虎は、「ひらり」と大蛇の背に飛び上り、手を振り足を踊らせて、平氣の平左で宣傳歌を歌ひ出す。五月姫は「つか」つかと走り寄つて大蛇の背に「ひらり」と飛び上りける。

駒山彦「ヤア女でさへもあの膽玉だ。エイどうならうと構ふものか。皆さま如何

でせう、乗つてやりませうか」

於藤山津見「よからう、正鹿山さま、如何でせう」

正鹿山津見「イヤ私も乗りませう」

と茲こゝに五人ごにんの宣傳使せんでんしは、大蛇をろちの背せに飛とび乗りたり。

蚊々虎かがとらは、

☐ サア大蛇をろち大急行だいきふかうだ。走はしつたり走はしつたり。

大蛇だいじやの背せなに乗のせられて 【じや】推すゐの深ふかい【じや】神しんらが

如何どう【じや】斯かう【じや】と案あんじつつ 珍うづの都みやこへ走はしり行ゆく

大蛇だいじやに乗のつた蟆蛙ひきがへる 躰やがては珍うづの都みやこまで

引ひかれて歸かへる蟆蛙ひきがへる ホントに愉快ゆくわい【じや】ないかいな☐

蚊々虎かがとらは出放題ではうだいに歌うたひゐる。大蛇をろちは蜒々えんえんと、前後左右ぜんごさいうに長大ちやうだいなる身體しんたいを振動ふりうごかしながら、勢いきほひよく山やまを下くだり行ゆく。

(大正一一・二・一〇 舊一・一四 加藤明子録)

(第三二章) 第三六章 昭和一〇・三・四 於綾部穹天閣 王仁校正)

第三十七章 珍山彦（三八七）

大蛇の背に乗りたる宣傳使一行は、一瀉千里の勢で山麓に下り行きたり。

駒山彦は得意顔にて、

「ヤア、馬には乗つて見い、人には添うて見い、大蛇には跨つて見いだな。杏よりも桃が易い。割りとは樂に來たよ。コンナ事なら、これから大蛇に遇うても一寸も怖くは無い。この行く先々に、山へかかれば的さんがやつて來て呉れると、本當に重寶だね」

蚊々虎は、

「大蛇どの、もうよろし、ここでオロチて下さい」

見れば五人の宣傳使は、廣き芝生の上に下され居たり。そして大蛇は影も形も見えなく成り居たりける。

駒山彦「なんだ、夢だつたらうかな。現に今、大蛇に乗つた積りだつたのに、此の様な芝生の上に坐つて居るとは、一體全體駒山には譯が分らぬわい」

「神變不可思議の神業だ。三五の教には、ドンナ結構なお方が落魄れて御座るか
も知れぬから、必ず侮ることは成らぬとあるだらう。この蚊々虎さまは此様に粗
末に見えても立派な神様だぞ。化けて御座るのだよ。それだから大蛇で有らうが、
何であらうが、宇宙一切のものは、この蚊々虎さまの一言で自由自在になるのだ。
風雨雷霆を叱咤し、天地を震動させるのも、吾々が鼻息一つで自由自在だぞ」
駒山彦「また始まった。オイ、もう吹くのは止めて呉れぬか。お前の二百十日に
は駒山彦だよ」

「淤藤山津見はアフォンとして、

「合點の往かぬは蚊々虎の神力だ。ヒヨツとしたら、此奴はお化けかも判らない
ぞ」

「正鹿山津見「お化けでも何でも宜いぢやありませんか。あの様な大きな大蛇を自
由自在に使用なんて吾々は到底、目から火を出して氣張つた處で、石龜の地團太
だ。物には成らない、偉い方ですね。正鹿も感心しましたよ」

五月姫も、

「ほんたうに感服しましたわ」

駒山彦はシヤシヤリ出で、

「妾、ほんたうに感服しましたわ」と、仰有りますワイ。蚊々虎さま、お目出度う」

淤滕山津見も、

「今日まで蚊々虎々々々と言つて居たが、こりや何うしても宣り直さなくちやいけない。何とか名をあげませうかな」

正鹿山津見も呆れて、

「さうだなあ、大蛇を使った神力に依つて大蛇彦と命名たら何うだらう」
大蛇彦は御免だ。珍山彦だ。珍山彦と言つて貰ひたいね」

淤滕山津見も、

「ヤア、それは本當にいい名だ。それなら是れから、珍山彦様と申上げるのだね」

蚊々虎「尤も、尤も。蚊々虎を改名しますよ」

五月姫さつきひめ「ホ、ホ、ホ、なんと【はんなり】としたいいいお名なですこと、妾わたし、蚊々虎かがとら

さまより、珍山彦うづやまひこ様の方が氣持きもちちが宜よろしいわ」

駒山彦こまやまひこは口くちを尖とがらして、

「ホ、ホ、ホ、ホ、なんといい名なだこと、妾わらは、蚊々虎かがとらさまより、駒山彦こまやまひこが好きだわ」

とおいでたな、とは言いはぬ「珍山彦うづやまひこ様の方が好すきだわ」へん、馬鹿ばかにしてらあ」

正鹿山津見まさかやまづみは、

「御一同様ごいちどうさま、話はなしは途々みちみちうかが伺かひませう。はるか東方とうほうに當あたつて小高こたかき森もりがひませう。

そこに田螺たにしをぶちあげた様やうに小ちひさき家いえが澤山たくさんに竝ならんで居ゐませうがな。彼あの邊へんが珍うづ

の都みやこです。サアもう一息ひといきだ。私わたくしの宅うちまで御足勞ごそくらうになつて、悠々ゆるゆると休息きうそくいたしませ

うかい。都みやこ近ちかくなつた祝いはひに、此處ここで一ひとつ神言かみごとを奏上そうじやうし、宣傳歌せんでんかを歌うたひながら參まゐ

りませう」

と一同いちどうは芝生しばふの上うへに端坐たんざし神言かみごとを奏上そうじやうし終をはつて、宣傳歌せんでんかを歌うたひつつ都みやこを指さして進すす

み行く。

正鹿山津見まさかやまづみは唄うたふ。

巴留の都を後にして

涼しき風に煽られて

樹々の梢の紅葉の

身魂も清き宣傳使

千引の岩に夜を明し

峠を越えて五柱

漸うここに月の空

この高砂の神島は

花の都も近づきて

神が表に現はれて

この世を造りし神直日

大野ヶ原を右左

向ふに見ゆる白壁は

ただ何ごと人も人の世は

汗水垂らす夏の山

心は秋の如くなり

色にも勝る村肝の

珍山峠を乗り越えて

仰ぐも高き天雲山の

大蛇の船に乘せられて

月照彦の鎮まりし

神の選みしうづの國

心の駒は勇むなり

善と悪とを立別る

心も廣き大直日

眺めて通る心地よさ

珍の都のわが住家

直日に見直せ聞き直せ

蚊々虎さまの名前さへ

珍山彦と宣り直し

天津御神の貴の御子

大御寶と現はれて

世界を開く宣傳使

淤滕山津見や五月姫

勇む心の駒山彦や

夏の眞盛り正鹿山

津見の命の五人連れ

誠の神に救はれて

漸う都へ着きにけり

やうやう都へ着きにけり

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

誠の神の教へたる

三五教は世を救ふ

救ひの神と現はれし

嚴の御魂の五柱

瑞の御魂の月の影

盡きぬは神の御恵ぞ

盡きぬは神の御恵ぞ

と節面白く歌ひながら、漸く一行の宣傳使は正鹿山津見の館に着きにける。

駒山彦は、

「ヤア、宣傳使の住居にしては贅澤な構へだね」

珍山彦「決つたことだよ。珍一國の守護職だもの、當然だ」

門内よりは、數多の下僕蒼惶しく走り來り、

「これはこれは御主人様、ようこそお歸り下さいました。皆の者が、もう今日はお歸りか明日はお歸りかと、首を伸ばしてお待ち申して居りました。サアサアお疲れでせう、早くお休み下さいませ。ヤア、これはこれは、何れの方が知りませぬが、よく送つて來て下さいました。何卒悠くりと湯でも飲つて、寛いで下さいませやうに」

正鹿山津見は、

「オー、國彦か、よくまあ留守を仕て呉れた。御苦勞であつたな。イヤ、御一同様、見苦しき荒屋で御座いますが、どうぞ御遠慮なくお上り下さいませ」

淤滕山津見も、

「仰せに従ひ遠慮なく休まして貰ひませう」

と、正鹿山津見の後に隨いて、奥の間にドツカと安坐したり。

國彦は恭しく湯を沸かして持ち來り、

「ヤー、御一同様、山道と云ひ、この頃の暑さと云ひ、嘸お疲勞でせう。承はれば、主人も偉いお世話になられたさうで御座います。よくまあ生命を助けてあげて下さいました。今お湯がすぐに沸きますから、どうぞ悠くりと湯浴でもして、お寛ぎ下さいませ」

と、挨拶を終つて、部屋の方へ姿を消す。

四人の宣傳使は打ち解けて、岩上に一夜を明かし、惡戯をされた事やら、大蛇に出會した時の感想を語り、面白可笑しく「さざめ」き居たり。

襖を開けて、正鹿山津見は、

「どうやらお湯が沸きました様です。皆さま何うでせう。一緒に這入りませうか」
珍山彦「そら面白からう、一緒に願はうかい」

「どうかこちらへ」

と、先に立つて行く。一同は浴槽の側に衣服を脱ぎ捨て、バサバサと一度に飛び込みぬ。

珍山彦は、

「ヤアヤア、湯に入つた気分はまた格別だね。湯々自適とはこのことだ。【ゆ】はぬは【ゆ】ふにいや勝る。【ゆ】うて見ようか【ゆ】はずにおこか。【ゆ】はな矢張り蟲が【ゆ】ふ」

駒山彦「そら貴様何を【ゆ】ふのだ。湯快さうに自分一人【はしやい】で」

「それでも湯快だよ。湯ぐらゐ結構なものはないぢやないか。お前は何と【ゆ】ふことを【ゆ】ふのだ」

と珍山彦、駒山彦の二人は湯の中で擲揄ひながら、やや暫し汗を流して、一同と共に湯を上り、元の間に引き返し見れば、山野河海の珍味佳肴が竝べられてゐたり。一同はその厚意を感謝しながら、漸く夕餉を済ませける。

正鹿山津見を中心に、國魂の神を祀れる神前に向つて、天津祝詞を奏上し、宣傳歌を歌ひ了つて樂しみ話に耽り、その夜は疲勞れはて、何れもよく熟睡し、明る日の八つ時に各自目を醒まし、又もや四方山の話に耽り居たり。

(大正一一・二・一〇 舊一・一四 東尾吉雄録)

第三十八章 華燭の典（三八八）

一同は國魂の神前に神言を奏上し、讚美歌を唱へ終つて休息してゐた。正鹿山

津見は襖を押開け入り來り、

御飯が出來ました。どうぞ御上り下さいませ。何分長らく留守に致して置きま

したのと、家内がないので不行届き、不都合だらけですけれど

と挨拶を述べ、この場を立ち去りぬ。

珍山彦 皆の方々、今承はれば正鹿山津見様は女房が無いと云ふ事だ。一國の守

護職として宣傳使を兼ねられた急がしい身體、肝腎の女房が無いとは氣の毒でな

いか。一つ珍山彦が奥様を御世話しようと思ふが如何でせうな

駒山彦は膝をのり出し、

それは結構だな。適當の候補者の見込みがあるのかい

「あらいでか、確にあるのだ。吾々の御世話したいのは、女宣傳使の五月姫だよ。

ナア五月さま、貴方は珍山峠の麓の岩の上で、正鹿山津見さまは誠に男らしい、

立派な御顔付きの方だと云うて居ましたね、御異存はありますまい」

五月姫は黙つて袖に顔を隠す。駒山彦は言葉せはしく、

「そらいかぬ。お人が違ふではないかな。貴様はあれ丈け惚れてゐたではないか。

俺は貴様の奥さまに世話したいと思つてゐたのだ。ソナ遠慮は要らぬ。遠い所

から「くす」ぐるやうに謎かけをせず、「五月姫殿、珍山彦の女房になつて下

さい」と、男らしくキツパリと切り出したら如何だい。奥齒に物の詰つたやうな

事を言ひよつて、何處までも圖々しう白くれる男だな」

「このはな」さまは故あつて女房は持ぬのだ。それ丈は忪へて呉れ。餘り俺が

洒落るものだから、本當にし居つて痛うない腹を探られて迷惑だよ。さうぢやと

云つて、此の可愛らしい五月姫が嫌ひだと云ふのでは無い。好きの好きの大好き

だが、女房を持れぬ因縁があるのだよ」

「オイ蚊々虎、ドッコイ珍山彦、その因縁を聞かうかい」

「お前に聞かせるやうな、因縁なら何に隠さう。こればかりは忪へて呉れ。俺は

未だ未だ重大なる任務があるのだから」

淤滕山津見は、

「ヤア珍山さま、貴方の事は何うしても吾々は合點が往かない。丸切り天空を翔る蛟龍の如く、千變萬化捕捉すべからずだ。もう何事も言ひませぬ。貴方の御意見に任して五月姫さまを、此家の主人の奥様に推薦したいものですな」

珍山彦は、

「どうか貴方も御同意ならば、正鹿山津見さまに一つ掛合つて見て下さいな」

淤滕山津見は「よろしい」といつて其の場を立ち一室に行つた。

五月姫は顔を赤らめて俯向いてゐる。駒山彦は、

「これこれ五月さま、女にとつて一生の一大事、俯向いてばかり居つては事が分らぬ、珍山さまにするか、正鹿山津見さまにするか、右か左か返答しなさい。御意見あらば吾々に、隔ても何も無い仲だ、キツパリ云つて下さい。萬々一兩人の御方が氣に入らねば、外に候補者も無いことはありませんせぬよ。コーと云ふ頭字のついた人を御世話致しませうか」

珍山彦は駒山彦の顔を眺めて、

「ウフ、ハ、ハ、」

五月姫は漸くに面を上げて、

「ハイハイ、正鹿山津見さまさへ御異存無くば」

珍山彦は手を拍つて、

「お出でたお出でた、願望成就、時到れりだ。ヤア、さすがは五月姫殿、天晴れ

天晴れ、よう目が利いた。夫れでこそ天下の宣傳使だ。思ひ立つたを吉日に、今

日婚禮の式を挙げませう」

駒山彦は、

「コラコラ、珍山彦、一方が承知したつて、一方が何う云ふか判りはしない、鮑

の片想ひかも知れないのに、よく周章てる奴だな」

珍山彦「なに大丈夫だよ。猫に鯉節だ、狐に鼠の油揚げだ、二つ返事で喰ひつき遊

ばす事は、請合ひの西瓜だ、中まで眞赤だ。コレコレ五月姫さま、貴方も今まで

は押しも押されもせぬ一人前の女だ、男も女も同じ権利だった、言はば男女同権。

しかし今日から結婚したが最後、夫に随はねばならぬ。夫唱婦従の天則を守り、

主人しゅじんによよう仕つかへ、家いへの中なかを治をさめて行ゆくのが貴あなた女の役やくだよ。男だんぢよ女どうけん同どう權けんでも、夫ふう婦ふう同どう權けんでないから、それそれを忘わすれぬやうに賢けん妻さい良りやう母ぼの鑑かがみを出だして、三あな五なひ教けうの光ひかりを天てん下かに現あらはすのだ。廣ひろい世よの中なかに夫をととと妻つまとなるのも深ふかい深ふかい因いん縁ねんだ、神かみ様さまの御おひ引き合あせだから、決けつして氣き儘ままを出だしてはいけませぬぞ。私わたしが珍うづ山やまた峠つげで御お話はなししたやうに、どうぞ「この花はな」婿むこを大たい切せつにして蓮はすの臺うてなに末すゑ永ながう、必かなず祝は姫ひめの二にの舞まひを踏ふまぬやうにして下ください。頼たのみます」

五月さつき姫ひめは涙なみだをボロボロと零こぼしながら、

「ハイ、何なにから何なにまで、貴あなた方の御ご親しん切せつは孫まご子の時じ代だいは愚おろか、五み六ろく七しちの世よまで決けつして忘わすれは致いたしませぬ。貴あなた方の御ご教けう訓くんは必かなず固かたく守まもります。御ご安あん心しんして下くださいませ」
「ナント珍うづ山やま、貴き様さまは變へんな男をとこだねー。ホニ合が点つてんのゆかぬ男をとこだ。コンナ別べつ嬪びんを人ひとにやるなどと、ナントした變へん人じんだらう。が併しかし感かん心しんだ。この駒こま山やまだつたら迎むかへも其そ處こまで身み魂たまが研みがけて居をらぬからな」
斯かく話はなす折をりしも、淤おど滕やま山まづみ津み見みは正まさ鹿か山やま津まづみ見みを伴ともひ、この場ばに現あらはれ叮てい嚙ねいに辭じ儀ぎをしながら、

「御一同様、いろいろと御世話になつた上、今度は結構な御世話を下さいまして有難う。御恩の返し様は、もう御座りませぬ」
と感謝の意を漏した。

珍山彦は、

「あゝ結構々々、それで安心して吾々も宣傳に参ります。どうぞ幾久しく夫婦仲好くして此の神國を永遠に治めて下さい。一朝事ある時は、夫婦諸共神界の御用に立つて下さい」

と日ごろ快活な男に似ず、聲を曇らして嬉し涙を零し居たり。

淤滕山津見は、

「ヤア、斯く話が纏まつた上は、善事は急げだ。早く神前結婚の用意にかかりませうか」

茲に一同は家の子郎黨と共に、盛大なる結婚の式を擧げける。一同は直會の宴にうつり、各手を拍ち歌を歌ひ、感興湧くが如き折しも、番頭の國彦は襖を開いて、

「御主人様に申し上げます。只今エルサレムの聖地から松代姫、竹野姫、梅香姫の三人の御嬢様が、「御父様の住家は此處か」と云つて、一人の供を伴れて御出でになりました。如何が取計らひませうか」

正鹿山津見は驚きながら、

「あゝ嬉しいことが重なるものだな」
一同手を拍つて、ウローウロー。

附言

正鹿山津見は、聖地エルサレムの天使長であつた桃上彦命である。兄廣宗彦命、行成彦命の神政を奪ひ、體主靈従の限りを盡し、地の高天原は爲に混亂紛糾の極に陥り、その妻は病死し、自分は常世彦、常世姫のために、或一時の失敗より追放され、三人の娘を後に残して住み慣れし都を後に、一つ島に進む折しも、暴風に逢ひ船は忽ち顛覆し、琴平別の龜に救はれ龍宮城にいたり、門番となり果てし折しも、日の出神に救はれ、この珍の都の守護職となれるなり。

この事を三人の娘は、神夢に感じて遙々此處に尋ね來たり。黄泉比良坂の坂の

上うへに於おいて、黄泉軍よもついくさを待まち討うち給たまひし伊奘諾命いざなぎのみことの三さん個この桃ももの實みは、即すなはち桃上彦命ももがみひこのみことの
三人さんにんの娘むすめの活くわつどう動どうを示しめされたるなり。

(大正一一・二・一〇 舊一・一四 外山豊二録)

第六篇 黄泉比良坂よもつひらさか

第三十九章 言靈解げんれいかい一 (三八九)

故かれここに伊奘諾命いざなぎのみこと詔のり給たまはく「愛うつつくしき我が那邇妹命なにものみことや、子この一ひとつ木けに易かへつ
るかも」と宣のり給たまひて、御枕みまくらべに匍匐はらばひ御足みあとべにはらばひて、泣なき給たまふ時ときに、御みな
涙みだに成なりませる神かみは、香山かぐやまの畝尾うねをの木この下もとにます、御名みなは泣澤女なきさはめの神かみ、故かれ其その神かむ

去りましし伊奘册神は、出雲の國と伯伎の國との堺、比婆の山に葬しまつりき」
伊奘諾命は即ち天系靈系に屬する神でありまして、總ての萬物を安育するため
に地球を修理固成されました、國常立尊の御後身たる御子の神様でありますが、
古事記にある如く、迦具土神が生まれまして、即ち今日は、交通機關でも、戦争で
も、生産機關でも火力ばかりの世で、火の神様の荒ぶる世となつたのであります。
この火の神を生んで地球の表現神たる伊奘册命が神去りましたのであります。こ
の世の中は殆ど生命がないのと同じく、神去りましたやうな状態であります。
そこで伊奘諾命は我が愛する地球が滅亡せむとして居るのは、迦具土神が生れ
たからであるが、火力を以てする文明は何程文明が進んでも、世の中がこれでは
何にもならぬ。地球には換られぬと宣らせ給はつたのであります。これが「子の
一つ木に易へつるかも」といふ事でありませぬ。
次に「御枕べに匍匐ひ御足べにはらばひて」といふことは、病人にたとへると
病人が腹這ひになつて死んだのを悔む如く、病人と同じく横になつて寢息を考へ
たり、手で撫でて見たり、又手の脈をとつて見たり、足の脈をとつて見たり、何

處か上の方に生た分子がないか、頭に當る所に生氣はないか、日本魂が未だ残つては居ないかと調べ見給ひし所殆ど死人同様で上流社會にも、下等社會にも脈はなくて、何處にも生命はなくなつて居る。全く今日の世の中はそれの如くに暖かみはなく冷酷なもので、然も道義心公德心が滅亡して了つて居るのであります。それで泣き悲しみ給ふ時に、その涙の中に生りませる神の名を泣澤女神というて、これは大慈大悲の大神様が、地上一切の生物を憐み玉ふ所の同情の涙と云ふことであります。今日でも支那の或地方には泣女といふのがあつて、人の死んだ時に雇はれて泣きに行く儀式習慣が残つて居るのも、これに起源して居るのであります。

神去りました伊奘册命は、之を死人にたとへて出雲の國と伯耆の國の境に葬むられたと書いてあります。出雲といふのは何處もといふことで亦雲出る國といふことである。

今日の如く亂れ切つて、上も下も四方八方、怪しい雲が包んで居るといふ事があります。伯耆の國といふのは、掃きといふことで雲霧を掃き拂うと云ふことで

ある。科戸の風で吹拂うと云ふのもさうであります。即ち國を淨める精神と、曇らす精神との堺に立たれたのであります。所謂善惡正邪の分水嶺に立つたものであります。實に今の世界は光輝ある神世の美はしき、樂しき黄金世界になるか、絶滅するか、根の國底の國、地獄の世を現出するかの堺に立つて居るのであります。

「比婆の山に葬し」といふ事は「ヒ」は靈系に屬し、赤い方で、太陽の光線といふ意義で「バ」と云ふのは、「ハ」と「ハ」を重ねたもので、これは悪いことを指したものであります。即ち靈主體從と體主靈從との中間に立て、神が時機を待たせられたと云ふことであります。斯くして伊奘册命即ち地球の國魂は、半死半生の状態であるが、併し天系に屬する伊奘諾命は純愛の御精神から、此地球の慘状を見るに忍びずして、迦具土神即ち火の文明が進んだため、斯うなつたといふので、十拳劍を以て迦具土神の頸を斬り給うたのであります。十拳の劍を抜くと云ふ事は、戰爭を以て物質文明の惡潮流を一掃さるる事で、所謂首を切り玉うたのであります。

この首といふことは、近代でいへば獨逸のカイゼルとか、某國の大統領とか云ふ總ての首領を指したのである。即ち軍國主義の親玉の異圖を破滅せしむる爲に、大戦争を以て戦争の惨害を悟らしむる神策であります。

是に伊邪那岐命、御佩せる十拳劍を抜きて、其御子迦具土神の御頸を斬り給ふ。爾に其御刀のさきにつける血、湯津石村にたばしりつきて、成りませる神の御名は、石拆神、次に根拆神、次に石筒之男神、次に御刀の本につける血も、湯津石村にたばしりつきて成りませる神の御名は、甕速日神、次に槌速日神、次に建御雷之男神、亦の御名は建布都神亦の御名は豊布都神、次に御刀の手上にあつまる血、手俣より漏れ出で成りませる神の御名は闇於加美神、次に闇御津羽神

十拳劍即ち神界よりの懲戒的戦争なる神劍の發動を以て、自然に軍國主義の露國や獨乙を倒し、カイゼルを失脚させ、そのとばしりが湯津石村にたばしりついたのであります。この湯津石村につくといふことは、【ユ】とは夜がつづまつたもので、【ツ】は續くのつづまつたもので、要するに夜ル續くといふことになり、彼方からも此方からも、草の片葉が言問ひを致しまして、彼方にも此方に

も、種々の暗い思想が勃發して、各自に勝手な主義なり意見なりを吐き散らし、
して過激主義だとか、共産主義だとか、自然主義、社會主義がよいとか、專制主
義がよいとか、いろいろなことを言ふ意味になります。又「イハ」といふことは、
堅い動かぬ位といふことで、「ムラ」は群がるといふ意義で、岩とは尊貴の意、
村とは即ち下の方の人間の群といふことであります。所謂「タバシリツク」とい
ふのは、鳴り續いて上にも下にも種々雑多の思想や主義が喧傳されて居ることで
あります。即ちたばしりついて生りませる神といふのは、生れ出ることではなく
して、鳴り鳴りて喧ましいといふ事であります。その神の御名を甕速日神といふ。
【三】は體、【カ】は輝くといふことで、體主靈従の神であります。桶速日神
は靈主體従の神であつて、兩者より種々なる思想の戦ひが起るといふ事でありま
す。即ち主義の戦ひであります。次に建御雷之男神は、直接行動と云ふことで、
靈主體従國は言向平和神國であるから、滅多にありませぬが、體主靈従國などは
皆々建御雷之神であります。即ち露國のやうに、支那のやうに皇帝を退位せしめ
たり、すべて亂暴をするとか、焼討をするとか、暴動を起すとか、罷業、怠業す

るとかいふ如うな事でありませう。

建御雷神は天神の御使でありますが、本文の言靈上から考ふれば、爰はその意味にはとれぬ、争亂の意味になるのであります。亦の名は建布都神、又は豊布都神といふのは善と惡の方面を指したもので、凡て善惡美醜相交はるといふことになりませう。即ちよき時には苦しみが芽出し、苦しみの時には樂みが芽出して居るといふやうなものであります。

世の中が混亂すればする程、一方に之を立直さむとする善の身魂が湧いて來るといふ意味であります。

十拳劍を握つて居らるる鐔元に集まる血といふのは、各自に過激な思想を抱いて居るといふ事で、血を湧かす事でありませう。即ち手の「また」から漏れ出ることになります。この手の「また」から漏れ出ると云ふ事は、嚴重な警戒を破つて現はるる事でありませう。闇於加美神といふことは、世界中の上の方にも非常な過激な思想が現はれるといふことであります。

次に闇御津羽神の「みつ」といふのは、水でありまして、下の方即ち民のこと

で、これも無茶苦茶な悪思想になつて、世の中が益々闇雲になるといふことでもあります。

この昔の事を今日にたとへて見ますと獨逸のカイゼルが失脚したのも、露國のザーが亡んだのも、支那の皇帝があなつたのも、皆天の大神が十拳劍を以て斬られたのであります。斯の如く神は無形の神劍を以て斬られるのであります。それで人間が戦ふことになるのであります。この殺された迦具土神のことを現代にたとへますれば、爆弾とか大砲とか、火器ばかりで戦ふのであります。弓とか矢で戦ふのではありませぬ。軍艦を動かすのも火の力であります。それで大神に依て火の神が殺されたといふことは、慘虐なる戦争が止んだといふことになるのであります。今回の五年に亘る世界戦争の結果は、迦具土神の滅亡を意味してゐるのであります。

(大正九・一一・一 於五六七殿講演 外山豊二録)

(大正一一・二・一〇 舊一・一四 谷村眞友再録)

人類は平等に天の恵を享くるといふ説で、階級撤廢なぞといふ思想が起るといふ事でありませぬ。

次に『御胸に成りませる神の御名、淤滕山津見神』の胸といふのは、人間の身體にたとふれば、心臓や肺臓や乳の邊で、政治家でいへば、大臣とか、親任官とか、勅任官などが胸であります。即ち是等の人々の思想が書いてあるのであります。下から種々な思想上の戦争が起つて、それに胸を痛めて、おどおどして居るから軍隊や、警察の力で壓迫脅威するといふ意味になります。

次に『御腹に成りませる神の名、奥山津見神』といふのは、國民の中堅即ち中流社會といふことで、人體にたとふれば臍に當るのであります。

【オ】は心、【ク】は組むとか、苦しむとかいふ事で、中流階級は中央に立つて、何うしたらよからうかと云うて、苦んで居るのであります。即ち保守主義でも行かず、新しい主義でも行かず、その中を採つて、うまくやりたいといふ言靈上の意味になるのであります。

次に『御陰に成りませる神の名、閻山津見神』といふのは、【ほと】は農業に

従事する民で、人體にたとふれば陰部に當りまして、子を産み出す所であります。即ち農家といふことになりす。この百姓は現在如何なる思想があつて、その意味が何であるかわからず、指導者に依つて如何でもなることを意味して居るのであります。全く時の勢に依つて何方にもつく無定見な思想が閻山津見神といふことになりす。

次に「左の御手に成りませる神の名、志藝山津見神」の、この左の手といふことは上の方の手といふことで、即ち政治家で、右の手は實業のことになります。總て政治家は神の左手の役、實業家は右の手の役で、右の手で仕事をして、左の手で治めることになるのであります。志藝山津見神の【シ】は水で、【ギ】は神と國と重なりたる意味であります。さうすると政治家は精神文明に氣がつかずに、精神教育よりも、物質の方に重きを置くといふ意味になります。今日は到る所に排日思想が起つて居りますが、この思想の問題は思想で抑へつけなければならぬのに、貿易の上にも壓迫を受け、軍備も彼方はよく整へて居るとなりす、此方にも日本なれば八々艦隊を造つたり、陸軍を増たりして、國を護らうとして居

る考への盛んな時のことを志藝山津見神といふのであります。

次に「右の御手に成りませる神の御名、羽山津見神」といふのは、下々の百姓や労働者、實業家を指したものであります。即ち戦争が起れば人氣が悪くなるかも知れぬが米が高くなつたり、物價が騰つたりするから、米を貯へて置いて儲けてやらうとか、又澤山品物を仕入れて置いて一儲けしようとか、如何したら金が儲かるかと云ふことばかりを考へて居る。實に下の人民の眞心が、亂れた利己主義といふことになります。

【八】は開くといふことであります。【八ヤマツミ】と続きますと、何か變動が起れば儲けたいと云つて考へこむ意味で、即ち大火事があれば材木が騰るから、今の中に之を仕入れてやらうとか、饑饉が來て百穀實らず、不作であつたら今の間米を澤山買込んで置いて一儲けしようとか、實に不都合な利己主義にかぶれて、何事か變動を待つて居る魂を、羽山津見神といふのであります。

次に「左の御足に成りませる神の名、原山津見神、右の御足に成りませる神の名、戸山津見神」といふのは、この足は海外へ發展する考へを持つ人の事で、海

外へ行くなから外國の思想を研究して來てやらう、外國は眞の文明國だ、わが國は未開國だ。向方の國と親善をして談笑の裡に、國際間の紛擾を都合よく解決をつけたいといふ、即ち西洋文明に憧憬て居る、總ての學者の説が、左の足の原山津見神であります。

「トヤ」といふのは外に開くといふことで、この戸山津見神は、移民とか、出稼とかいふ事で、外國に移民を送るとか、外國は外國で移民排斥とか、種々の大問題が勃發する事で、丁度今日の世の中によく似て居るのであります。この移民といふことは、神代では何ういふ事を示されたものか判りませぬが、斯ういふ風に言靈的豫言が示されて居るのであります。即ち吾が同胞が遠國の空で、排日のために悔し残念を耐へて、言ふに言はれぬ苦勞をして居るのに國民が冷淡であるとか、政府は何をして居るかというて、反對やら、不平やらを持出す、其の状態を戸山津見神といふのであります。

是に其妹伊奘册命を相見まく欲して、黄泉國に追往でましき。爾ち殿騰戸より出向へます時に、伊奘諾命語詔ひたまはく、愛くしき我那邇妹命、吾汝と作れり

し國未だ作り竟へずあれば、還りまさねとのりたまひき、爾に伊奘册命の答曰し
たまはく、悔しきかも、速く來まさずて吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛くしき、
我那勢命入來ませる事恐れければ還りなむを。且く黄泉神と相論はむ。我をな視た
まひそ。如此白して其殿内に還り入りませる間甚久しくて待ちかねたまひき。故、
左の御美髮に刺させる湯津津間櫛の男柱一箇取闕きて、一火燭して入見ます時に、
蛆集り盪きて、御頭には大雷居り、御胸には火雷居り、御腹には黒雷居り、御陰
には拆雷居り、左の御手には若雷居り、右の御手には土雷居り、左の御足には鳴
雷居り、右の御足には伏雷居り併せて八の雷神成り居りき」
この御言葉は地球上の靈魂なる大國魂の守護が悪いから、斯うなつたのであり、
火の文明即ち物質文明の慘毒の爲に斯の如く世界が殆ど滅亡に瀕したのでありま
す。

伊奘諾命は靈で、伊奘册命は體であります。この世の中は靈ばかりでもいけな
い、即ち靈肉一致でなければならぬのであります。我日本は靈主體從の教を以て、
世界の國魂を生かし、世界萬民を安育させて行かねばならぬ國であります。世界

を道義的に精神文明の徳澤を以て、全地球一切を愛撫すると曰ふ至仁至愛の大御心から、日の大神が地球を完成し玉ふ爲に、伊奘册命に會見を申込み、遙々と御降りになつた事であります。

「其の妹伊奘册命を相見まく欲して黄泉國に追往でましき」といふ、この黄泉國は死後のことをいうたのでなくして、今日の全世界の狀態が黄泉國であります。そこで天から、本當の神様が下つて來て岩戸の騰戸をば少し開いて見られたのであります。さうすると世界各国、戸が閉つてゐる。この戸といふことは閥の事でありまして、門閥だとか、政黨閥だとか、資本閥だとか、學閥だとか、宗教閥などいふものが戸であります。

その戸を開けて、伊奘諾命が曰れますには、「我が愛くしき」と云ふ事は、要するに地球の國魂も世界一般の人民も、森羅萬象一切のものを皆愛し玉ひての御言葉であります。すなはち靈系と體系と相俟つて、美はしい世界を作らむとしたが、火の神いはゆる火力文明のために、世界は黄泉國と化つたのである。それで今一度元に還れと曰はれたのであります。この太元に還れといふことは、神の教

に從つて神が改心し、國魂が改心し、人民が改心して、上下一致し以て完全なる國を作らむとの意味であります。即ち地球上の惡の守護神に、改心してくれといふことになります。

そこで伊奘册命は答て曰るには、
『悔しきかも速く來まさずして、吾は黄泉戸喫しつ』とあります。これは残念なことを致しました。吾は黄泉戸喫した。モウ少し早く御注意下さらば、茲まで地球上の一切は腐敗せなかつたで在らうに、今日となつては實に曇り切り、濁り切り、腐り切りた世の中で手のつけやうもない。往きも戻りも、上げも下しも、二進も三進も行かぬ状態であるといふ意味であります。

即ち神も、吾も、人も、共に皆汚されて居ることでありますから、天から誠の神が御出下さいまして、地球が破滅せむとするのを直してやらう、完全なる天國を建設してやらう、と曰れますのは、誠に恐れ多い、尊い、忝ない神の御言葉でありますから、私は國魂即ち世界一般の神人が改心すれば、と曰ふ事を『還りなむ』と申すのである。しかし一寸黄泉神と相談して見ますから、それまで御待ち

を願ひますと答へられたのであります。この黄泉神といふのは、現代の暗黒世界を支配して居る各體主靈從國の主權者や大統領といふことでありまして、相論うといふことは、一應この事を相談して見ませう、多勢に理を説いて聞かせて、その意見を聽いて見ませうといふ事であります。

次に「甚久しく待ちかねたまひき」といふのは、この議論が一寸や、そつとの間に纏まらずに、やれ物質主義がよいとか、金銀爲本がよいとか、天産自給だとか、いろいろの議論があつて、二年や三年で盡き果てぬのであります。神様は今ぢや早ぢやというて早く改心せよと、明治二十五年から言ひ續けに言はれて御急ぎになつて居るが、黄泉神の議論は中々纏まらぬといふ如うな意味であります。

(大正九・一一・一 於五六七殿講演 外山豊二録)

(大正一一・二・一〇 舊一・一四 谷村眞友再録)

次に「左の御美豆良に刺させる湯津津間櫛の男柱一つ取り闕きて一つ火ともして入り見ます時に」といふ、この左は上で、右は下であつて、左の方といふのは靈のかがみといふ事であります。

湯津津間櫛といふのは、總ての亂れを解きわけるといふ意味で、奇魂の【くし】といふ事にもなるのであります。この櫛の齒の一本を闕て、その上に火を點して見られたものであります。即ち暗黒世界に一寸靈の火をつけて見られた。一つ火は一つの目で、日本の日の丸の國旗といふことになります。この火といふものは、皆のものが明光を尋ねて慕ひ寄つて來るといふ意味になるのであります。即ち夏の蟲が火を見て寄つて來るとか又航海者が一つの燈臺を見て常に港へ寄つて來るといふやうなもので、誠の神の靈智靈光の發動であります。

【くし】は明智を以て照すといふ事で、日の神の御光といふ意味になります。即ち日は天に一つしかない如うに天津日嗣も、世界に一人しか居られないのであります。いはゆる日の大御神の御聖徳を輝かし奉るといふことが一つ火といふ意味になるのであります、この日の大御神の大御心を以て、世界中を調べて見る

すなは 即ち日本の國の八咫の鏡で照して見ると、蛆がたかつてとどろいて居つたのであります。人間の形をして居つても、その心は蛆と同じであるといふ事で、勝手氣儘なことをしたり、又言つたりして居るといふことであります。

次に「御頭には大雷居り」といふ事は、頭すなはち體主靈從國の主權者とか、大統領とかのことで大きな雷とは、惡魔とか、また強い不可抗力とかいふことであります。よく人が叱られた時には、雷が落ちたと申しますが、多人數の中に天から雷が落ちたといふ意味であります。

それから「御胸には火雷居り」といふことは、言靈上、頭は天で、胸は大臣で、火の雷とは悪い事を考へて居るものが澤山に潜んで居る事であります。これを火の雷といふのであります。

次に「腹には黒雷居り」と云ふことは、よく人の悪いものを指して腹黒いといふやうに、國民の中堅が惡に化つて居るといふ事でありませう。

次に「御陰には拆雷居り」といふのは、國民にたとふれば、百姓とか勞働者と

いふ事で、拆くといふのは引裂くといふ意味であります。

次に

「左の御手には若雷居り、右の手には土雷居り」といふ事は、即ち左の手は神であれば天津神であり、人民であれば上流社會といふことで、又右の手といふのは神であれば地津神であり、人民にたとふれば下等社會といふ事になります。また若雷の若といふのは本當に未だ熟せない、思想が固まらぬといふことで、富豪階級の青年とか、大學生とか、華族の令息とかいふ意味で、いはゆる上流社會の若者の精神行爲が荒れずさんで居るといふ事であり、次に土雷の土は百姓といふ意味で、地主と小作人との軋轢が絶間なくあるといふやうなことであります。

「左の足に鳴雷、右の足に伏雷居り」と云ふ、この鳴雷といふのは、日本でも外國でも、軍隊の中に鳴り渡る悪い思想が、空から下る大雷悪神の如く、傳はつて居るといふ意味であります。右の足に伏雷といふのは、伏せてある悪魔といふことで、雷の中でも最も恐ろしいものであります。即ち人民にたとへると悪化せる労働者とか社會主義者などといふことで、悪思想の労働者がダイナマイトや其他を以て、破壊的陰謀を企てて、隠れて時期を待つて居るといふやうな意味であり

ます。實に今の世の中はこの通りになつて居るのであります。何千年前に書かれたものが今日によく適合して居るのであります。

實にこの古事記は何時讀んでも適合するものであります。徳川時代にも適合すれば、現代にも適合し、將來のことにも當はまるもので、古今を通じて謬らざる所の實に尊き神文なる所以であります。

今日吾人が天下國家の爲に、神の大御心を奉戴して、我が同胞を初め世界を覺醒し、以て天國淨土の安樂國を建設せむとする、眞如の大活動を天下擧つて阻止妨害せむとするは、恰もこの八種の雷神に攻撃されて居るので在ります。大本は一つ火、すなはち靈主體從の神教を天下に宣傳するや、頭に生れる大雷なる大壓迫が大本の頭上に落下して、天下無二なる純忠純義の神諭の發行を禁止し、今日到る處に、大本信仰者に妨害を與へ、神靈界を購讀せぬが汝の爲だとか、大正日日新聞を讀まないが良いたとか、百方手を盡して吾人至誠の行動を極力妨害しつつあるのは、頭に大雷鳴り居ると同様の意義であります。

次に「御胸には火の雷居り」と云ふ事は、今日學者階級とか、知識階級とか、

大宗教家とか云ふ所の偽聖者が、擧つて大本の出現を忌み嫌ひ、百方火の如き激烈なる反對演説や、反對論を新聞や雑誌書籍等に掲載し、以て天下の思想界を攪亂せむとする石屋の手先が口の續くかぎり筆の續く極み、大々の妨害しつつあるは、即ち胸に居る火の雷であります。大本の機關新聞雑誌を教育家は讀むとか、軍隊内には入れては成らぬとか、吾人の正義公道の宣布を遮斷せむとするは、いはゆる火の雷居りと云ふ事であります。

次に「御腹には黒雷居り」と云ふ事は、大本の内部へ、ある種の野心家が或る目的の爲に、表面信者と見せ掛け、所在利己的行動を企畫して、神界より看破され、除名の處分を受けたものが、百方有りもせぬ事を、犬糞的に喧傳する悪人輩の澤山潛伏して居る事でありませぬ。現在の大本の内部にも、表面は熱心な信者らしく見せ掛け、神様を道具に使つて役員となり、各地の教信徒を籠絡しつつ在るのも、いはゆる大本に於ける「御腹には黒雷居り」の意味であります。

大本内部へ深く浸入し神様を擔ぎ出して自己利益のために蠢動する偽信者や、偽役員が蛆蟲然として、平氣な顔をして活動して居り、幹部の役員を、目の敵の

如うに言ひ罵る不正者の現出し、又は潜在しつつあるのは即ち黒雷が居ると云ふ事でありませぬ。國家にしても、又これと同様である事を忘れてはならぬのであります。

次に「御陰には拆雷居り」といふ意味は、之を大本にたとへると、青年の中に潜んでゐる不正分子が種々の良からぬ言行を敢てし、折角研ぎかけた善良分子までも悪化せしむる如き行動を採り、信者の信念力を一角から、破壊せむとする様な下級の連中である。大本の基礎となり、將來の柱石となる連中の、悪化的行動がいよいよゆる拆雷居りといふ事である。之を現代の國家に譬ますと、下級農民や労働者階級の不良分子の悪化的行動であります。

次に「左の御手に若雷居り」といふ事を大本に於て對照して見ると、幹部の位置にある若手連中の誤解的行動である。あまり考へ過ぎ氣を利かし過ぎて、間の抜けた言行を敢てするのが、左の手の若雷であります。之を世界に對照すると、若年の士官や、法官や、大學生の、天地惟神の大道を無視する連中のことである。廣い天下には三人や五人は無いとも限らない。大本にも、一人や二人は、無いと

も言はれぬのであります。

次に「右の御手には土雷居り」と云ふ事は、之を大本内で譬ると、地方の若い信者や、青年の中の不良分子であつて、その言行は常に大本の經綸を、大々の妨害する連中の事でありませう。之を世界に譬ると、各地方に散在する労働者とか、工夫とか、小作人とかの不健全な分子の、不良な計畫を企ててをる連中の悪行悪言であります。

次に「左の御足には鳴雷居り」と云ふ事は、大本で言へば、悪社會と戰鬥する所の言論機關を云ふので、布教者や新聞社員等に當るので、その中に不良分子が混入して、一生懸命に盡力してゐながら却つて神界の御經綸の妨害して居るもの、の潛み居ると云ふ事でありませう。之を世界に對照する時は、陸海軍の中にも種々の危険なる思想や主義が潛入して居ると言ふ事でありませう。

次に「右の足には伏雷居り」と云ふ事は之を大本で譬ると、「禍は下から」と云ふ譬の通り、神の道も、人の道も、何も分らぬ不良なる偽信者が幹部から何か一度親切上から忠告を受けると、その親切を逆に感受し、非常に立腹して何か幹

部の連中に缺點でも在つたら、之を發表てやらうと自分の過失を棚へ上げて置いて、上の役員ばかりを恨んで居る連中の如うなものであります。之を世界に對照する時は、政府顛覆の陰謀を企てて居るとか、爆彈を密造して、機を見て暴動を開始せむとか、常に考へてをる不良分子が世界には潜んで居る、といふ意義を指して、『右の足には伏雷居り』と言ふのであります。

『是に伊奘諾命、見畏みて逃返ります時に、其妹伊奘册命、吾に辱見せたまひつ、と言したまひて、即ち黄泉醜女を遣はしめて追はしめき』

教組の御神諭に『神は世界の人民を助けて、松の世神の世と立替へて、立派な水晶の世界に致してやり度いと思つて、三千年も世に隠れて居りたが、モウ斯うして置いては世が立たぬやうに成りたから、神が表に現はれて三千世界を善一筋の五六七の神政に致して、神も、佛事も、人民も勇んで暮す、結構な神國の世に致して喜ばしたいと思つて苦勞を致して居るが、神が思つたよりも非道い餘りの曇り様で、そこら邊りが汚つて片足踏み込む處も、指一本突く場所も無いとこまで腐りて居るから、神も手の付けやうが無いなれど、神は世界を助けたいのが、

一心の願ひであるから、泥にまみれて人民を助けたさに世に落ちて苦勞艱難を致して居るぞよ』との御言葉は古事記御本文の『見畏みて』と云ふ事である。『逃げて返ります時』と云ふ事は、餘りの矛盾撞着に呆れられた事である。例へば至誠至忠思國の爲に、日夜辛酸を嘗めてをる吾々に對して、却て危険人物扱ひをなし布教先まで、監視を附せられるが如きは實に當局の本心なるかを疑はねばならぬ様になるのである。

斯様なる社會の矛盾に、神様も驚いて跣足で御逃げになると云ふ事が『見畏みて逃返ります』と云ふ事になるのであります。

(大正九・一一・一 於五六七殿講演 外山豊二録)

(大正一一・二・一一 舊一・一五 谷村眞友再録)

第四二章 言靈解四(三九二)

「其妹伊奘册命吾に辱見せたまひつと言したまひて、即ち黄泉醜女を遣はして追はしめき」と云ふ事は、以上の如くに亂れ果てたる醜状を、神の光なる一つ火に照らされ、面の皮を曳剥られて侮辱されたと言つて、大本であれば心に當る醜惡なる教信徒が一生懸命に大本や教主に反抗すると云ふことであり、世界で言へば、益々立腹して大本を壓迫し、窮地に陥れむとする人物の出現すると云ふ事であるから、誠の教を開くと云ふ事は、随分六ヶ敷事業であります。今日のやうな無明闇黒の社會に容れられる様な教なら別に苦勞艱難は要らぬ、四方八方から持て囃されるで在らうが、その様な教なら現代を覺醒し、人心を改造する事は出来ない。國家を泰山の安きに置き奉らむとするの志士仁人は凡ての迫害と戦ひ、總ての惡魔に打ち克ち、身を以て天下に當るの勇猛心を要するのであります。黄泉醜女は決して悪い魔女の事では無い。今日の人間は上下共に男も女も、八九分通りまでは醜女であります。何處にも一點の男子らしき、勇壯なる果斷なる意氣を認むる事は出来ぬ。斯ういふやうな黄泉醜女らが、大本の一つ火の明光に照られて、夏の蟲の如くに消しに來ては却つて自分が大怪我をするのであります。今日の大本は

四方八方から攻め立てられ、人民を保護す可き職に在る人々までが、時には逆様に攻撃妨害を加へむとして居るのであります。是が大本を四方突醜目で見てをると云ふのであります。

然し至誠思國の吾々大本人は、所在總ての壓迫と、妨害に打ち克つ爲に、一つの力を貯へねば成らぬ如く、世界に對しても我國は、充分の準備を整へねばならぬ。即ち神典に所謂黒御鬘を投げ打つて掛らねば成らぬのであります。

爾伊奘諾命黒御鬘を取りて投げ棄て玉ひしかば、乃ち蒲子生りき」

之を今日の大本に譬へると、幽玄美はしき神の御教を、天下に宣傳する事を

「投げ棄て玉ひき」といふのであります。「蒲子生りき」と云ふ事は、美はしき

誠の新信者が出來たと云ふ事でありませう。黄泉神醜女は、また之に向つて一人々々

に種々の壓迫妨害を加へると云ふ事が、是を拾ひ食む」と云ふのであります。

何れの教子にも悉く四方突軍が御蔭を墮さしに廻つて居る。その間に又一つの戦

闘準備に着手する事を「逃げ出でますを」と云ふのであります。

「猶追ひしかば、亦其の右の御角鬘に刺せる、湯津津間櫛を引闕て、投げ棄てた

まひしかば乃ち筍生りきすなは たかむらな」

蒲子あびかつらのみとも言ふべき信仰しんかうの若い信者しんじゃを、片端かたつばしから追詰め引落ひきおとしにかけ乍ながら、なほもそれに飽あき足たらずして、大々だいだいてき的妨害ぼうがいを加くはへむとの亂暴らんぼうには、神かみも終つひに堪忍かんにん袋ぶくろの緒をが斷きれたので、右みぎの御角みづら髪かみにまかせる湯津津ゆづつ間櫛まぐしを引闕ひきかぎて、乃すなはち神界しんかいの一輪いちりん咲さいた梅つめの花はなの經綸しぐみを表顯あらはして、所在あちこち四方よもつし突醜女こめむかに向つて宣傳せんでんした所ところが、終つひに箏たかむらと云いふ、上流貴紳じやうきしんの了解れうかいを得え、至誠しせい天てんに通つうじて、いよいよ大本おほもとの使命しめいの純忠じゆんちゆう純良じゆんりやうなる事ことを、天下てんかに知しらるるやうに成なるのを箏生たかむらなりきと云いふのであります。是これは全地ぜんち球上うじやうの出來事できごとに對たいする御神書ごしんしょであれども、總すべての信徒しんとに了解れうかいの出來易できやすいやうに、現今げんこんの大本おほもとと將來しやうらいの大本おほもとの使命しめいを引用いんようして、説明せつめいを下くだしたのであります。

是これを拔ぬき食はむ間あひだに逃行にげいでましき」

またまた邪神じやしんの頭株あたまがぶが、大本おほもとの折角せつかくの經綸しぐみを破壊はくわいせむと、百方ひやうほう苦心くしんしつつ在ある内に、いよいよ神國しんこくの危急ききふを救すくふ可べき、諸々もろもろの準備じゆんびを整ととのへ、何時なんどきにても身命しんめいを國こく家に捧ささげ奉たてまつつて、君國くんこくを守まもるべき用意よういを整ととのへて行ゆくと云いふ事ことが、是これを拔ぬき食はむ間あひだに逃行にげいでましき」と云いふ意義いぎであります。

□ 旦後には其の八種の雷神に千五百の黄泉軍を副へて追はしめき」

之を大本に譬へて見ると、八種の雷（前に詳述）に加ふるに社會主義者または

佛敎家、基督教徒などの、數限りなき露骨なる運動を起して、力限り攻撃の矢を

向け来る事でありませす。之を世界に對照する時は、前述の八種の惡魔の潜在する

上に、千五百軍即ち或る國から、日本の靈主體從なる神國を攻めて來ると云ふ事

になるのであります。黄泉軍と云ふことは、占領とか、侵略とか、利權獲得とか、

良からぬ目的の爲に戦ひを開く國の賊軍隊の謂ひであります。

□ 爾御佩せる十拳劍を抜き、後手に揮きつつ逃げ來ませるを」

靈主體從の神軍は戦備を整へながら即ち十拳劍を抜きながら、充分に隱忍し敢

て戦はず、なるべく世界人類平和の爲め、治國安民の爲に言向平和さむとする意

味を指して「後手に揮きつつ逃げ來ませる」と云ふのであります。

□ 其の坂本なる桃の子を三個取りて待撃ちたまひしかば悉く逃げ歸りき」

【ヒラサカ】の【ヒ】の言靈は明徹也、尊嚴也、顯幽皆貫徹する也、照智也、

光明遍照十方世界也、日の朝也、大慈大悲五六七の神德也。【ラ】の言靈は、高

皇産靈神也、靈系の大本也、無量壽の大基也、本末一貫也。

【サ】の言靈は事に事ある也、榮ゆ也、水の音也、水の精也。

【カ】の言靈は、蒙せ覆ふ也、光り輝く也、懸け出し助くる也。

以上【ヒラサカ】四言靈の活用を約むる時は、尊嚴無比にして六合を照し、世

界を統一し以て仁慈を施し、靈系の大本神たる日の大神の本末一貫の徳と、萬世

一系の皇徳を備へ、に變ある時は、水の精なる月光世に出で、皇國の榮えを守

り、隠忍したる公憤を發して、驅け出し向ひ戦ひ、神威皇徳を世界に輝かすてふ、

神軍の謂ひであります。

また坂本は神國の榮え行く大元といふ事であります。大本といふも坂本の意義

である。桃は百の意義で、諸々の武士といふ事であります。靈主體從日本魂の種

子が乃ち桃の實であります。『三箇取りて待ち討ちたまひし』とは日本男子の桃

太郎が、智仁勇に譬へたる、猿犬雉を以て、戦ふと云ふ事であります。猿は智に

配し、雉は仁に配し、犬は勇に配するのであります。また三ツと云ふ事は、變性

女子なる三女神の瑞靈の御魂であります。そこで三ツの御魂即ち十拳劍の精なる

神の教に依て悠然として、待ち討ちたまうた時に、黄泉軍は悉く敗軍遁走して、了つたと云ふ意義であります。

爾に伊奘諾命桃子に告り曰はく。汝吾を助けし如、葦原の中つ國に、有らゆる現在人民の苦瀨に落ちて苦患む時に、助けてよと告りたまひて、意富加牟豆美命といふ名を賜ひき。

茲に於て日の大神様から、聖なる至誠の團體や、三つの御魂に向つて、能く忠誠を盡し、國難を救うて呉れたと、御賞めになり、なほ重ねて世界人民が戦争の爲に、塗炭の苦みを受けるやうな事が、今後において萬一にも出来たら、今度のやうに至誠報國の大活躍をして、天下の萬民を救うて遣つて呉れよ。汝にはその代りに意富加牟豆美命と名を賜うと仰せになつたのであります。この「オホカムツミ」の言靈を奉釋すると次の如くであります。

【オ】の言靈は、靈治大道の意である。

【ホ】の言靈は、透逸卓出の意である。

【カ】の言靈は、神靈活氣凜々の意である。

【ム】の言靈は、組織親睦國家の意である。

【ツ】の言靈は、永遠無窮に連續の意である。

【ミ】の言靈は、瑞の身魂善美の意である。

之を一言に約むる時は、靈德發揚神威活躍平和統一高照祥光瑞靈神劍發動の神といふこととあります。即ち惟神の大道を天下に宣傳する至誠至忠の聖團にして、忠良なる柱石神なりとの御賞詞であります。ア、現代の世態に對し、神の天命を奉じて日本神國のために身心を捧げ、麻柱の大道を實行する大神津見命は、今何處に活躍するぞ。天下の濁流を清め妖雲を一掃し、災禍を滅し、世界萬有を安息せしむる神人は、今や何處に出現せむとする乎。實に現代は黄泉比良坂の、善惡正邪治亂興廢の別る大峠の上り口であります。

(大正九・一一・一 於五六七殿 外山豐二録)

(大正一一・二・一一 舊一・一五 谷村眞友再録)

第四三章 言靈解五（三九三）

『最後に其妹伊奘册命、身自ら追來ましき』

今までは、千五百の黄泉軍を以て攻撃に向つて來たのが、最後には世界全體が一致して日の神の御國へ攻め寄せて來たと云ふ事は、伊奘册命身自ら追ひ來ましきといふ意義であります。是が最後の世界の大峠であります。すなはち神軍と魔軍との勝敗を決する、天下興亡の一大分水嶺であります。

『爾ち千引岩を、其の黄泉比良坂に引塞へて、一日に千頭絞り殺さむと申したまひき』

千引岩とは、非常に重量の在る千萬人の力を以てせざれば、微軀とも動かぬ岩といふ意義であります。千引岩は血日國金剛數多といふ意義で、君國を思ふ赤誠の血の流れたる大金剛力の勇士の群隊と云ふことであつて、國家の干城たる忠勇無比の軍人のことであります。また國家鎮護の神靈の御威徳も、國防軍も皆千引岩であつて、侵入し來る魔軍を撃退し又は防止する兵力の意義であります。

「中に置き事戸を渡す」と云ふ事は、靈主體從の國家國民と、體主靈從の國家國民とは、到底融合親睦の望みは立たぬ。堂しても天賦的に、國魂が異つて居るから、神國の行り方、異國（黄泉國）はその國魂相應の行り方で、靈主體從國と體主靈從國とを立別ると云ふ神勅が事戸を渡すと云ふ事でありませぬ。

善一筋の政治や神軍の兵法は、體主靈從國の軍法とは根本的に相違して居るから、一切を茲に立別て、靈主體從國は靈主體從國の世の持方、體主靈從は體主靈從の世の治め方と、區別を付けられた事でありませぬ。要するに神國の土地へは、黄泉軍の不良分子は立入るべからずとの御神勅であります。人皇第十代崇神天皇様が、皇運發展の時機を待たせ玉ふ御神慮より、光を和げ塵に同はりて、海外の文物を我國に輸入せしめ玉ひし如く、何時までも和光同塵の制度を、墨守する事が出来ないもので、斷然として、事戸を渡さねば成らぬ現代に立到つた如き有様であります。【事】は言辭論說の意味で、【戸】は閉塞するの用であります。要するに日本は皇祖大神の御聖訓を以て、治國安民の要道と決定され、一切體主靈從國の不相應なる言論を輸入されないと云ふ意義が、乃ち事戸を渡し給うと云ふ事

であり、之を夫婦の間に譬へますと離縁状を渡して、一切の關係を斷つと云ふ事
であります。何時までも和光同塵の方針を採るのは我々の今日の處世上に於ても
一考せなくては成らぬ。惡思想や貧乏神には、一日も早く絶縁するが、家の爲め
にも一身上の爲にも得策であります。今日の我國家も、一日も早く目覺めて我國
土に不相應なる思想や、論説や哲學宗教なぞと絶縁して、所謂事戸を立て渡し度
いもので在ります。

「伊奘册命宣りたまはく愛くしき我那勢命如此爲たまはば汝の國の人草、一日に
千頭絞り殺さむとまをしたまひき」

黄泉大神の宣言には、我々の愛慕して止まない、神國兄の國の神宣示を以て、
斯の如く黄泉國の宗教學説を排斥さるるならば、此方にも一つ考へがある。汝の
國の人民の、上に立つて居る所の頭役人どもを黄泉軍の術策を以て、一日に千人
即ち只一擧にして、上の方の役人どもを馘つて了つてやる、即ち免職をさせて見
せようと云ふ事である。

惟神の大道即ち皇祖の御遺訓に依つて思想界を統一せむとする守護神があれば、

直に時代に遅れた骨董品格にして、役人の頭に採用せないのでみならず、直に首を
馘られて了ふから、伊奘諾命即ち日本固有の大道を、宣傳實行する事を、避けむ
とする利己主義のみが發達するのであります。

是皆黄泉軍、體主靈從魂の願使に甘んずる腐腸漢計りに成つて居る現代であり
ます。我々は伊奘諾命の神教、即ち天神天祖の聖訓を天下に宣傳し實行せむとす
るに當つて、黄泉の軍の體主靈從國魂の守護神から壓迫され、日々千人即ち赤誠
の信者を、大本より離れさせむとして、黄泉神の手先が、百方邪魔をひろぐのも
同じ意味であります。

たとへ日本の神の教が結構と知り、又大本の出現が、現代を救ふには大必要で
ある事を、充分了解し乍ら世間を憚り且つ又、舊思想家と云はれ、終には現今の
位置より馘られ、社會的に殺され葬られて了ふ事を恐れて世間竝に至誠貫天的の、
社會奉仕の大本を惡評し、かつ壓迫するを以て、安全の策と心得て居る守護神許
りで表面上大本の信者たる事を標榜するが最後、直に其の赤誠人は軍人と言はず、
教育家と言はず會社員と言はず、馘られ職を免ぜられると云ふ事が一日に千人

絞^{くびき}り殺^{ころ}さむとまをしたたまひき』と云^いふ事^{こと}になるので在^あります。

「爾^{こゝ}に伊^い奘^ざ諾^な命^{めい}詔^のり玉^{たま}はく、愛^{うつ}くしき我^{あが}那^な邇^に妹^も命^{めい}、汝^{いま}然^{まし}爲^{しか}たまはば吾^{あれ}はや、一^{いち}日^{にち}に千^ち五百^{いほ}産^{うぶ}屋^や立^たててむと詔^のりたまひき。是^{これ}を以^{もつ}て一^{いち}日^{にち}に必^{かな}らず千^{せん}人^{にん}死^しに一^{いち}日^{にち}に必^{かな}らず千^ち五百^{いほ}人^{にん}なも生^{うま}るる」

茲^{こゝ}に伊^い奘^ざ諾^な命^{めい}は、我^{あが}愛^{あい}する那^な邇^に妹^も命^{めい}よ、思^し想^{さう}問^{もん}題^{だい}を以^{もつ}て日^ひの御^み國^{くに}を混^{こん}亂^{らん}せしめ猶^なほ亦^{また}、今^{いま}一^い致^いつちして武^ぶ力^{りよく}を以^{もつ}て、我^{わが}國^{くに}を攻^せめ給^{たま}ふならば、我^{われ}にも亦^{また}大^{だい}決^{けつ}心^{しん}がある。吾^あは惟^{かむ}ながら神^{かみ}の大道^{だいたう}を發^{はつ}揮^きして、以^{もつ}て一^{いち}日^{にち}に千^ち五百^{いほ}の産^{うぶ}屋^やを立^たてて見^みませうと仰^{あふ}せられた。御^ご神^{しん}諭^ゆにある産^{うぶ}の精^{せい}神^{しん}の人民^{じんみん}、生^{うま}れ赤^{あか}子^この心^{こころ}の人民^{じんみん}を養^{やう}成^{せい}する靈^{れい}地^ちを、産^{うぶ}屋^やと云^いふのであります。

【チ】は血^ちなり赤^{せき}誠^{せい}也、靈^{れい}主^{しゆ}體^{たい}從^{じゆう}の意^い也、父^{ちち}の德^{とく}也、乳^{ちち}也、鹽^{しほ}也。

【イ】は結^{むす}び溜^{たま}る也、身^みを定^{さだ}めて不^ふ動^{どう}也。

【ホ】は、上^{うへ}に顯^{あら}はる也、太^{たい}陽^{やう}の明^{めい}分^{ぶん}也、照^{てり}込^こみ也、天^{てん}の心^{こころ}也。

【ウ】は結^{むす}び合^あふ也、眞^{しん}實^{じつ}金^{こん}剛^{かう}力^{りき}也、親^{おや}の働^{はたら}き也。

【ブ】は茂^{しげ}り榮^{さか}ふ也、世^よの結^{むす}び所^{ところ}也、父^ふ母^ぼを思^{おも}ひ合^あふ也。

【ヤ】は固有の大父也、天に歸る也、經綸の形也。

以上の「チイホウブヤ」の六言靈を納むる時は、神の血筋因縁の身魂が集り合ひて、赤誠の實行を修め、靈主體從の本領を發揮し、天の父たり、地の母たるの位を保ちて、仁惠の乳を萬民に含ませ、大海の鹽の如く、總ての汚れを淨め、總ての物に美はしき味を與へ腐敗を防ぎ、有爲の人材一團と成りて、我身の方向進路を安定し、以て邪説貪欲に心を動かさず、俗界の上に超然として顯はれ、大神の大御心を宇内に照り込ませ、太陽の明分即ち日の神國の天職を明かに教へ覺し、至眞至實の大金剛力を蓄へ、世界の親たるの活動を爲し、上下の階級一つの眞道に由りて結合し、日々に結びの力を加へ、終には世界を統一結合し、父母として萬民慕ひ集まり固有の大父なる國祖大國常立神の御稜威を仰ぎ、天賦の靈性に歸りて世界を經綸し以て、三千世界を開發し、救濟する聖場の意義であります。要するに、地の高天原なる綾部の大本の、神示の經綸は、乃ち千五百産屋に相當するのであります。大本の御神諭には「綾部は三千世界の世の立替立直しの地場であるから、日の大神様の御命令によりて、世界の人民を天の大神の誠一とつで此

の世を治める結構な地の高天原であるぞよ」と示されてあるも、所謂千五百産屋の意義にして、生れ赤子の純良なる身魂を産み育て玉ふ神界の大経綸の中府であります。故に何程黄泉大神の精神より出でたる、過激的思想も侵略的の體主靈從國軍も、綾部に千五百産屋の儼存する限りは、如何ともする事が出来ないのです。亦之を文章の儘に解する時は、一日に千人死して千五百人生れ出づる時は、結局人口は年を追うて増進する故に、之を天の益人と謂ふのであります。天の益人は天下國家の爲に利益を計る、至誠の人の意味にも成るのであります。我大本の誠の信徒は、皆一同に天の益人とならねば成らぬ。亦日本全體を通じて天の益人たるの行動をとつて、國家を開發進展せしめ、黄泉國なる國々に其の範を垂れ示さねば、神國の神民たる天職を盡す事は出来ぬのであります。今日社會主義や過激派にかぶれた、不良國民が黄泉軍の眷屬となり、大官連中に不穩なる脅迫状を送つたり、大本の幹部連中に向つて、同様の脅迫状が舞ひ込んで來るのも、千人を殺さむと白したまひきの意味であります。米國加州の排日案が通過したのも、西伯利亞滿洲支那朝鮮の排日行動も、排貨運動の實現も、各地の小吏が大本

に極力反對し、且つ我行動を妨害しつつあるのも、皆黄泉軍の一日に千人くびらむ、と白し玉ひきの實現であります。

太陽面に、地球の七八倍もある圓形にして巨大なる黒點が出現し、約七萬哩の直徑を有し、吾人の肉眼を以て明視し得る如くに成つて居るのも、日の若宮に坐す伊奘諾命を、黄泉軍の犯しつつある表徴であります。亦この黒點が現はれると、其の年及び前後數年間は、從來の記録に依つて調べて見ると、第一氣候が不順で、惡病天下に蔓延し、饑饉旱魃等は大抵その時に現はれ、人心の騷擾極點に達する時であります。天明の大饑饉も、太陽の黒點と時を同じうして現はれて居る。今日此頃の天候の不順も亦この黒點の影響である。況んや今度の如き、開闢以來未曾有の大黒點に於ておやであります。ア、一天一日の太陽の黒點、果して何を意味するものぞ。伊奘諾命の持たせ玉へる一ツ火の光も、半ば消滅せむとするには非ざるか、我等は一日も早く千五百産屋は愚、八千五百産屋萬産屋を建て、以て君國の爲めに大活動を開始せざるべからざるを切に感ぜざるを得ないのであります。

故其伊奘册命を、黄泉津大神と謂す。亦其の追及しに由りて、道敷大神と稱すとも云へり」

【チシキ】の大神の言靈を解すれば、

【チ】は血也、數の兒を保つ也、外に亂れ散る也。

【シ】は却て弛み撒る也、世の現在也。

【キ】は打返す也、打ち砕く也。

之を一言に約する時は、數多の兒即ち千五百軍を部下に有し、血脈を保ち外に向つて亂を興し終に自ら散亂し現在の世の一切を弛廢せしめ、以て正道を打返して、邪道に化し、至仁至愛の惟神の、生成化育の道を打砕く、大神と云ふ事であります。現代は國の内外を問はず、洋の東西を論ぜず道敷の大神の最も活動を續行し玉ふ時であります。

亦其の黄泉の坂に塞れりし石は道反大神とも號し塞坐黄泉戸大神とも謂す」

【チカヘシ】の大神は「ウチカヘシ」の大神と云ふ事であり、又邪道を塞ぎて邪道を通せしめずと云ふ意義であります。古來町の入口や出口には、塞の神と

謂うて巨大なる石が祭つて在つたもので在ります。是も邪惡を町村内に侵入させぬ爲の目的であります。吾人の家屋を建つるにしても、礎石を用ゐ、又その周圍に石を積み、又は延べ石を廻らすも、皆惡鬼邪神の侵入を防止するの意義より、起元したもので在ります。今日の思想界にも此の大石が澤山に欲しいものであります。

故其の所謂黄泉津比良坂は、今出雲國の伊賦夜坂とも謂ふ

伊賦夜坂の言靈を解すれば、

【イ】は強く思ひ合ふ也、同じく平等也、亂れ動く也、破れ動く也。

【フ】は進み行く也、至極鋭敏也、忽ち昇り忽ち降る也、吹き出す也。

【ヤ】は外を覆ふ也、固有の大父也、焼く也、失也、裏面の天地也。

【ザ】は騒ぎ亂る也、に事在る也、降り極る也、破壊也。

【カ】は一切の發生也、光輝く也、懸け出し助くる也、鍵也。

【イフヤザカ】の五言靈を約言する時は善惡正邪の分水嶺であります。男神の

伊奘諾命と女神の伊奘册命と、互ひに自分の住し、かつ占有する國土を發展せし

めむと、強く思ひ合ひて争ひ賜ふ所は同じく平等にして何の差別もなく、只々施政の方針に大なる正反對の意見あるのみ。然れど女神黄泉神の御經綸は惟神の大道に背反せるが故に、終に海外の某々の如く悉く大動亂大破裂の慘状を露出したのは、近來事實の確證する所であります。

男神の神國は、日進月歩至極鋭敏にして、終に世界の大強國の仲間入りを爲したり。されど忽ち昇り忽ち降るの虞れあり。黄泉國の二の舞を演ぜざる様、注意を要する次第であります。「ヤ」は日本にして、何處までも徳を積み輝きを重ねつつ、外面を覆ひ、以て克く隱忍し、天下の大徳を保ちて天下に臨むと雖も黄泉國の八雷神や、千五百の妖軍は何の容赦も荒々しく、焼也、天也、の活動を成し、裏面の天地を生み成しつつあり。故に世界各国は殆ど騒亂の極みに達し正義仁道は地を拂ひ、事に在りし暴國なり。茲に仁義の神の國の一切の善事瑞祥發生して、仁慈大神の神世に復し治め、暗黒界を光り輝かせ、妖軍に悩まされ滅亡せむとする、國土人民に對しては身命を投げだして救助し治國平天下の神鍵を握る可き、治亂興亡の大境界線を畫せる、現代も亦これ出雲の國の伊賦夜坂と謂ふべ

きものであります。(完)

(大正九・一一・一 午前 五六七殿講演 外山豊二録)

(大正一一・二・一一 舊一・一五 谷村眞友再録)

(第三七章 第四三章 昭和一〇・三・四 於綾部穹天閣 王仁校正)

〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕

靈界物語 第八卷 靈主體從 未の巻

終り